
魔法少女リリカルなのはStrikerS赤い彗星～復活のシャア・アズナブル～

名前募集中

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikerS 赤い彗星の復活のシャア・アズナブル

【Nコード】

N8493K

【作者名】

名前募集中

【あらすじ】

シャア・アズナブル、彼が起きた場所は、月が二つある世界。彼が目にするのは不思議な力。魔法。おかしな環境。境遇。聞いた事の無い言葉の数々。そして求めるのは。

逆襲のシャア

宇宙世紀0093年

シャア・アズナブルが駆るサザビーは、アムロ・レイのガンダムとの戦いに敗れてしまった。

しかし、アクシズが地上に落ちることはもはや決まりきっていること、それにも関わらず、アムロはガンダムでアクシズを押し上げようとした。

無謀な行為。

だが、ソレを見たネオ・ジオン、地球連邦のモビルスーツたちはガンダムと共にアクシズを押し返そうとした。

しかし、一般兵が乗るギラ・ドーガやジェガンはガンダムほどの硬さは無く次々と爆発していく。

そして、閃光が溢れ、ガンダム以外のモビルスーツは大気圏から脱出する。

これがサイコフレームの共振、人の心の光。

その時、シャアは思う。

父ジオンの名を使い、ネオ・ジオンを結成して

5thルナを落とし、アクシズを落とし。
地球人類に鉄槌を下す。

これでは、ザビ家と同じではないか。

意識が薄れいくさなか、シヤアはそれ以上のことを考えることはできなかつた。

逆襲のシャア（後書き）

なんかガンダムを上手に理解できてないかもしれません。

そこらへんはご了承承願いたいと思います。

誤字脱字が激しかったり、設定が違ったりするかもしれませんが、
広い心と温かい目で観覧ください。

その彗星、飛来する

シャア・アズナブル、彼が目を覚ました。

「…うっ、ここは」

周りは大自然、森と木に囲まれている。

「地球？だとしたら、この自然は」

自分の姿を見る。

その姿はネオ・ジオン総帥である時の軍服である。

「…なんだ、ここは…アムロは、ナナイは」

立ち上がり、服に付いた草を払う。

辺りを見回しても、一面の森。

「ええい、動くほかあるまい」

小走りで、森を抜けようと走る。

そして、ふと空を見上げた。

「馬鹿な！」

空に二つの月。

コロニーに月は無く。

地球には二つもない。

「ならばここはどこだと言つのだ…」

そう物思いにふける矢先に、音が聞こえた。

「ぬっ！」

ニュータイプ故の直感か、パイロット故の直感か、シヤアは前方に転がった。

シヤアの居た場所には、一筋のビームが通った。

「なんだというのだ！」

ビームが飛んできた林から、カプセル型の兵器が現れた。

「プチモビ…いや、それにしては」

再び、その兵器の三つ目からビームが発射される。

「ちいっ！」

シヤアは少し後ろに跳んで避ける。

綺麗に着地して、シヤアはその兵器を睨んだ。

「邪気が無い…無人だと!？」

シヤアが舌打ちをする。

なにか、武器があれば。

『All right.』

声がする。それは胸ポケットから。
その中から声のする何かを取り出した。

「これは…っ！」

再び、横に転がりビームを避けた。

そして、その声が聞こえたものとは、ペンダント。

その形は、サザビーにつけていたキャスバルのエンブレム。

『set up?』

「なに？」

『セットアップしますか?』

言語がいきなりやわらかいものとなった。

「ええい、この場を乗り切るほうが先決だ！」

『ですから、私を使ってください』

シヤアには、その言葉の意味がわかりかねた。

しかし、このままでは自身のエネルギー^{体力}が切れる方が先だ。

「ならば、その力見せてみる！」

『stand by ready . set up .』

ペンダントが光を放った。

光が収まると、シャアの手におさまっていたペンダントは形を変えていた。

「これは…馬鹿な」

それは、サザビーの装備の一つ、ビーム・ショット・ライフル。その形は寸分の狂いもない。大きさを除いては。

『マスターはまだ混乱があるようですから、この兵器だけを出現させました。』

ペンダントは、シャアの服の胸に張り付いていた。

「なるほど、この兵器だけを…つまりは他の兵装も出せるわけだな」

『その通りです…どうしますか？』

「これだけで良い…」

その言葉に確証は無い。
それは感。

「やってみなければわからん！」

アムロ・レイのセリフが、自然と口から出た。

その彗星、飛来する（後書き）

どうでしょうか第一話。

シャアのバリアジャケットは決まってるんですが、ここで出すべきではないとふんで、今回はビーム・ショット・ライフルだけを出しました。

皆さん賛否両論あると思いますが、次回もお楽しみに！

ジオンのエース

シヤアは、その手におさまるビーム・ショット・ライフルを構える。

『マスター、トリガーを』

「私が…サザビーなわけだな」

『YES.』

迷い無く、カプセル型の兵器にライフルを構える。

トリガーを引くスピードは一般兵とは比べ物にならないほどのスピード。

銃口から発射されるのは数多のエネルギー弾。

「凄いな、ビーム兵器が出るのか」

『マスターの魔力を使った魔力弾のようなものです』

「魔力？」

疑問があつたが今はそれを気にしている場合ではなかつた。

魔力弾は全て、カプセル型兵器の目の前で弾けて消えたのだ。

「エフィールドバリアだと!？」

『AMF反応、魔力弾は効果無し』

「ちい…」

『サザビーの一部ならばマスターに装備可能です』

カプセル型兵器のレーザーを、避けながら、シャアがひらめく。

「腕だ！」

『YES・Set up.』

シャアのライフルを持った右腕に赤い光の粒子が集り、サザビーのような厚い装甲を被った。

カプセル型兵器は、連続でビームを撃つが、シャアはすばやく避けながら近づく。

「当たらなければどうということはない！」

そして、ほぼゼロ距離。

「はぁあっ！」

『ビーム・ショット・ライフルを収納』

シャアの手にあるライフルが赤い光の粒子となって消えた。

カプセル型兵器の側面からコードのようなアームが現れるが、シャアのように早い。

厚い装甲が覆った右腕が、三度カプセル型兵器の目部分を殴る。

カプセル型兵器は凹んで、バチバチと火花を散らす。

『AMF破壊』

「もう一度ライフルだ！」

『Yes, my master.』

右手の装甲が消え、ライフルが現れた。

そのライフルを、カプセル型兵器の凹んだ装甲に無理やり差し込む。

『shield.』

シャアの左手に、サザビーのシールドが現れる。

そしてシャアはシールドを前に構え。

トリガーを引いた。

爆発が起こり、爆煙があたりに広がった。

「くうっ…どうだ？」

『—It's a direct hit. 《直撃ですね》』

爆煙が晴れた時、そこには先ほどの兵器の残骸だけがあった。

「終わったか」

『兵装を解除します』

「頼む」

シャアは、先ほど通りの姿になった。

その時、上空から桜色の閃光が降りてきた。

「ええい、増援か！」

シヤアが銃を構えようとしたとき。

「誤解です！私たちは時空管理局です！」

「時空管理局？」

『この世界の法律です』

「連邦か」

『そのようなものです』

シヤアは構えを解かずに、やってきた閃光の招待である人物を見る。
そのカラーリングは、自らのライバルに似ていた。

「白い悪魔、か」

シヤアは、忌々しくその名前を呟いた。

ジオンの赤い彗星 管理局の白い悪魔

時空管理局、そう名乗った人物が降りる。
それは少女、ツインテールで空を飛んでいる。

「あれも魔法か」

『Y S E』

少女は降り立ち、シャアの前に来る。

シャアと少女の身長差はかなりのものだが、少女はたじろぎを見せない。

「ほう、相当場慣れしているな」

『恐らくオーバーSランク魔導師』

「専門用語を勉強せねばな」

シャアがそう言うと、目の前にいた少女は少し遠慮気味に話します。

「えっと、少し良いですか？」

可愛らしい声で呼ばれ、シャアは軽く謝り少女を見なおす。

少女はシャアの顔を見て少し驚いているようだ。

「ああ、すまん…私もここに来たばかりで良くわからんだ」

「えっ!?!」

口を押さえて驚く少女。

「少しお話を聞きたいんですが？」

「なるほど、私も情報が欲しい」

そして、ここに来てからだけの話しをした。

少女が頷く。

「つまり、アズナブルさんは気付いたらここにいて、そのデバイスを持ってたんですね？」

「デバイス？」

『私のことです』

シヤアが頷く。

「難しいことだな」

「えっと、あの…聞きたいことかありますか？」

少し考える。

聞きたい事は数え切れないほどあるが、とりあえず脳内の大半を占めていることを言おうと決めた。

「そんな短いスカートで空を飛ぶのはあまり褒められたものではないな」

少女は真っ赤な顔をして俯く。

「んっ！」

上から、金色の槍がシャアを襲う。

「不意打ちかつ！」

後ろへステップして、その攻撃を避けたシャアは、上空を見上げる。
金髪ツインテールの少女が飛んでいた。

「なのは！」

金髪少女は、さきほどからいる少女の隣に立つ。
そして、金髪少女はシャアを睨んでいる。

『さきほどの攻撃は稲妻のようでした、恐らく魔力資質が雷なのだと思います』

「……………」

ふと、関係の無いことだが、1年戦争の時『真紅の稲妻、ジヨニー・ライデン』と言う男が居たと思い出す。
すぐ現実にかえり、金髪の少女を睨む。

「…なのは」

「ちょっと！フェイトちゃん、アズナブルさんは敵じゃないよ！」

金髪の少女は素っ頓狂な顔をした。

そして数分後。

「すみません！すみません！」

金髪の少女フェイト・テストロッサ・ハラウンはシャアに頭を下げている。

「なに、気にしないで欲しい」

シャアは内心、あの攻撃を避け切れなかった時のことを想像して肝を冷やす。

フェイトは泣きべそまでかいて謝っている。

「ほら、フェイトちゃん…アズナブルさんも許してくれるみたいだし」

さきほどの少女、高町なのはがフェイトをなだめる。

「アズナブルさん、そういえば…次元漂流者なんですよね」

「ああ…そういうものらしいな」

「私たちの家、っていうか…部隊に来ませんか？」

なのはの言葉に、フェイトが笑顔で言う。

「そうですね、故郷に帰れるかも知れませんし…さっきのお詫びもかねて」

そう言って落ち込むフェイトの頭を、シャアが撫でる。
フェイトは真っ赤な顔をしている。

「なるほど…わかった、君達の部隊、とやらに行こう」

シャアが軽く微笑む。

ジオンの赤い彗星 管理局の白い悪魔（後書き）

ようやく機動六課メンバーと合流です！

次回から本編と言っても過言ではありません、引き続きお楽しみください。

古代遺物管理部機動六課

機動六課までの道のりは、なのはとフェイトは魔法で空を飛んだ。一方シャアは、デバイスを使って、ドダイ改を出せると聞き、そのドダイ改に乗って機動六課へと飛んできた。

「シャア、それはなんなの？」

フェイトが聞く。

「これは私の世界の兵器だ。良くわからんが、私のデバイスはこういうものを出せるらしい」

「そのデバイス凄いですね」

なのはの言葉に、シャアはデバイスを見る。

「私のような年寄りにはわからんよ」

「何歳なんです？」

「34歳だ」

「ええッ!？」

なのはとフェイトの驚愕の音が、響いた。

そして、機動六課の部隊長室とやらに到着したシヤアは、二人がけのソファになのはと共に座る。

「どうも、私が八神はやて、この機動六課の部隊長です」

向かいに、フェイトとはやてが座る。

「シヤア・アズナブルだ」

「シヤアさん、でええんかな？」

シヤアは頷く。

「で、たしか、次元漂流してきたんやね？」

「どうやらそのようだ……」

「そこに住んでたん？」

話すかどうか悩むが、話したら帰れる可能性が少なからず上がるかもしれないなかった。

決心したシヤアは

「サイド3というコロニーで生まれた」

「えっと……コロニーがある世界は何個あるんや、近くにある惑星とかは？」

「地球という惑星だ」

はやて、なのは、フェイトが驚いたような顔をする。

「知っているのか？」

「は、はい、元々そっち生まれで…でも、コロニーなんて作られてませんよ!？」

シヤアは、少し考えてみた。

「君達が居た地球の暦を教えてくださいか？」

「西暦です」

「旧世紀…私は宇宙世紀0093という時代だ」

「違う時代？」

「そのようだ」

シヤアは足を組んで、背もたれに寄りかかる。
少し腕が触れたなのは顔が赤い。

「…そうですね、シヤアさんはデバイスを持って、ガジェットを倒したんですよね？」

良くわからない単語が出てきた。

「ガジェット？」

「はい、えっと…これです」

宇宙にいきなりモニターが現れた。

「驚いたな、これは」

「…これですね」

そのモニターに映っていたのは、先ほどのカプセル型の兵器。

「ああ、確かに戦った…あれは？」

「私たちはガジェット？型って呼んでます」

「？と？もいるのか？」

「はい、今のところはその三機を発見しています」

「すまん、話しの腰を折ってしまった…そして、先ほどの話しは？」

はやてが笑う。

「いや…帰るまで時間がかかると思っんや…だからな、少しの間だけ、私たちの部隊を手伝ってもらえませんか？」

特有のなまりのある言葉で、はやてが言った。

「断るとしたら」

「登録の無いデバイス、それに次元漂流者…保護します」

シャアがはやてを見て笑う。
この娘、できると

「もう少し、理由を自然に話せたらサマにはなるだろう…君は政治家向きの性格をしているな」

「おおきに…伊達に部隊長をやっているわけじゃありません」

「そのようだ」

はやてが立ち上がる。

「さて、シャアさん…部屋を案内します」

「助かる」

シャアが立ち上がると、少しまを置いてなのはが立ち上がる。
フェイトがなのはを見る。

「なのは、さっきから顔があかいけどどうしたの？」

「シャアさんがイケメンやから柄にも無く緊張したんやろ」

はやてがからかうように言うと。

「アズナ…シャアさんにお尻を触られてたの」

「私はさわっとらんよ」

シャアがそう言うと、三人は可笑しそうに笑った。

赤い彗星の脅威

目覚まし時計の音が鳴る。

シヤアはトランクスとシヤツだけという姿で起き上がる。昨日の出来事を思い出す。

はやてに、部屋の前へと案内された。

一枚のカードをかざすと、扉のロックが外れた。

「ここがシヤアさんのお部屋です…大丈夫ですか？」

そこは、一人で住むには大きいくらいの部屋だった。

「ああ、十分だ…ありがとう」

「はい…あつ、明日なのはちゃんが迎えにきますね」

シヤアが腕時計を見る。

動いているが、あっている自信はなかった。

「目覚まし時計なんかは部屋においてありますね」

「すまん」

「いえいえ、協力してもらつ身ですら…明日の6…00くらいなのはちゃんが来ると思います」

はやてがカードをシヤアに渡す。
シヤアもカードを受け取った。

「わかった」

「では、また明日…おやすみなさい」

「ああ、おやすみ」

シヤアは片手を上げて、はやての背中を見送った。

そして、朝にいたる。

「服は昨日のものを着るしかあるまいな」

赤い軍服を着て、枕元においてあるデバイスを持つ。

『おはようございます、マスター』

「ああ…」

『私の名称ですか？』

当たらずも遠からず、このままでは結果的に呼びにくい。

「…そうだな、サザビーで良いだろう」

『私の名称ですか？』

「呼びやすい」

『そうですね、了解しました』

シヤアがサザビーを胸ポケットにしまった。
その時、インターホンになる。

「シヤアさん、起きてますか？」

「ああ、起きてる」

シヤアは、扉から出る。

「ところで、どこへ行くというのだ？」

「少し、部隊で顔を広めなくてはいけないので」

そう言ったのはの後を、シヤアは着いていく。

着いた場所は海沿いの道。

「…潮のかがりか…」

一年戦争時の大西洋を思い出した。

「で、ここをこう」

今まで見ていた海の上に、地上と廃墟都市が現れた。
その光景に声も出ない。

「魔法とやらに不可能はないのだな」

「ああ、間に合ってよかったわ」

はやてが走ってやってきた。

シャアの前に立ち、息を切らしている。

「大丈夫か、君のようなインドアの女性がそう走るものではないぞ」

そう言って笑って、近づこうとした時。

猛烈な殺気を感じた。

反射的に、後ろへと下がった。

がきんっ！

其の場には、斬撃。

地面の鉄は削れている。

「ちよっ！シグナム！」

その場には、ピンク色の髪をポニーテールにした女性。シグナム。

「この人はシャア・アズナブルさん、ウチらに協力してくれる人や
！」

「…なぜ、訓練所へ？」

「うちが、シヤアさんの実力を測るために模擬戦しようと思つてな」
その言葉に、シグナムの剣幕が変わる。

「その模擬戦、私に任せていただけないでしょうか」

「え、ええけど」

はやても、シグナムに任せる。
シヤアは、シグナムに近づぐ。

「模擬戦をやるなど私も聞いていないぞ？」

「ごめんなさい、はやてちゃんに聞いてませんか？」

はやてを見ると、少し笑っている。

「はかつたな」

シヤアは、大きな溜息をついた。

赤い彗星の脅威Ⅴ

廃ビルの屋上で、シグナムは立っている。
数十メートル先の廃ビルの屋上には、シャア・アズナブルと言う男がいる。

「奴は…危険だ」

幾年幾万の時を漕ぎ過ぎてきた。

しかし、あの男を見た瞬間、鳥肌が立った。

あの男には、普通の人間にないなにかがある。

「…シグナム…」

隣りにいるヴィータが、心配そうにシグナムを見る。

シグナムとヴィータ対シャア。

あまり気が進まない、だが、それでも勝てる気がしないのがたしかだ。

『シグナム、ヴィータ…聞こえとる?』

「はい」

「聞こえてるぞ、はやて!」

『残り三秒で開始するよ…気をつけてや』

はやては、確かに二人の強さを信用しているが、なんとも言えぬ悪

寒があった。

戦闘開始のブザーが鳴った。

そのブザーと共に、シャアが走りだした。

「ライフルとシールドとドダイ改だ！」

『Yes』

シャアがビルから飛び降りると同時に、それが装備される。
そして、ビル群の中を掻い潜りながら、シグナムとヴィータを捜す。

『右舷より接近』

「なにっ!?!」

右から、銀色の鉄球が迫る。

「ちいっ!」

ドダイ改のスピードをあげて、それを避ける。
しかし、その鉄球は追尾してくる。

「やるな!」

『正面から接近』

正面には、ヴィータ。

「シュワルベ・フリーユージェツ!!」

ヴィータが、手にもつハンマーで、8つの鉄球をとばしてくる。

「撃ち落す!」

「やれるもんならやってみやがれ!」

不規則な動きをしながら迫る。

シヤアは、鉄球から少し銃口をずらして、撃つ。

計8発の発砲、そして、8つの鉄球は撃ち落された。

「ハアツ!?!」

ヴィータは驚愕の声をあげる。

シヤアは、ヴィータへの接近を試みるが、もう一人の騎士が現れる。その騎士は、上空から降りてくる。

「紫電一閃…タタツ切れ、レヴァンティン!」

シヤアは、即刻ドダイから身を投げた。

シグナムの剣は、ドダイ改を切断した。

「自ら落ちるか!?!」

驚愕の声を上げた時、シヤアが言う。

「サザビー、バックパックだ!」

『Ignition.』

シャアの背中に、サザビーのバックパックだけが装備された。それはシャアの体に合う程度の大きさを誇る。

バーニアが拭かされ、頭を下に落下していたシャアは、頭を上昇して、シグナムとヴィータの前に現れる。

「……鬱陶しいんだよお！」

短気なヴィータが、デバイスを振る。

「ギガンハンマー！」

『Gigant Hammer』

デバイスから声が聞こえると、ハンマーの形が変わった。

「はあああああっ！」

ヴィータがシャアに向かって飛ぶのと同時に、シャアの背中のバックパックに収納されている6つのファンネルが機動する。

『ファンネル』

「んだあッ!？」

「さがれヴィータ！」

ヴィータの周りをかこんだファンネル、その6つの銃口が、ヴィー

夕を捉えた。

そして、その銃口から青いビームが射出され、ヴィータを襲う。その時、シグナムが青いビームを掻い潜り、ヴィータを連れて逃げた。

「…正常に動くな、奴らは」

『ロスト、遠くには行っていないはずです』

「なるほど…探索を開始するところからだな」

シヤアは、背中のファンネルコンテナにファンネルを収納して、飛ぶ。

廃ビル内部

シグナムとヴィータが座り込んでいる。

「ちきしょお、なんなんだよアイツ！」

「…化け物か」

シグナムが、足を気遣うようなしぐさを見せる。

「お、おい、シグナム！」

「くっ…」

「し、ごめん」

本気で申し訳ないと思っているのか、ヴィータはべそをかく。
シグナムは、ヴィータの頭を二、三度叩く。

「気にするな、それよりも…それなりの覚悟をもって、奴を沈めなければならん」

シグナムは、鋭い目で言った。

彗星 comet

シャアがシグナムたちを捜していると、目の前にヴィータが現れた。ギガントハンマーを持って、シャアを睨む。

「コメート・フリーゲン！」

ヴィータの頭より大きな鉄球が、飛んでくる。

シャアはライフルを消して、シールドに内臓されたビーム・トマホークを取り出す。

迫った鉄球を、シャアは縦真つ二つに切り裂いて、進む。

「アームドデバイスでもインテリジェントでもねえ…なんなんだよ！」

ヴィータも、自らが相棒グラーフ・アイゼンを持って飛ぶが、目の前でシャアが消えた。

「えっ！どこに！」

左右を見回すがいない、後ろにも、その時。

足元から、シャアが現れた。

シャアはヴィータを蹴って廃ビルの中へと吹き飛ばす。

「うあああああっ！」

ヴィータを追撃に向かおうとしたとき、後ろから、殺気を感じる。振り返った時、そこにいたのはシグナム。

「紫電一閃！」

シヤアは、そのレヴァンティンをビームトマホークを大型ビームサ
ーベル状に換えて受ける。

「ぐっ！」

「はああああっ！」

つば競り合いになった状態のまま、ビルの中へと突っ込み。
シヤアの背を壁に押し付ける。

「これでビットは使えまい、シヤア」

「甘いな、シグナム！」

シヤアの背中中のファンネルコンテナに収納されるべきファンネルが、
二個たりない。

そのファンネルはシグナムの背後。

「なにっ!?!」

そのファンネルは、非殺傷設定で魔力レーザーを打ち出し、シグナ
ムの手と足に直撃を食らわす。

シグナムの体にしびれるような感覚が走った。

「うああっ!」

そして、その時。

『高魔力反応!』

「なんだと!?!」

シヤアが驚愕の声を上げる。

外

ヴィータはシグナムとシヤアの居る廃ビルを見下す。

「轟天爆碎!ギガント・シユラーク!」

巨大なハンマーは、ビルを押しつぶした。

「はあ…はあ…はあ」

ヴィータが肩で呼吸をしていると、周りにファンネルが展開される。ヴィータが、後ろを向く。

そこには、シグナムを抱えているシヤア。

『c o m e t M o v e』

「サザビー、良くやってくれた」

『A l l r i g h t 』.

ヴィータが、一瞬シヤアを睨んだが、すぐやめた。

「アタシの負けだ」

訓練が終了した。

シャアという男

近場のビルの屋上に、シャアとヴィータは降りた。

「安心してくれ、今から話すことは誰も聞いていない」

シャアが、上着を脱ぎ、その上にシグナムを寝せる。

「驚いたな…私を殺す、とまでは言わないが、重傷にまでは追い込むつもりは攻撃だった」

ヴィータは、何も言わない。

「…当初の目的はこうだ、シグナムが私をビル内部までつば競り合いで持っていく…さきほどの大きなハンマーを出す時の高魔力反応で油断した私を潰す…シグナムは私が油断している時にでも高速移動魔法で逃げようとしたのかな？」

見事に作戦を言い当てたシャアに、驚きを隠せないヴィータ。

「今の作戦、私でなければ確実にやられていた、しかし…」

シャアの目が鋭くなる。

「私がシグナムを倒した後、連れてこなかったらどうなっていたと思う。」

ヴィータは、隣りの、自分が破壊したビルを見る。

「見かけはともかく、相当戦闘馴れしているお前達がわからなかったわけでもなかるう」

話しを続ける。

「…でも、結果助かったわけだし」

「助からなかった場合はなんと云う？」

「でもっ！」

その時

「もうやめてやってくれ」

シグナムが、上体を起こして言った。

ヴィータは、シグナムの傍に駆け寄る。

「…私の作戦なんだ…だからなにも言っな」

立ち上がるシグナムは、シャアに頭を下げる。

「この通りだ」

「いや…私も大人げなかった、戻ろっ」

シグナムに頭を上げさせ、先ほどから切っている通信をオンにする。

『シャアさん…繋がらなかったんやけど、どうしたん？』

「彼女たちに作戦の話を聞いていてね」

シヤアはそう言って、薄ら笑いする。

『そか：じゃあ、3人とも戻ってきてもらえるか？』

「了解した」

通信を切って、シヤアは上着を回収してドダイ改に乗った。
その後ろを、シグナムとヴィータが飛ぶ。

「（アムロ、私はアコギなことをしているのか？）」

心の中で、かつて思ったことを復唱した。

なのはとはやてが居る海岸にもどったシヤアが、ドダイ改を降りて
光の粒子に戻す。
話しだしたのは、なのは。

「さっきの背中中の凄いのには使わないんですか？」

「ああ、少し魔力消費が高い」

『無駄が嫌いなので』

「なるほど」

その話しが終わり、はやてがシグナムたちに話しを始める。

「なあ、なんでギガントなんか使ったんや？」

少し、ドスの低いような声。
きつと怒っているのだろう。

「それは」

「シヤアさんを殺す気やったとか言わへんな？」

本気で怒っているはやては、ヴィータの言葉を遮った。
ヴィータの方を向いて言う。

「シグナムまで死ぬかもしれへんかったんよ？」

「それはっ!」

「それはやあらへん」

はやての肩を、シヤアが掴む。

「それは、彼女たちの作戦だ…まさかあんな手を隠していたとは…
残念ながら失敗に終わったようだが…見ていただけではヴィータが
シグナムを殺そうとしているようにしか見えんな」

シヤアはそう言って、シグナムとヴィータを見る。
気付いたヴィータは

「そ、そうなんだよ、まさかあの作戦が失敗するなんてな!」

ヴィータがそう言って話しをあわせる。

「あれ、そうやったん？」

シヤアが頷くと、はやての顔が少し赤らめる。

「な、なんや…ごめんな、私はてつきり」

「はやてが謝る必要は無いさ」

そう言って、シヤアが笑うと、はやての顔は赤く染まる。

「さあ、機動六課の内部を案内してくれないか？」

「あつ、じゃあ…なのはちゃん、行くうか」

「うん」

シヤアとなのははやてが歩いていく背中を見つめて、ヴィータが口を開く。

「なんだ、案外良い奴じゃん」

「そうか、私は奴がまともな人間には見えん」

「えっ？」

シグナムの顔が少し青ざめる。

「戦闘中の奴の目は、人を殺す目をしている…古代ベルカにいた騎

士を覚えているか」

「あ、ああアイツか…」

それを思い出したヴィータは少し青ざめる。

「あの大量虐殺者の目に…似ていた」

「そりゃ、言いすぎじゃねえか？」

「…そうだと良いが」

「少し疲れてるんだろ…」

ヴィータがすこし心配そうな顔で言う。

シグナムが、両頬を叩く。

「そうだな、顔を洗ってくる」

そう言って、シグナムは隊舎の方へと歩いていく。

「てか、なのは」

もうシャアたちは見えない。

「はあ…アタシがこれを片付けるのな」

馴れない操作に戸惑いながら、ヴィータが訓練場を消したのは一時間後であった。

六課での生活

寮内と時空管理局についての説明は終わり、今は食堂に来ている。現在時刻は10時過ぎ。食堂には、シヤアとはやての二人。

「どうでした、寮は？」

「かなり充実しているな…戦艦などより幾分も良い」

「へえ、シヤアさんは軍人やったんですか？」

「ああ」

「だから、戦闘馴れしとったんですね」

笑うはやてに、シヤアは笑う。

「ずいぶん勝つてが違う」

「そうやったんですか？」

「そもそも、私はMS人型機械に乗って戦っていたからな」

はやては、時代の進歩を感じる反面、まだ戦争が起こっていたという事実¹に気分を落とす。

「あの、シヤアさんはどんな戦場を進んでたんですか？」

「私か…私は」

シヤアが話しを始める。

しかし話すのは時代であって自分では無い。

自分がなにをしたかは、話さない。

「そして、気付いたらここにいた」

自分が巨大隕石アクシズを落とそうとしたなどは、口が滑っても言わない。きつと、優しすぎる彼女たちのことだ、傷つくのは目に見えている。一日前に会った彼女たちをなぜそこまで言えるのか、ではなく、一日しかあって居ない少女たちが優しいと理解できたのか、その理由は彼女たちが優しすぎるからであろう。

そのせいでこの『自分の正義を他者に訴える組織』《時空管理局》に利用されていることに気付いていない。ある意味、アムロに似ている。

「…私は」

自分はこの世界でどうすれば良いのか

エリートならば歳を関係無しに組織に抜粋し、敵と味方を分別させる。

シヤアにはそう聞こえ。そして腐った連邦政府テイターズと変わらないと思った。

「シヤアさん、食事おいしくないんですか？」

その言葉に、現実呼び戻された。

そしてその考えを一旦保留する。

「いや、おいしさ…やはりここは良い場所だ」

シヤアはナイフとフォークで食べるが、はやては箸を使う。

「ん…ニホン生まれか？」

「あつ、知ってるんですか？」

「一応ね、あそこは良い国だと聞いた」

はやては嬉しそうな顔をする。

政治家をやっていると、嫌でも耳にするのは日本である。

資金と資源は最悪だが、技術者やエースパイロットには絶対いる。

そして、シヤアも日本人を幾人も知っている。

アウムドラの艦長であったハヤト・コバヤシもそうだった。

そして、他愛も無い話しをしながら、食事を終えた。

次についたのは、戦艦で言うブリッジ。

大きなモニターと共にたくさんの局員たちがいる。

はやてに挨拶した後、多くの職員達がシヤアに釘付けだ。

「ここは司令部、つまりHQです」

「なるほど」

~~~~~

兵A「HQ、こちらパトロール、敵を発見！」

HQ『こちらHQ、増援は出せない、現状の戦力で対処せよ』

蛇「うおおおおお！」

ズダダダダダッ！！

大佐「スニーキングミッションだ、スネーク、スネーーク！！」

~~~~~

今一瞬頭によぎった光景はなんだのだろうか、ニュータイプゆえなのだろうか、考えるのを放棄した。

「みんな、この人は民間協力者のシャア・アズナブルさんや」

「よろしく頼む」

その圧倒的なカリスマ性故か、シャアはすぐに受け入れられた。

そして、ヘリポートや他の施設も周り、シャワールーム前にやってきた。

「ここがシャワールームで、男性と女性でわかれとるんです」

「ああ、理解した」

そこは随分と綺麗な場所だった。

「シャアさん、どうです、入ってきたら」

はやての言葉は随分と魅力的だった。

昨日から着替えていないし、今日は朝から訓練をした。

「では、お言葉に甘えさせてもらおうか」

そう言って、シャアはシャワールームに向かう。

「タオルは新しいのがあるはずですよ」

「ありがとう、使わせてもらう」

シャアはそう言って、シャワールームに入った。

時空管理局は、大きくて手が回らず、ここミッドチルダのことをおろそかにしてしまう。

それゆえに、八神はやて筆頭としてできた組織が機動六課。

「どう思う、サザビー」

シャワーを浴び終わり、ズボンを穿きおえたシャアがデバイスに聞く。

『地球連邦にそっくりですね』

「私もそう思う…」

『肅清ですか？』

「いや、この世界の住人でない私にそんな決定権があるのか」

シヤアは、ドライヤーで髪を乾かす。

サザビーは首から下げている。

『大佐、時空管理局は、連邦ほど腐ってはいません』

「そつだといいがな」

そう信じて、シヤアは上の服を着た。

シャワールームを出ると、すぐのベンチにはやてが座っていた。はやての傍に行くと、安らかに寝息を立てているのがわかる。

「…待たせすぎだな」

微笑して、待たせすぎてしまったことを心の中で詫びながら隣りに座る。

そして上着を脱ぎ、はやての肩に掛けた。

「……………」

これからの生活を考えることに集中しているシヤアは、はやての頭

が傾いて、肩に乗ったのに気付かないまま時を流していった。

長い一日の終わり。

はやては、ふと目を覚ます。

「はっ！わたし、寝てもた！？」

ビックリしてまわりを見回す。

そして、今自分が頭を乗っけている場所を見る。
そこはシャアの肩。

「うわああっ！すみません！」

はやては真っ赤な顔で謝る。

「気にしなくて良い、私も考えごとをしていた所だ」

「そ、そうですね…良かったです」

はやてが、立ち上がる。

日も沈みかけている。

「ああ、今日は案内もうでけへんかなあ」

「構わんさ、暇人なりに探索してみる」

「すみません」

シャアは笑って、はやてと共にシャワールーム前から食堂に移動し
ようと階段を下りた時。

「こんばんは、八神部隊長！」

そこには、三人の少女と一人の少年。
活発そうな青髪ショートカットの少女が挨拶をした。

「ああ、こんばんは」

「えっと…後ろの方は？」

オレンジのツータールの少女、が聞く。

「こちらの方は」

「シャア・アズナブル…民間協力者ということになっている」

今日何度目かもわからない自己紹介。

そして、シャアは後ろにいる二人の少年少女を見る。
年齢は10歳くらいだろう。

「スバル・ナカジマです！」

「ティアナ・ランスターです」

16歳くらいの少女二人が自己紹介をしてくれる。
カミーユを思い出す。

「エリオ・モンドリアルと」

「きゃ、キャロ・ル・ルシエです」

二人の子供は敬礼をしてみせる。
こんな、どういうものが敵でどういうものが味方かもわかっていない子供に、戦闘行為を教え込む。
やはり、不信任は増大していくばかりだった。

「ああ、よろしく頼む」

そう言ってシャアが笑った。

スバルがキャツキヤとテンションが上がっている。

ティアナは赤い顔でスバルのテンションをなだめようとする。

「またな、3人とも、食事をとってちゃんと寝るんやで」

「はい！」

4人は同時に返事をした。

その返事を背中に聞きながら、シャアとはやては食堂へと進む。

食堂に移動すると、そこには多数の局員が集っていた。
ほとんどの局員とは顔を少し合わせている。

「主」

そこに現れたのは、白い髪の局員服を着た男。

「ああ、ザフィーラ、今日は人型なん？」

「はい、たまにはと」

「耳と尻尾もしまつとるな」

「ヴァイスに文句を言われました…酷いと」

男、ザフィーラはシャアを見る。

「ただものではない、ということは、早朝訓練でシグナムとヴェイ
タを破った」

「シャア・アズナブルだ」

シャアもザフィーラも、お互いを一瞬でただものではないと見切る。

「じゃあ、三人で食事でもしよか」

三人は席について、食事を始めた。

食事をしながら、ザフィーラの話しなどをしている。

「使い魔で、狼…か」

「蒼き狼やもんな」

「盾の守護獣でもあります」

シャアはふと、頭の中に浮かんだのはかつての戦友。

青い巨星ランバ・ラルそして、白狼シン・マツナガ。

「大男ではあったな」

少し笑うシヤア。

「どうしたん？」

「いや、懐かしいことを思い出してな」

そこに、フェイトとなのはがやってきた。

「あれ、今日はザフィーラ人型なんだ」

フェイトが驚いたように言う。

「あつ…ザフィーラ、今日も言っつてよ！」

ザフィーラは困ったように。

「いや…さすがにこの場では」

「ええ〜」

「いたしかたない」

一回咳払いをして、ザフィーラは声を出す。

「閻魔さま一の子分、アオベエ！」

少し小声で、ザフィーラはそう言った。

「うわぁっ！そっくり！」

なのはが楽しそうに言う。

「すごいな、君は」

シャアが小さな拍手を送る。

「褒めるな…逆に惨めだ」

ザフィーラは、頭を抱えた。

そして、シャアは部屋に帰る。

部屋に入ると、上着を脱いで椅子に座る。

『お疲れ様です、大佐』

「なぜ大佐と呼ぶ」

『だんだんと、シャア・アズナブルらしくなってきたもので』

「…マスターで良い」

『Yes, my master.』

その時、インターホンを鳴らす音。

「ん…」

タンクトップのシャツのまま、シャアは扉を開いた。

「あつ…シャア、その大丈夫？」

扉の前に居たのは、フェイト。

「ああ…どうした？」

「これ、着替え」

本当はザフィーラが持つて行くはずだったが、フェイトが途中であつて変わったのだ。

自分でも理由はわからないが、シャアと話しを試みたくなったのである。

「えつと…中でお話して良い？」

「ああ、男の部屋に入っても良いのか？」

野暮な事は言わずに、シャアは中にフェイトを入れた。

フェイトはシャアに言われ、椅子に座る。机を挟んで反対側に、シャアが座った。

「シャアって、軍人だったの？」

「ああ…20くらいではもう戦闘していたからな…状況は変わらん」

「へえ…その時、階級とかは？」

「大佐だったな」

フェイトが驚く。

19で少佐、はやてと同じかそれ以上か、形式が違う軍では何もいえないが。

「…シャアって、モテてた？」

その顔に、少しシャアが顔をしかめる。

「どうだろう…なぜそう思うんだ？」

「いや…なんか、雰囲気だ」

「（性格の良い）女性には縁が無くてな」

そうは言っても、ハマーンは自分のせいだ。

昔は可愛かった。

そして、ロリコンではない。

「君達のように、性格の良い女性は珍しいよ」

「は？」

「こちらの女性軍人は少ない、男勝りな女性ばかりなのでな」

シャアが言つと、フェイトは苦笑いしている。

そして、話しを続け。
1時間半以上も話しを続けていた。

「あつ、もうこんな時間」

「…送ろうか」

シヤアがフェイトを送っていこうとした時。

「大丈夫だよ、外出るわけでもないんだし…じゃあ、また明日ね」
そう言つて、フェイトが扉の向こうへ行く。

「ああ、また明日」

フェイトが去つていくと、シヤアは服を脱ぐ。
新しい服の中には、シャツと短パンが入っていた。

しっかりとテープで紙が止められていて、その紙には寝巻きと書か
れている。
はやての字だ。

「ん、手紙」

「シヤアさんへ」

今日からの機動六課での生活、きっと良い子たちばかりなので嫌に
はならないと思います。

明日は、いろんなところを歩いてみてはいかがですか？

残念ながら私は仕事なので付き合えませんが、訓練所なども見て回
ってください。

訓練だつたらヴィータかなのはちゃん、模擬戦でしたらシグナムに

頼んでください。
きっと良い訓練になると思います。
では、また明日。

八神より』

シヤアは笑って、寝巻きに着替える。

「サザビー、明日は簡易な魔法や出せる武装を全て試してみたい」

『はい、六課の内部もお忘れなく』

「ああ」

シヤアは返事をして電気を消し、眠りに着いた。

進展（前編）

シャアは、朝8：00に起床した。

「少し起きるのが遅れたか」

『Don't worry.』

サザビーのその言葉に、そうだな、と相づちを打って起き上がる。普通の寝巻きなど軍ではなかっただけあり、少し戸惑う。

「これが、新しい服か」

その茶色の局員の制服を、シャアは着てみる。

「どうだ」

『似合っていますよ…赤であればもつと良かったんですが』

シャアは苦笑いをして、首にサザビーをかけた。

カードを持って、シャアは部屋を出る。

自動販売機は、一部の人間はカードをかざせば買えるらしい。その一部の人間のカードが自分の持つカードだ、特別な民間協力者のカード。

「悪いな」

『マスターは、人に借りをつくりませんからね』

「それでもないさ、ただお互い忘れるだけだ」

そう言いながら缶コーヒーを買って、シヤアは訓練場に行く。

ついた訓練場は森のような状態になっていた。
海岸を歩いていると、シグナムとヴァイスを見つける。
ヴァイスがすぐ気付いたようで、手を振る。

「旦那！昨日ぶりっすね！」

「ああ…今日はなにをしてるんだ？」

「今日は、個別スキルの練習らしいっす」

やはり、少しの勉強ではわからない。

「個別スキル？」

「その個人が持つスキルや戦い方、配置などだ…」

シグナムが答える。

「なるほど…私には向かな」

シヤアは、チラッとシグナムを見る。

「シグナムは参加せんのか？」

「私は、古い騎士だからな…スバルやエリオのように、ミッド式の混じった近代ベルカ式とは勝手も違うし、剣を振るうしかない私が、バックス側のティアナやキャロに教えられることもないしな」

シグナムは微笑しながら言う。

「まっ、それ以前に私は人にものを教えるという柄でもない…戦法など、届く距離まで近づいて斬れ、ぐらいいしか言えん」

ヴァイスが笑う。

「へへっ…すげえ奥義ではあるんすけど…ま、確かに、連中にはちいっと早いっすね」

「同感だ」

シヤアも微笑しながら、ティアナの訓練画面を見る。

「（なのはは、ティアナをファンネルブレイカーにでも仕立て上げようというのか…）」

ティアナが育ちきつたら、と思うと相性が悪いと思う。

そしてなのはとの戦闘はきつと自分が本気になってしまいそうだ。カラーリングにしてもあの魔力弾をファンネルのように操るスタイルにしてもだ。

接近したら殴られそうな気がする。

「…一瞬悪寒が走った」

「風邪でも引いたか？」

「いや、気のせいだろう」

そう言っつて、シャアは苦笑いをした。

隊舎に戻る途中、シャアは訓練をしていたメンバーと合流した。そしてその時、車に乗ったはやてとリインフォース？と会った。

「みんなお疲れさんや〜」

「はい！」

フォアード一同の元気の良い返事。

「はやてとリインは外回り？」

聞いたのはヴィータ。

「はいです！ヴィータちゃん」

幼女としか良いようがない妖精のような少女、リインが返事をした。

「うん、ちょっとナカジマ三佐とお話してくるよ、スバル？お父さんやお姉ちゃんになんか伝言とかあるか？」

「いえ、大丈夫です」

その返事を聞いたはやては頷いた。
車のエンジンをかける

「じゃ、行ってらっしゃい、はやてちゃんにリイン、行ってらっしゃい」

「ナカジマ三佐とギンガによく伝えてね」

なのはとフェイトが見送りの言葉をかけ

「車で走っている途中に白鳥を見かけても追っなよ」

「は？」

シヤアはなんでもない、と答えた。

「うん、じゃ」

車が走り出す

「いってきますー！」

リインの言葉と共に、車は遠ざかっていき見えなくなった。
はやてたちがどこかに向かっていった後、シヤアたちは食堂に向かう。

シヤアはフォワードたちとは別のテーブルで昼食を取っていた。

「失礼する」

前の席に、シグナムが座る。

「どういう心境の変化かな？」

「なにがだ」

「私の傍に寄ろうともしなかった君が近づいてくるとは」

シグナムは食事の手を止める事もなく言った。

「なに、お前がそう悪い奴ではないとわかってな」

シヤアは、なんとなくピンときた。

昨日のシャワールーム前での光景を見たのだろう。

「昨日のシャワールーム前だ」

しっかり当たっていた。

「…軍人だったらしいな」

「ああ」

「シヤアの世界の軍人は…アノ目は普通か？」

シグナムは、独り言のように言って、笑った。

「ん？」

「いや、なんでもない、忘れる」

そう言っつて、他愛も無い会話をしながら、昼食を食べ終えた。

そして、それから一時間くらいがたった時。

ロビーで、訓練に行こうとしていたフォワードの前に、三人の男たちが現れる。

「おい！この部隊長は？」

新人であるスバル、ティアナ、エリオ、キャロに、物凄いガンを飛ばしていった男たち。

その顔に緊張して、美味く喋れない四人、そこに救世主が入る。

「やめろお前ら！」

「ここは機動六課だ」

シグナムとヴィータが現れた。

「地上の機動二課のもんですけど！」

柄の悪い局員三人、着崩した制服がそのものたちの性格をあらわしている。

そこになのはまで現れた。

「やめてください、今、部隊長は出張でいないんですが」

「たしかに、ここに模擬戦のお願い出したはずんですけど!?!」

「ここは仕事もろくにできないのかな!?!」

男たちが言ったたびに、全員のストレスが溜まり。

ヴィータとシグナムが手を出そうとするが、なのはが止める。

「ほんと、闇の書の主と守護騎士、それにプレシア・テストロッサ事件の主犯の娘…犯罪者だらけの部隊は違うぜえ!」

その言葉に、なのはが手をあげようとしたとき。

「やめろ、なのは」

シヤアが、男たちとなのはの間に入る。

「なに、お前」

男の一人が聞く。

「民間協力者の…シヤア・アズナブルだ」

シヤアが、薄っすらと笑って、言った。

進展（前編）（後書き）

本編に入りました。

全然本編らしくないんですけど、本編第六話「進展」です。ここからは少しオリジナルが入りますけど、最大限の力をもってでも、原作に近づけようと思います。

進展（後半）

訓練所 廃墟ビル群

そこで、模擬戦が行われる。

シヤアVS二課の三人

シグナムとヴィータも参戦する予定だったが

「もう少し、腕鳴らしが欲しい」

とのことで一人になったのだ、あんな柄の悪い連中のことだ、民間協力者だろうと関係なく本気だろう。

しかし、シヤアが負けるとは思えない。

それが、現在のなのはの心境である。

そして、宇宙モニターには、シヤアと二課の三人。

「では…お互い問題はありませんね！」

『さっさと始めるよ、エース・オブ・エースさん！』

すこしムスツとした。

『落ち着けなのは…ああいう類の者にいちいちイライラしてるようでは昇進はできんぞ』

その言葉に、少し落ち着かされる。

「レディィー…ゴォー！」

三人が動いた。
そして、シヤアはビルの屋上から動き出す。

シヤアはまずビルから飛び降りる。

「サザビー！」

『stand by ready .
set up .』

その音声と共に。

シヤアが光に包まれた。

その光はゆっくりと上空にあがり、はじける。

そこに居たシヤアは、当初来ていた赤い軍服を着ている。
足場はドダイ改。

「これは……」

『マスターの心です。政治家であり、総帥であり、パイロットである』

シヤアは、笑った。

自然と、口から笑みがこぼれる。

「行くぞ！」

『Yes, my master.』

ドダイ改は、スピードを上げて進む。

あの三人は、背中合わせに周りを見ている。

「オレたちは、管理局のエース」

バッド型アームドデバイスを持つこいつがA

「三人揃えばだれにも負けねえ！」

バズーカ型インテリジェントデバイスを持つのがB

「無敵のジェットトリオーズアタックを見せてやる」

サーベル型ストレージデバイスを持つのがC

この三人は確かに管理局最強かもしれない三人だった。

しかし、この世界の話した、その程度の力、たとえコンビネーションが一流でも

「シャアさんは、早くて火力も高い……」

そう呟いたのは、なのは。

A B Cたちはビルとビルの真ん中に居た、敵がくる方向は上と右と左。

それが違った。

見えたドダイ改は、底を横にして飛んでいる。

「右だ！」

三人は右を向いて突っ込む。

バズーカのBは、其の場で止まりながら撃っていたが、残りの二人は突っ込んでいってしまった。

「なっ！ばか！」

「まずは一人」

声は、左から。

「なんだよ…その姿」

シヤアは軍服の上に、バックパックとシールドとライフルを持っている。

そして、新兵装である腰部、拡散メガ粒子砲。

バックパックから動力パイプがベルトのように、腰の前につながり、腰部にメガ粒子砲の発射口がある。

「コンビネーションを磨いてからくるのだな」

「う、うおおおおー！」

Bがバズーカを放つが。
シールドで防ぐ。

「なんなんだよそのデバイスは！」

バズーカを連射するが、どれもシャアにはあたらない。

それどころか、シャアは少し機動性に馴れるためか攻撃をしない。

「舐めてんじゃねえ！」

「それはすまなかった」

バズーカを撃とうとしたとき、真後ろにシャアの気配がした。

いや、気配というよりも、シャアのビームを溜める音が聞こえる。

「メガ粒子砲！」

『PLASMA BEAM』

沢山のビームが、男を包んだ。

ドダイ改を追っていたBが止まる。

「おい、Bと通信がとれねえ！」

「んだと、アノ馬鹿！」

Aが飛んでいってしまった。

Cの声など聞く耳もたない。

「コンビネーションが聞いてあきれな」

「なっ…こいつはお前らの無能を証明する為…本局はもちろん、全部署にながれてんだよ！」

「それは残念だったな…お前達の無能さが証明されるだけだ」

シャアは、ビームトマホークをサーベル状に変えて、切っ先をBに向ける。

「ふざけんな！」

Cが、シャアに向けて飛ぶ。

シャアも、Cに向けて、奔る。

一瞬、シャアがCの顎を蹴り上げた。

「け、り？」

Cは虚しく落ちていった。

「…こんな情け無い奴に勝って意味はあるのか？」

シャアは、Aを倒す為移動を開始する。

なのはは驚いていた。

「凄い、強い」

戦術が、完全に戦闘馴れしている。それは当然だろう、軍人をしていると言っていた。

「後で、フェイトちゃんとはやてちゃんと…検証してみよ」

なのははそう心に決めて、戦闘を見る。

シヤアは、Aが向かったであろう場所に向かう。

Bを倒した場所だろう。

Aは、その空宙に浮いていた。

Bのバズーカを持って。

「こんな奴らいらなかったんだ…俺一人で！」

バズーカを乱射しながら、魔力弾まで飛ばす。

「ファンネル！」

『FUNNEL』

背中のファンネルが展開され、全ての魔力弾を撃ち落とす。

バズーカの弾は、シヤアが直々に切り裂いていく、爆発と同時に、その方向にシールドを構える。爆風のダメージも無い。

「うおおおおおー！」

男が、バッドを大振りに振ろうとした。

「私が…サザビーだ！」

ファンネルの連続オールレンジ攻撃。

ソレと共に、すばやく相手を連続斬りしていく姿は、鬼神のごとく。しかして、その相手を斬り進む姿は彗星。

Aをビルの中へ吹き飛ばして、その模擬戦は終了した。

模擬戦後。

シグナム、なのは、ヴィータ、シャアが居る。

「あの三人は二課へと送られた」

「すまん、怪我をさせたようだ」

「いえ、打撲とかですし…非殺傷設定だから魔力ダメージだけで、模擬戦では打撲程度なら問題になりませんよ」

「それに、他の課への良い見せしめになっただろ？」

ヴィータが笑いながら言うと、シグナムもすこし笑う。

「ダメですよ…はいはい、今から訓練はじめますから…シャアさんはゆっくり休んでください」

「了解した」

シャアが、訓練所から出て行った。

地上本部

シャリオ・フィニーノとフェイトが一室でガジェットの残骸データを調べている

「ドクター、ジェイル・スカリエッティ…ロストロギア関連事件を初めとして、数え切れないくらいの罪状で、超広域指名手配されている、一級搜索指名の次元犯罪者だよ」

「次元犯罪者？」

シャリオは驚いたように言う。

「ちょっと事情があつてね、この男のことは何年か前からずっと追ってるんだ」

「そんな犯罪者が、なんでこんなわかりやすく自分の手がかりを？」

「本人だとしたら挑発、他人だとしたら、ミスリード狙い、どっちにしても、私となのはがこの事件にかかわってるって知ってるんだ、だけど、本当にスカリエッティだとしたら、ロストロギア技術を使

ってガジェットを製作できるのも納得できるし、レリックを集める理由も想像できる」

フェイトは忌々しそうに言う。

「理由？」

「このデータをまとめて急いで隊舎に戻ろう、隊長達を集めて緊急会議をしたいんだ」

「はい、今すぐに」

シヤアは、ロビーでくつろいでいる。

「暇とは怖いものだな」

『マスター、どうしたのですか？』

「今の私は、情け無いと思う」

『これが…幸せな平穏なのでしょう』

コーヒーを飲み干す。

「そうだな…今は悪くない」

歩いている途中、廊下で女性と会う。
フェイトだ。

「…何者だ」

シヤアが、向かい合い言った。

「えっ？」

「今ここにフェイトは居ない」

そのフェイトは、不気味に笑った。

フェイトは、走って逃げた。

「っ！」

曲がり角を曲がったフェイトを追ったが、そこには何も無く、なにも感じない。

「…くっ…なんだ」

シヤアは、一瞬だが、なにか不穏な感覚があった。

それは、かつてのパプテマス・シロッコのような、大きな悪意が渦巻く。

そんな感覚だった。

フェイトの運転している車が走っている
シャーリーが話します。

「ジェイル・スカリエッティ、でしたっけ？広域指名犯罪者の、そ

の人がレリックを集めている理由ってたとえばどんな？」

「あの男は、ドクターの通り名どおり、生命操作とか生態改造に異常な情熱と技術を持っている、そんな男がガジェットを作り出してまで追い求めるからには……」

「????????????」

白衣の男、ジェイル・スカリエッティが歩く、周りには多数の生態ポット、人がもちろん入っている、空宙に女が映ったモニターが映る

「ゼストとルーテシア、活動を再開しました」

「ふう、クライアントからの指示は？」

「彼らへの無断での支給や支援はなるべく控えるように、とメッセージが届いております」

「自立行動を開始させたガジェット・ドローンは、私の完全制御区というわけじゃないんだ、勝手にレリックの元に集まってしまふのは、大目に見て欲しいね」

「お伝えしておきます」

「彼らが動くならゆつくり観察させていただくよ、彼らもまた、貴重で大切な、レリックウエポンの実験体なのだから」

ジェイルの笑い声が、研究所に響いた。

進展（後半）（後書き）

本編に入った途端かなり長い話しになりました。

いきなり長さが変わって読みずらかったら申し訳ありません。

出張・機動六課！！（前書き）

サウンドステージです。

これは少しギャグ調なので、シャアが少しだけ

アムロ「なさけない奴！」

になりますのでそこは、ご了承ください。

出張・機動六課！！

シヤアは早朝から、自らのデバイスに起こされた。

やかましいアラームを鳴らして、起こしたデバイスは気のせいかならしげにしている。

「ええい、なんだというのだ」

『なのはさんからの通信です』

シヤアが通信を繋ぐ。

『あつ、シヤアさん…屋上に来てください』

「なぜだ？」

『良いですから！』

「…了解した」

溜息をついて、シヤアは屋上へ向かう為、制服に着替える。

屋上に着いたシヤアを迎えたのは、なのはとフェイトとはやて、どころではなく。

フォワード陣にシグナム、ヴィータ、リイン、そしてシャマルというヤブ医者（ヴィータからの知識）。

「なんか酷くありません!？」

「そんなことはないさ…で、どうなっているのだ？」

隊長陣以外のメンバーがキョトンとした顔をする。

「おい、シヤアには話してねえのか？」

「うん、だってサプライズの方が楽しいやん」

シヤアは、随分重大なことなのだと気付き、頭を抱えた。

「まったく、良い性格だな」

はやてに向かってそう言った。

「向かう場所はどうなっているのだ？」

「第97管理外世界…地球だ」

その言葉に、シヤアは顔をこわばらせる。

「今さっき私達も聞いたんですけどね」

スバルたちが、笑って言う。

ネクタイを少し緩めて、シヤアは歩く。

「出張理由は」

「ロストロギア反応があったそうや」

はやての答え。

「出るか？」

「はい…では、出発」

なのはの声と共に、ヘリが飛び立った。

ヘリの中で、エリオが話しを始める。

「丁度この間みんなの故郷の話しをしたばかりで…なんか、不思議ですね」

「アハハ、ほんと！」

スバルが嬉しそうに返事をする。

キャラとティアナは、空宙モニターをあやつっている。

「第97管理外世界、文化レベルB」

「魔法文化なし、次元移動手段なしって、魔法文化ないの!？」

驚くティアナに対して、スバルは当然のように言った。

「ないよ、うちのお父さんも魔力ゼロだし」

「スバルさんって、お母さん似なんですわね」

「うん！」

そこに、ティアナが。

「いや…なんでそんな世界から、なのはさんとか八神部隊長みたいな、オーバースランク魔導師が」

「突然変異というかあ、たまたまな感じかな」

「えっ、あ…すみません！」

気を使って謝るティアナ。

「ええよ、別に」

「私もはやて隊長も、魔法と出合ったのは偶然だしね」

「なあ？」

「へえ」

フォワード一同が声を揃える。

「シヤアさんは？」

スバルが聞く。

『バカスバル、なに聞いているの！』

『だつてえ〜』

思念通話で話すティアナとスバル。

「私は…まあ、コロニーだ」

「管理世界でふも〜っ!」

「す、すみません」

ティアナが、スバルの口を塞ぐ。

シヤアは、少し拍子抜けしたような顔をしていた。

「さあて、リンちゃんのお洋服ですよ〜」

シヤマルがそう言って、子供向けの服を出す。

しかし、リンフォース?のサイズは妖精のようなもの。

「わあ〜、シヤマルありがとうございます!」

「えっ、リンさん、その服って」

「はやてちゃんの小っちゃいころのお下がりです!」

「いえ、そうではなく」

エリオは着れるのかということが聞きたいのであった。
シヤアが、口を開く。

「そんな大きな服をきて意味はあるのか?」

「ん〜、ああ、フォワードのみんなとシャアさんには見せたことなかったですね！」

リインが、光に包まれる。

「スイッチオン、アウトフレーム、フルサイズ！」

光が消えたとき、リインは見事普通の子供のサイズになっていた。ティアナが言う。

「でかつ！」

「いや、それでもちっさいけど」

「普通の女の子のサイズですね」

今まで喋らなかった ヴィータが言葉を発する。

「向こうの世界には、あんなサイズの人間も、ふわふわ浮いてる人間もいねえからな」

「ごもつともな意見である。」

宇宙世紀でも見たことはない。

「あのお、一様ミッドにもいないと思います」

苦笑いのままティアナが言う。

「う〜ん、だいたい、エリオとキャロと同じくらいですかね？」

「リインさん、可愛いです」

「えへへへ」

キャロの言葉に、リインが嬉しそうにする。
スバルが疑問を口にする。

「リイン曹長、そのサイズでいたほうが便利なんじゃないですか？」

「こっちの姿は、燃費と魔力効率があんまり良くないんですよ、
コンパクトサイズの方でふわふわ浮いてるほうが良いです」

「なるほど…私の飛行魔法とは勝手が違うようだ…魔力を大量消費
するらしいからな」

そう言って、シャアはドダイ改に頼るしかないと実感する。

「シャアさん、この姿どうですか！」

一回転するリイン、スカートがフワッと浮き上がる。

「ああ、可愛いと思うぞ」

リイン以外の視線が、シャアに集る。
それは、驚愕の視線。

「しかし、これはナンセンスだ！」

そう言うしかなかった。

出張・機動六課！！（後書き）

サウンドステージの「魔法少女、出張します」が始まりました。

もはや都築さん、魔法少女ってつければいいか思ってますん！？

おっと、気の迷いでした。

では、続きをお楽しみに

i n 海鳴市

はやてたちと別れたなのはたちは、転送で送られて来た。送られてきた場所は、森、山、川。自然に溢れている。

「はい、到着です！」

「ここが、なのはさんたちの故郷」

フォワード陣も驚きを隠せない。

シャアだってそうだ、地球でこんな自然、ほとんど見ない。ジャブローで見たが、それも核の光で吹き飛んでしまった。フォワード陣の反応をみたフェイトとなのはが笑う。

「ほとんどミッドと変わらないでしょ？」

「空も青いし、太陽は一つだし」

「山と、川と、自然の匂いも一緒です！」

「湖綺麗です！」

フォワード陣はただ驚くだけだった。

シャアは、人知れず悔しいと思った。

これだけの自然を、人類は簡単に踏みじり、伐採するのだ。

「うん、というか……ここは具体的にはどこでしょう？湖畔の「テー」
ジって感じですが」

ラインが話す。

「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです…捜査員内賣所としての使用を快く許諾していただけたですよ」

「現地の方？」

キャラが疑問に思ったとき、聞き慣れた音が聞こえた。

「あっ、自動車？」

「こつちの世界にもあるんだ」

車は目の前で止まり。
扉が開いた。

「なのは、フエイト！」

現れたのは、シャマルに似た髪形をした少女。

「アリサちゃん」

「アリサ！」

二人が、アリサと呼ばれた少女に駆け寄る。

「なによもう、ご無沙汰だったじゃない」

「ごめんごめん」

「いろいろ、忙しくて」

三人が三人の空気を作る。

「あたしだって、忙しいのよ、大学生なんだから」

「アリサさん、こんにちわです！」

そこにリインが突っ込む。

「へへえ、久しぶり」

「はいですう」

フェイトが、フォワードとシヤアに向き直る。

「紹介するね、私となのはとはやての友達で、幼馴染の」

「アリサ・バニングスです、よろしく」

シヤアの頭に一瞬、なにかがよぎった。

アリサ・ローウェル？なんだろうそれ。

そして、連邦のエースで似たような名前の人物がいた。

サウス・バニングだ、しかし、どうでもいい。

「よろしくお願いします！」

フォワード一同の挨拶。

「よろしく頼む」

アリサは、啞然とした。

教え子と言つて良い感じの年の少年少女の背後に、容姿端麗のイケメン（しかもなんともいえぬオーラつき）がいるのだから。

「か、彼も教え子？」

「ああ、アノ人は」

「シャア・アズナブルだ、ちなみに教え子ではなく、民間協力者という位置にいる」

「あ、よ、よろしく…お願いします」

アリサは少し緊張気味だ。

「あまり緊張しないでくれ、普通の年寄りだと思って接してくれ構わんよ」

「は、はい」

少し話題を変える。

「そつえば、はやてたちは？」

「別行動です、違う転送ポートで来るはずなので」

「たぶん、すずかの所に」

また、知らない名前が出てきた。

「さあて、車で移動しましょうか」

そのはずだったのだが、シヤアが乗れない。

「それにその服じゃ目立ちますよね」

「変えの服があればな」

「い、ごめんなさい」

なのはが謝るが、まだ打開さくはあるかもしれない。

「サザビー」

『はい？』

「服を出せたりするの？」

『一様』

「もっと早くに言ってくれ」

『聞かれなかったのでは、まず服を出しますね』

シヤアの体が光、それがおさまると服はスーツへと変わっていた。髪の毛は、オールバックからおろして、クワトロのようになっている。

「ドダイ改以外の…乗用車は？」

『出せます』

「今度すべての機能を教えてもらおうか」

『出します』

そして、光と共に現れたのは、ジープ。

「これは…」

「目立つわね、かなり」

フェイトの言葉にアリサが続く。

シャアはそのジープに乗り込んだ。

「ん？」

バックミラーに、サングラスがかかっていた。

「なるほど…良いはからいだ」

シャアはそのサングラスを掛ける。

ジープのエンジンをかけて、シャアが親指を立てた手をアリサに向けた。

アリサは、コイツできる、的な顔でその手を返してきた。

アリサの車にジープが着いていく姿はシュールだった。

i n 海鳴市（後書き）

サザビーの新機能、なんか便利すぎる気がするのは気のせいです。

まだまだ続きます。

出張、次回をお楽しみに！

シヤア地球に立つ

任務開始、それと同時にシヤアは歩きでなのはたちとは別に歩いていた。

つまり、一人で歩いている。

「海鳴市か……」

人が温かく、優しい街だ。

そして、どうして全人類がこうではないのだと言う、不満。

「いや、今の私は民間協力者」

総帥でも大佐でも無いのだ。

世界の粛清を正すなど夢のまた夢。

「歪んでいるか……」

その歪んだ世界は、自分のアクシズ落としによって正すことはでき
たのだろうか。粛清

今になつては知る術は無い。

もし、アノ状況からアクシズ落としを打破されても、自分の「マフ
ティー・ナビージュ・エリン」《後継者》がきつと腐敗した連邦を正し
てくれる。

いつか、カミーユやブライトもわかるはずだ。

そんなことを考えながら歩いていると、海沿いについた。

「綺麗な海だ…」

コロニーがそびえる海が見える。

『シヤアさん聞こえとる?』

『ああ確かに聞こえる』

念話ということで、シヤアも頭の中で応対する。

『念話できるかわからへんかったから運やったんやけど、大丈夫みたいやね』

『出来の良いデバイスで助かった…で、どうした』

『コテージに戻って来てええよって言おうと思ったんやけど』

『もう少し探索していききたい』

はやてが笑う。

『じゃあ、もう少し観光してから帰ってきてくださいね』

そう言って、念話が切れる。

「八神はやて、良い上司になるよ」

シヤアはすぐ傍に止めた車に乗った。
少し喉が渇き、喫茶店に寄る。

カランカラン

扉を開くと音が鳴った。

「いらっしやいませ！」

眼鏡の少女が現れた。

「こちらの席へ」

「シャアさん！」

少女に案内される時、名前を呼ばれた。

「やあ…スターズ揃って休憩か？」

シャアは、リインとティアナの隣りに座る。

「はい」

先ほどの眼鏡の店員やってくる。

「なのはの生徒さん？」

「違うよ！ちょっと協力してくれてる人」

眼鏡の店員はホッとしているようだ。

「こんにちはは、高町美由紀です」

「シャア・アズナブルだ」

美由紀は水をシャアの前に置く。
すると、美由紀の後ろから二人の男女が現れる。

「シャアさんか、なのはの父の士郎です」

「なのはの母の桃子です」

随分若い人たちだと思った。

何歳なのだろう、失礼なので聞かないが、気になる。
今度機会があつたらなのはに聞いてみようと思った。

「どうです、なのはは」

「中々教導官としては良いのだと、思います」

敬語を使って話すのは連邦政府との会談以来だ。

「じゃあ、女としては？」

桃子の言葉に、士郎は固まりなのはは顔を赤くする。

「ええ、魅力的だと思います、ここまで穏やかな女性が周りに居な
かったもので」

ハマーンにしるナナイにしるだ。

声も似てる気がするが気のせいだろう。

「シャアさん、なのははやりませんよ」

士郎の目が確実に狩る者の目だ。

「私はそんな命知らずな真似はできませんよ」

微笑するシャアに、桃子が耳打ちする。

「既成事実を作れば反対できませんよ」

「私に死ねと言うのですか？」

桃子が笑う。

「頑張つてね、なのは」

桃子に言われて、なのはは小さく頷いた。
そこに、再び来航者。

「こんにちは」

「ああ、フェイトちゃんいらっしやい」

桃子が、笑顔で迎える。

「エリオとキャロも一緒か」

シャアがフェイトに言う。

「迷子になったら困るからね」

「そうだな…もう行くのか？」

「もう少し休憩してから行こうか」

フェイトは、笑った。

シヤア地球に立つ(後書き)

まだ続きます。

長いですね、作者も予想外です。

家族、友達、仲間

翠屋を出て。

なのはとフェイト、そしてフォードメンバーはコテージへ帰るそ
うだ。

シャアは一人、用があると言って途中から道を外れた。

車から降りたシャアは、近くの階段を登って、海鳴が一望できる丘
へと着いた。

「…呼んでいたのは君か」

そこには、ソルダーソニアの花。

花言葉は『祝福』

「…ここは良い場所だ…」

海鳴に着てから、ずっと呼ばれていた。

感覚は煩わしいものではなく、心地良いものだった。

「主？はやてと関係があるのか？」

シャアは、確かに聞こえる。

ニュータイプというのはなんなのか、まだ自分もハッキリと理解し
ているわけではない。

それは人の革新か

「やはり、それは誰にもわからないのだろう」

死んだ者を感じる。
そんなものただの霊能力者と言われる。

「…また、機会があったらくる」

そう、花に語りかけ、シャアは丘を後にした。

シャアはジープでコテージに帰ってきた。
香ばしい、かほりが漂ってくる。

「これは、バーベキューか」

した記憶は無いが知っている。

「遅かったですね、シャアさん」

なのはがそう言った。
人数が随分増えている。

「ああ、この人が、月村すずかです…なのはちゃんとはやてちゃん
とフェイトちゃんとは幼馴染です」

白いヘアバンドをした少女がそう言う。

「私はアルフ…フェイトの使い魔だ」

使い魔、つい最近知った単語だ。

「シヤアさん、さっきぶりです」

美由紀が居た。

「私はエイミィ・ハラオウン…元管理局の局員だったの」

そこには、活発そうな女性。

元管理局局員、おそらく寿引退だという気がする。

「シヤア・アズナブル、民間協力者だ」

そう言つて、シヤアはサングラスを外そうとする。

「ストップ！」

はやて、がコールをかける。

傍により、シヤアをマジマジと見る。

「へえ、その姿もにあつとるね」

「ありがとう…まあ、この姿もなれているがね」

「せつかくやからそのままどうぞや？」

「そうだな」

シヤアはサングラスだけを取った。

はやてが、肉と野菜のついた一本の串を持ってくる。

「はい」

「ありがとう」

それを、シヤアは食べる。

「良い、焼き加減だな」

そして、はやてが鉄板焼きをした肉や焼きそばを食べ、腹八分まで膨らました後、全員が移動を開始することとなった。目的地は風呂。

はやてたちと共に、銭湯に向かう事となった。

そして、スーパー銭湯。

大人13人と子供4人の大人数。

今日のこの時間帯は客は今日少ないようで、都合が良かった。

そして、奥に進むと『男』と『女』と書かれたのれんが下がっていた。

エリオが安堵の息をはいて言った。

「良かった、ちゃんと…男女別だ」

「広いお風呂だって、楽しみだねエリオ君」

「あつ、うん！そうだね、スバルさんたちと一緒に、楽しんできて」
「？エリオ君は？」

当然のように、キャラは疑問を感じていた。

「ぼくは、ほら、一応男の子だし」

「でも、ほらあれ」

キャラが指差す方向を見る。

「注意書き…え〜と、女湯への男児入浴は、11歳以下のお子様のみでお願いします」

「エリオ君10歳！」

少し誇らしげにキャラが言った。

「いつあ…」

「せっかくだし、一緒に入ろうよ」

フェイトまでそう言う。

「フェイトさん！」

「いいい…いや、あ、あのですね…それはやっぱり、スバルさんとか！隊長たちとか！アリサさんたちとかも居ますし！」

「別に私は構わないけど？」

「ん、てゆうーか、前から頭洗ってあげようか、とか言ってるじゃない」

ティアナとスバルからも許しが出た。

エリオがうるたえる。

「アタシらも良いわよ？」

「うん、良いんじゃない？仲良く入れば」

全員公認だ。

「そうだよ、エリオと一緒にのお風呂は久しぶりだし…入りたいな」

「お、お気持ちは、大変…あれなんですけど…すみません！遠慮させていただきます！」

女性陣からえく、と声が飛ぶ。

そろそろ、シャアも助け舟を出そうと思った。

「エリオもそういう年齢だ、勘弁してやってくれ」

「じゃあ、シャアさんが入ってくれる？」

まさか自分に飛び火するなど誰が思おうか。

「ええい、なぜそうなった」

それ以前に女湯に34が入ったら犯罪だ。

「犯罪なんてええんちゃう、シヤアさんみたいな格好ええ人やった
ら大丈夫やって、むしろ、シヤアさんは入りたくない？」

「そんな決定権が私にあるのか!？」

「あはは、そうなたらエリオ一人やからな」

はやてが笑った。

それと同時に、皆が大笑いする。

そして、シヤアは体を軽く洗って湯船につかっている。
エリオはキャロと共に子供用に向かった。
久しぶりのゆつくりとできる風呂だろう。

「ふう……」

この一ヶ月もたってない中、いろいろとあった。

魔法、新たな仲間、戦闘、銭湯。

異世界に来て、これからいろんなことをして生きていくのかもしれない。

「私はアコギなことをしているのか？」

そう言ってシヤアは、今一度ゆつくりと湯船につかった。

家族、友達、仲間（後書き）

次くらいで終わりにさせるつもりです。

海鳴ですし、自分が一番好きなキャラの事情を出してみました。

数々のレビューありがとうございます。

元気が出て更新速度が上がったりします！

出張任務終了！

シヤアとエリオは合流して、銭湯の前で待っていた。良い機会のため、少し質問を試してみた。

「エリオ、管理局になぜ入った？」

「えっ…管理局、にですか？」

突然の言葉に、エリオは驚きながらも応える。

「…フェイトさんへの、恩返しって言うか…役に立ちたかったと言うか」

エリオは恥ずかしそうに言う。

「昔、フェイトさんに助けてもらったことがあって…それで、保護責任者になってもらったりして」

「フェイトに言われたのか？」

「違います、むしろ反対気味でした…でも、ボクの決めたことだからって」

シヤアは、少し感心した。

この歳の子供で、ここまで人へ恩を感じたりして、それを報おうとする。

エリオは、大人びている。

遠慮、配慮、我慢、この歳の子供でそこまでできる事ではない。

故に、危険だった。

「それは、命を落とすことに繋がるぞ」

「えっ？」

「少しはフエイト親に甘えたらどうだ…今のうちだけだぞ」

親を失った自分やカミーユを思い出す。

まあ、カミーユは甘えてそれに応えるような親ではなかったが。

「…どうしたんですか？」

「いや、気にするな」

シヤアがそういった直後、女性陣が銭湯から出てきた。

「お待ちせや！」

「いえ、そんなに待ってません！」

エリオがそう言うと、はやてがエリオの頭を撫でた。

「よし、行こうか」

「なんだかすっかり堪能してしまいましたあ」

「日ごろの訓練の疲れも取れたでしょ」

「はい」

そうして、歩いているときいきなりキャロたちのデバイスが反応を見せる。

「ケリユケイオンが！」

「クラールヴィントにも反応、リインちゃん！」

「エリアスキャン、ロストログリア反応あり」

美由紀たちとはここで一時分かれることになる。

「さあ、お仕事だね」

「頑張ってきて！」

「フェイト、エリオ、キャロ、気をつけてな」

「先に、コテージに戻ってるね」

「みんな、しっかりね！」

なのはたちの顔が、仕事モードになる。

「ティアナ、シャマル先生とリイン、はやて隊長にオペティックハイドー！」

「はいー！」

「空に上がって結界内に閉じ込めるわ、中で捕まえて！」

「はい！」

はやてが笑う。

「ほんなら、スターズ&ライトニング、出動や！」

「了解！」

気合の入った返事をする。

全員がバリアジャケットを装備した。
空戦チームは広がったダミーを殲滅するということだ、シャアもそれに参加した。

シャアは一人で一部を守ると宣言して、そこにいる。
そして敵が現れ、シャアは武装した。

「スライムか…サザビー、出る！」

バックパック、腰部拡散メガ粒子砲、ライフル、シールドを装備する。

スライムは攻撃してくることも無い。

「ファンネル！」

ファンネルがスライムを攻撃する。

「なに、無効化された!？」

『攻撃を向こうかします、押さえるだけで構いません!』

はやてからの通信が入った。

「くっ」

アムロのフィンファンネルなら敵を閉じ込めることも楽だったろう
と思いつながら、ライフルなどを撃つ。

動きが止まるのでそれだけで十分と判断した。

『マスター、せっかくクワトロ・バジーナの姿なのですし…これは
どうですか?』

シャアの武装が解除され、バリアジャケットだけになる。

そして、金色の光と共に、足が『百式』のモノとなり、百式のバツ
クパツクが装備される。

「なに?」

『こんなことも可能ですよ』

「ふっ、ならば」

その手にはビームサーベル。

サザビーとはスピードが違う。

そのスピードのまま、シャアはスライムの進行を抑える。

蹴りとサーベルのコンビネーション、百式での戦いからである。

そして、数分も経たないうちに、スライム全ての行動が停止した。

『シャアさん、ロストロギアの封印、終了しました』

シャマルの声で、シャアは武装を解除した。

手にあるサザビーに話しかける。

「百式なのにサザビーとは、矛盾ではないか？」

『お気になさらず、私は機体ではなく、アナタの背中を守るデバイス…サザビーですので』

「ああ」

シャアが薄っすら笑う。

そして、美由紀たちに別れを告げたシャアは、機動六課へと帰宅を果たした。

帰ると、寮のロビーにザフィーラが居た、狼の姿だ。

「土産を買ってきたぞ」

ザフィーラに、犬用の肉がつまんだ缶を渡す。

「…感謝する」

それを啜えて、ザフィーラは部屋へと帰っていった。すると、肩を叩かれる。

「ん？」

振り返ってそこにいるのは、はやて。

「ザフィーラに勝手に餌付けしないでください」

「ああ…彼が気の毒になってな」

「それは…わかります」

はやてとシャアは、静かに笑った。

出張任務終了！（後書き）

ようやく出張終わりました。

最後のほうは手を抜いた感じな文章に見えないことも無いんですが。

次回からはまた本編に突入です。

お楽しみに！

ホテル・アグスタ

ミッドチルダ 首都南東地区上空 ヘリ内

フォワードたちへ、はやてが話しを始める。
モニターに映るのは、一人の男。

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや、これまで謎やった、ガジェットドローンの製作者、およびリックの収集者は現状ではこの男、違法研究で広域指名手配されてる次元犯罪者、ジェイル・スカリエツィ線を中心に、捜査を進める」

「こつちの捜査は、主に私がすすめるんだけど、みんなも一樣覚えておいてね」

「はい！」

フォワード一同の返事

「で、今日これから向かう先はここ、ホテル・アグスタ」

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護、それが今日のお仕事ね？」

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い、このことで、私達が警備に呼ばれたです」

「この手の大型オークションだと密郵取引の隠れみにもなったり

するし、いろいろ、油断は禁物だよ」

「現場には昨夜から、シグナム副隊長、ヴィータ副隊長、それにイン副隊長他数名の隊員が張ってくれてる」

「私達は建物の中の警備に当たるから、前線は副隊長達の指示に従ってね」

「はい！」

そこでおずおずとキャラロが手を上げる

「あの・・・シャル先生、さっきから気になってたんですけど、その箱って」

キャラロはシャルの横においてある3つの箱を指差した

「あつ・・・これ？ふふつ、隊長達のお仕事着」

シャルは楽しそうに言った。

へりを降りたシャアは、制服のまま、外を見回りしていた。

「むっ？（この感覚は、不安定…強化人間!?!）」

その感覚は、すぐに感じ取れなくなった。

「なんだ…」

少し心配になり、念話を使う。

『シヤマル、聞こえるか？』

『はい、どうしたんですか？』

『サーチャーの範囲を少し広めてくれ、嫌な予感だする』

『はい、わかりました』

シヤアは、再び警備を開始した。

会場外

『それにしても、今日ははやてさんの守護騎士団全員集合か』

スバルは遠くにいるティアナと念話で話す

『そうねえ、あなたは結構詳しいわよね、はやてさんとか副隊長達の事』

『うん、父さんやギン姉から聞いた事くらいだけど、はやてさんの使ってるデバイスが魔導書型で、その名前が夜天の書って言う事、シグナム副隊長にヴィータ副隊長、それにシヤマル先生とザフィーラは、はやてさん個人が保有してる、特別戦力だつて事、でそれにリン曹長あわせて六人そろえば、無敵の戦力つて事、まあはやてさんの詳しい出自とか能力は特秘事項だから私も詳しくは知らない

けど』

『レアスキル持ちの人はみんなそうよね、』

『ティア、何か気になるの？』

『別に』

『そう、じゃあ、また後でね』

そう言っつてスバルは念話を切る

「（六課の戦力は無敵を通り越して明らかに異常だ、はやてさんがどんな裏技を使ったのか知らないけど、隊長格全員がオーバーランク、副隊長でもニアランク、シャアさんは次元漂流者で魔法を覚えて間もないのに確実にオーバーランクの力を持っている、他の隊員達だつて、前線から観戦官まで、未来のエリート達ばかり、あのとしてもうBランクをとってるエリオと、レアで強力な竜召喚師のキャロは二人ともフェイトさんの秘蔵っ子、危なっかしくはあつても、潜在能力と可能性の塊で、優しい家族のバックアップもあるスバル……やっぱり、うちの部隊で凡人は私だけか……だけど、そんなの関係ない、私は立ち止まるわけには行かないんだ）」

会場からだいぶ離れた場所、そこには二つの人影、茶色いフードを被った男と同じくフードを被った少女

「あそこか……あそこにはお前の探してるものはないが……」

・気になるのか？」

「……………うん」

「そうか」

少女が人差し指をだすと円盤に四つの足をと羽をつけた虫が飛んでくる

「ドクターの玩具が、近づいてきてるって」

ホテル・アグスタ 屋上

シャマルの手にはめてある指輪、デバイス、クラールヴィントが光る

「あつ、クラールヴィントのセンサーに反応？ シャーリー！」

六課

シャリオ、ルキノ、アルトが大きな画面を見ている。

「はい！ 来た来た、来ましたよ、ガジェットドローン陸戦？ 型！」

「機影30、35」

「陸戦？ 型2、3、4！」

「？ 型も近づいています、40機！」

ホテル・アグスタ 地下駐車場

シグナム、エリオ、キャロ、ザフィーラが歩きを止める

「エリオ、キャロ、お前達は上にあがれティアナの指揮でホテル前に防衛ラインの設置をする」

「はい！」

「ザフィーラ、私と迎撃に出るぞ！」

「心得た、守りの要はお前達だ、頼むぞ」

「うん！」

「頑張る！」

キャロとエリオは走り出す。

（六課）

シャーリーが通信機に向かって叫ぶ

「デバイス、ロック解除！ グラーファイゼン、レバンティン、レベル2機動承認」

屋上

「前線各員、状況は広域防御戦です、ロングアーチ01の総合観戦とあわせて、私、シャマルが現場指揮を行います！」

「スターズ03了解！」

「ライトニングF了解！」

「スターズ04了解！」シャマル先生、私も状況を見たいんです！前線のモニターももらえませんか？」

『了解、クロスミラージュに直結するわ』

ホテル・アグスタ

「グラーファイゼン！」

「レバンティン！」

二人は吹き抜けから飛ぶ。

「新人共の防衛ラインまでは一機たりともとおさねえ！速攻でぶっ潰す！」

「お前も案外過保護だな」

「うるせえよ！」

シヤアはバリアジャケットを装備して、武装をいつものようにバックパック、腰部拡散メガ粒子砲、ライフル、シールドを装備した。

「シヤア・アズナブル、サザビー、出る！」

シヤアは空へと飛んだ。

一方地上のザフィーラは人型になり、目の前のガジェット？型と？型を睨みつける、？型と？型はビームを放つがザフィーラは眉一つ動かさずシールド魔法で防ぐ

「ここは通さん、ておりゃあああ！」

地面が割れガジェットは真下から突き出てきた白い光の槍に串刺しにされ爆発した

ホテル・アグスタ周辺

「副隊長さん達とザフィーラ強い！」

「・・・これで、能力リミッター付き？」

ティアナは拳を握り締める

空で、シャアは？型を落とす。

「数では私には勝てんよ」

シャアのファンネルが、？型を落とす。

『10機編隊接近！』

アルトの声が聞こえる。

「落ちろ！」

腰部メガ粒子砲が、10機のカジエットを落とす。

『残り、20丁度』

「嫌な感覚が消えない…強化人間、使うものがあると言っのか！」

そう言って、シャアは新たな敵に狙いを定める。

痛恨の失敗

茶色いフードの男と少女がホテル・アグスタを眺める、目の前に宇宙モニターが現れる、その画面にはジェイル・スカリエッティ。

『ごきげんよう、騎士ゼスト、ルーテシア』

フードの男ゼストと少女、ルーテシアが返事をする。

「ごきげんよう」

「何の用だ」

『冷たいねえ、近くで状況を見ているんだろう？あのホテルにレリックはなさそうだが…実験材料として、興味深い骨董が一つあるんだ、少し協力してくれないかな？君たちなら、実にぞうさもないはずなんだが』

「断る、レリックが絡まない限り、互いに不可侵を決めたはずだ」

不満そうに、ゼストが言う。

『ルーテシアはどうだい？頼まれてくれないかな？』

「いいよ」

『優しいなあ、ありがとう、今度是非、お茶とお菓子でも奢らせてくれ…君のデバイス、アスクレピオスに、私の欲しいもののデータを送ったよ』

「うん、じゃあ、ごきげんよう、ドクター」

『ああ、ごきげんよう、吉報をまっているよ』

そう言ってスカリエッティの映ったモニターは消えた。

「良かったのか？」

「うん、ゼストやアギトはドクターを嫌うけど、私はドクターのこ
とそんなに嫌いじゃないから」

「そうか」

ルーテシアは無言で首を縦に振る、そのまま手に付いた手袋型のデ
バイス、アスクレピオが光り地面に紫色の魔方陣が現れる。

「吾は乞う」

ホテル・アグスタ外部

「はっ！」

「キャロ？どうしたの？」

「近くで誰かが召喚を使ってる」

六課

『クラールヴィントのセンサーにも反応、でも、この魔力反応は！』

「お、大きい」

「吾は乞う、小さき者、羽ばたく者、言の葉に応え、我が命を果たせ、召喚
インゼクトツーク」

周りには大量の虫。

「ミッション、オブジェクトコントロール、いつてらっしゃい、気をつけてね」

虫たちは一斉に羽ばたく、虫たちはガジェットに寄生しガジェットを操る。

「動きが変わった」

「自動機械の動きじゃないな」

「有人操作に切り替わった？」

「それが、さっきの召喚師の魔法？」

シヤアが何かを察し、守護騎士たちに念話を送る。

『ヴィータ、私と共にラインまで下がるぞ、向こうに召喚師がいるならスバル達の方まで回りこまれるかもしれん』

『わっ、わかった!』

『ザフィーラ、シグナムと合流してくれ』

『心得た』

『シヤマルは広域サーチを頼む、召喚師の場所を可能ならば割り出してくれ!』

『は、はい!』

シヤアのいきなりの統率力に、守護騎士たちは驚きながらもしたがつた。

スカリエツティラボ

「やはりすばらしい、彼女の能力は」

女、ウーノがそれに応える。

『極小の召喚中による無機物自動操作、シュテーネ・ゲネゲン』

「それも、彼女の能力のほんの一旦にすぎないがね」

ルーテシアは森の中で虫を操る。

「ブンターヴィヒト、オブジェクト17機、転送移動」

ホテル・アグスタ外部

「遠隔召喚！？来ます！」

紫色の魔法陣が現れその中からガジェット？型が2機、？型が15機現れた。

「あれって召喚魔法陣！？」

「召喚ってあんな事もできるの？」

「すぐれた召喚師は、転送魔法のエキスパートでもあるんです」

「なんでもいいわ、迎撃行くわよ！」

「おう！」

「（今までと同じだ、証明すれば良い、私はいままでだって、そうやって来た）」

上空

リインは、空を飛んである場所に向かう。

「強力な召喚師、私一人じゃ叩けないまでも、せめて姿だけでも」
空を飛び魔力反応のある場所へと向かうのだが。

『リインフォース下がれ!』

シャアからの念話。

『で、でも』

『余裕があれば私が向かう、あれだけの魔力を持つ召喚師だ、死に行くなら止めはせん!』

『…こ、後退するです』

リインは後退を、決意した。

ティアナはガジェットに銃弾を撃つが一向に当たらない。
?型の強化型がホテル・アグスタに向かってミサイルを撃つがティアナがミサイルを撃ち落とす。

「ティアナさん!」

?型はビームを放つがティアナはそれをジャンプで避け、魔力弾を

放つが強化されたAMFで防がれる。

「くっ！」

スバルは上空をウイングロードで移動しながらガジェットをひきつける。

『防衛ラインもう少し持ちこたえてね、もうすぐでヴィータ副隊長とシャアさんがすぐに戻ってくるから』

「守ってばかりじゃ行き詰ります！ちゃんと全機落とします！」

『ちよっ！ティアナ大丈夫！？無理しないで！』

「大丈夫です！毎日朝晩、練習してきてんですから、エリオ、セクターに下がって、私とスバルのツートップで行く！」

「あっ、はい」

「スバル！クロスシフトA、行くわよ！」

「おう！」

スバルはガジェットをひきつけて進むみティアナは立ち止まってカトリッジロードに移る。

「証明するんだ！（特別な才能や、凄い魔力が無かったって、一流の隊長達の部隊でだって、どんな危険な戦いだって）アタシは、ランスターの弾丸は、ちゃんと敵を撃ちぬけるんだって」

ティアナの周りにはいつもよりかなり多い魔力弾。

『ティアナ！四発ロードなんて無茶だよ！それじゃティアナもクロスミラージユも！』

「撃てます！」

クロスミラージユを構える

「クロスファイヤー！シユート！」

ガジェットがことごとく撃破されていく、8、9、10と破壊していくが一発が外れた。
その先には、スバル。

魔力弾がスバルに迫り、直撃する。

「きゃっ！」

寸前、その魔力弾は一筋の閃光に撃ち落された。

「えっ？」

スバルが、閃光の飛んできた方向を見た。

その方向には、百式のバックパックと足をつけたシャアがビームライフルを構えていた。

「シャアさんにヴィータ副隊長！」

ヴィータは一瞬ホッ、とするがすぐに顔が怒りにかわる。

「ティアナ！この馬鹿！無茶やった上に味方撃ってどうすんだ！」

ティアナは今の現状が信じられないような目をしている。

「あのっ、ヴィータ副隊長、今もコンビネーションのひとつで

「スバル……」

スバルがシャアの顔を見ると、シャアが顔を横に振る。

「ふざけたこ！直撃コースだよ！今のは！」

「今のは私が避ければ」

「うるせえ馬鹿共！もういい、後はわたしがやる……二人まとめて、すっこんでろ！」

ヴィータの怒声が響いた。

ホテル・アグスタ 地下駐車場

何かが壊されるような音が響く、警備員がその方向に歩く。

「ん？誰かいるんですか？ここは危険ですよ」

そこには荷台の荷物が持っていかれたトラックだけだった

ホテル・アグスタから少し離れた森の中。

「うん、ガリユー、ミッションクリア、いい子だよ、じゃあそのままドクターに届けてあげて」

「品物はなんだったんだ？」

「わからない、オークションに出す品物じゃなくて、密郵品みたいだったけど」

「そうか……戦いもう終わりだ、前線の騎士達がなかなかいい戦いをした、さて、お前の探し物にもどるとしよう」

「うん」

ルーテシアとゼストは其の場を去っていった。

ホテル・アグスタ前

「終わったか」

「すまん、召喚師を追うタイミングを逃した」

「だが居るとわかったなら対策も練れる」

「ん？ティアナは？」

「裏手の警備に」

「スバルさんも一緒です」

キャラとエリオは少し気まずそうに応えた

ホテル・アグスタ 裏

スバルが、ティアナに声をかける。

「ティア、向こう、終わったみたいだよ」

ティアナは背を向けたまま返事をした。

「私はここを警備してる、あんたはあっち行きなさいよ」

「…あのね、ティア！」

「いいから」

「ティアは全然悪くないよ、私がもつと」

「行けって言うてるでしょ!!」

「えっ……ごめんね、また後でね、ティア」

そう言ってスバルは走り去っていく

「うっ……うっ……私は……私は」

ティアナは壁に顔を向け涙を流す。

スカリエツティラボ

ジェイルが、興味深そうに見るのは、シヤア。

「新しい新参者かい？」

『ドゥーエの情報によると、かなりできると』

笑う。

「そんなことよりも…このバリアジャケットの上の装備、実に興味深い」

『ドクター、どうなさるおつもりですか？』

「この目、確実に正義の味方の目では無いね…ドゥーエに任せてみてくれ」

『はい、ドゥーエに伝えておきます』

ジェイルは、静かに笑っている。

痛恨の失敗（後書き）

ホテル・アグスタが終わりました。

シヤアにはこれからいろいろなことを頑張ってもらいます。

出来る限りシヤアらしさを出して頑張ろうと思います。

願い、ふたりで

機動六課隊舎前

機動六課フォワードメンバーが隊舎前に集っていた。

「みんなお疲れ様、じゃあ今日の午後の訓練はお休みね」

「明日に備えて、ご飯食べて、お風呂でも入って、ゆっくりしてね」
なのはとフェイトの言葉に、フォワードメンバーが大きく返事をす
る。

「はい！」

シヤアは、ティアナを見ていた。

「ティアナ」

少し機嫌が悪そうな雰囲気がある。

「今日のごことは気にするな…訓練を積み重ねればすぐミスは無くな
る」

「……はい」

それにて解散となった。

隊舎の前に来てティアナは立ち止まる。

「スバル、私これからちょっと一人で練習してくるから」

「自主練？私も手伝うよ」

「あつ、じゃあボクも」

「……ゆっくりしてねって言われたでしょ？あんた達はゆっくりしてなさい、それにスバルも、悪いけど、一人でいたいから」

「う……うん」

スバルは、少し寂しそうに返事を返した。

なのは、フェイト、ヴィータ、シグナム、シャア、シャリーが六課の廊下を歩いている。

「あのさ、3人ともちよつといいか？」

フェイトとなのはとシャアに声をかけると、三人が振り向く。

なのは、フェイト、シャア、ヴィータ、シグナム、シャリオの計6人がソファに座って話している。

「訓練中からちょっと気になってたんだよ、ティアナのこと」

「うん」

「強くなりたいたいなんてのは、若い魔導師なんてみんなそうだし、無茶も多少はするもんだけど、ティアナは特にだけど時々ちょっと度を越えてる、あいつ・・・ここに来る前なんかあったのか？」

なのはが宇宙モニターを操作すると一人の青年の写真がでてくる

「ティアナのお兄さん、ティード・ランスター、当時の階級は一等空尉、所属は首都航空隊、享年21歳」

「結構なエリートだな」

「そう、エリートだったから・・・なんだよね、ティード一等空尉が亡くなったときの任務、逃走中の違法魔導師に手傷は負わせたんだけど、取り逃がしちゃって」

「まあ、地上の陸士魔導師部隊に強力を仰いだおかげでその日のうちに犯人は捕まったんだけど」

「その件についてね、心無い上司がちょっと酷いコメントをして、一時期問題になったの」

「コメントって、なんて？」

「犯人を追い詰めながらも取り逃がすなんて、首都航空隊魔導師としてあるまじき失態で、たとえ死んでも取り押さえるべきだったって・・・もつと直球に、任務に失敗する役立たずは・・・うんぬん、とか」

「ティアナはその時、まだ十歳、たった一人の肉親をなくして、しかもその最後の仕事で、無意味で役に立たなかったって言われて、きつと物凄く傷付いて、悲しんだ」

シャアはその言葉を聞いた時、少しばかり目を細めた。

スバル&ティアナの部屋

スバルがマツハキヤリバーを磨いていると、ティアナが戻ってくる

「あつ、ティア」

「あんたまだ起きてたんだ、明日朝4時起きだから、目覚ましうるさかったらごめんね」

ティアナは過度の訓練のせいでかなり疲労していた。

「いいけど…大丈夫？」

「うん……すうー」

すぐに規則正しい寝息が聞こえてくる。

シャアの部屋

ソファに座りながら、シャアはサザビーを見る。

『地球連邦の高官のような性格の人間がいるのでしょっ』

「…私は少々立ち位置を変えるべきかもしれん」

『なるほど…スカリエッティのデータをかき集めます』

「頼んだ」

シヤアはそう言って、髪をかきあげた。

スバル&ティアナの部屋

目覚まし時計の音が鳴り響く。

「ティア、おきて、4時だよ」

ティアナは手を伸ばして目覚ましを止める。

「ごめん、今起きた」

「練習いけそう？」

「行く」

「はい、トレーニング服」

「はい、ありがとう」

そう言つてティアナはトレーニング服を受け取つて着替えようとする。

「さつ、じゃあ私も」

「つてなんであんたも！」

「一人より二人の方がいるんな練習できるしね、私も付き合つ」

「いいわよ、私に付き合つてたらまともに休めないわよ？」

「知つてるでしょ？私、日常行動だけなら4、5日休まなくつても平気だつて」

「日常じゃないでしょ？あんたの訓練は特にきついんだから、ちゃんと寝なさいよ」

「やくだよ、アタシとティアはコンビなんだから、一緒に頑張るの」
「！」

「あつ… かつ勝手にすれば!？」

ティアナは、顔を赤らめてそう言った。

二人は寮から訓練所までの道を歩いていると、シャアと会つた。

「自主練習か？」

「はい！」

スバルが元気良く返事をする。

「あの、昨日はありがとうございました！」

「いや、気にするな…良い心がけだが、無理は禁物だぞ」

「はい！」

今度は、ティアナが元気良く返事をして、スバルと共に訓練所までかけて行った。

数日後

なのはが、地上のスバルとティアナを見下ろしている。

「さあ、午前中のまとめ、2オン1で模擬戦やるよ、まずはスターズから、バリアジャケット、準備して」

「はい！」

一方ウィータは、ビルの屋上で

「ライトニングはあたしとシャアと見学だ」

「はい！」

シヤアとエリオ、キャロ、ヴィータがこれから模擬戦が行われるであろう場所を見ている。

スバルとティアナはバリアジャケットに着替えた

「やるわよ！スバル！」

「うん！」

ビルの屋上、でライトニングとシヤアとヴィータは模擬戦を眺める、フェイトが屋上にやって来た。

「私も手伝おうと思ってたんだけど」

「今はスターズの番だ」

シヤアに言われると、フェイトが頷く。

「本当は、スターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね」

「ああ、なのはもここんとこ訓練密度濃いからな、ちょっとは休ませねえと」

「なのは、部屋に戻ってもモニター見っぱなしなんだよ、訓練メニュー作ったり、みんなの陣形ビデオで見たり」

「なのはさん、訓練ちゅうもいつも僕たちの事見ててくれるんですよね」

「本当に…ずっと」

「おっ、クロスシフトだな」

ヴィータの言葉に、全員がそちらを向く。

ティアナが叫ぶ。

「クロスファイヤー！シユート！」

オレンジ色の誘導魔力弾がなのはに向かう。

それを見たシャアたち。

ヴィータが疑問を口にする。

「いつもより切れがねえな」

「コントロールはいいんだけど」

「いや…だからって」

「（先ほどから…これは、寂しさ？孤独？…感情が…ティアナか？）」

シャアは何かを感じ取っていた。

ウイングロードの上で戦闘が行われている。

「でやああああ！」

スバルはなのはに拳をぶつけようとするが、シールド魔法で弾き飛ばされる。

「うわああああ！」

ウイングロードに着地したスバルを見てなのはが言う。

「ほらスバル、ダメだよそんな危ない軌道」

「はい！すみません、でも、ちゃんと防ぎますから！」

「ん？……ティアナは？」

ティアナは遠くのビルから、なのはに二つの銃口を向けて前方には大きな魔法陣を用意している。

フェイトが驚く。

「砲撃？ティアナが？」

「（ティアナ、なにを）」

シヤアは注意深くそれをみる。

スバルの頭に、念話が響く。

「（特訓成果、クロスシフトC、行くわよスバル！）」

「おう！」

スバルはカートリッジロードを済まし、全速力でなのはに向かって拳を繰り出す。なのははシールドで押さえる。

「（…ティア〜！）」

ビルの屋上にいたティアは消える。

エリオとキャラロが驚く番だ。

「あつちのティアさんは幻影！？」

「本物は!？」

そう言っているのをよそに、シャアは感ずいた。

「（これは…まさか!?!）」

全員が探す。

ティアナはウイングロードを駆け上がりながら、クロスミラージユ

の銃口に魔力の刃を作る。

「（バリアを切り裂いて、フィールドを突き破る…）一撃必殺！でええええい！」

ティアナは刃をなのはにむけて上から飛び降りる。

「レイジングハート、モードリリース」

なのははボソツとつぶやく、直後、煙が起こる、煙が徐々に晴れていく。

「おかしいなあ、二人とも、どうしちゃったのかな？」

スバルの拳を左手で、ティアナの刃を右腕で押さえていたなのはの姿があった。

「がんばってるのはわかるけど、模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ、練習の時だけ言うこと聞いているふりで、本番でこんな危険な無茶するんなら、練習の意味、無いじゃない、ちゃんとさ、練習どおりやろうよ…ねえ？」

なのはの右手からは血がダラダラと垂れている。

「あっ…あの」

「私の言ってる事、私の訓練、そんなにまちがってる？」

ティアナは刃を消して後ろのウインググロードにさがった。そして、なのはに双銃を構える。

「私は！もう、誰も傷つけないから！」

泣きながら言う。

「なくしたくないから！だから…強くなりたいんです！」

「少し…頭冷やそうか」

なのは冷たい瞳と指をティアナに向けて魔法陣を足元に浮かばず。

「クロスファイヤー…」

「でやあああああ！ファントムブレイズ！」

「シュート」

桜色の砲撃魔法がティアナに直撃して爆発が起こる。

「ティアっ、あっ！」

スバルにバインド魔法がかかる。

「じっとして、良く見てなさい」

砲撃の中でかろうじてティアナは立っていた、そこになのは。

「あっ、なのはさん！」

砲撃を放つ、再び大爆発が起こる。

「ティアナあああああ！」

煙が晴れたその先には、何もなかった。
だがすぐ横には

「危ないな……」

気絶しかけているティアナを抱えたシャアが立っていた。

「ティアナ、大丈夫か？」

「お…にい…ちゃん？」

そう言ってティアナは気絶した。

「これは、困ったな」

そう言ってシャアは、自らの妹を思い出した。

大切なこと

ティアナが、目を覚ました。

「ん？」

真っ先に目に映ったのは見慣れぬ天上だった。

「あれ？」

すばやく起き上がる、自分は医務室のベッドで寝ていたらしい、扉が開いてシャルマルが入ってきた。

「あらティアナ、起きた？」

「シャルマル先生…えつと…え」

「ここは医務室ね、昼間の模擬戦で、撃墜されちゃったのは覚えてる？」

「なのはさんに撃たれて…あつ」

ティアナは、シャアを兄と呼んでしまったことを思い出す。

「うん、なのはちゃんの訓練用魔法弾は優秀だから、体にダメージは無いと思うんだけど」

ティアナはベッドから立ち上がるつもりだったが、ズボンを穿いていなかったの気付き赤面した。

「どこか痛いところある？」

シャマルが持ってきたズボンを受け取る。

「いえ、大丈夫です」

そう言っつて時計を見ると時計の針は

「えっ、9時過ぎ！？あっえ、夜！？」

「凄い熟睡してたわよ、死んでるんじゃないかって思うくらい、最近ほとんど寝てなかったでしょう？たまった疲れが一気にきたのよ」

そう言っつて、シャマルは心配そうにティアナを見た。

シャアの部屋

宇宙モニターの扱いにもなれ、シャアはジェイルの資料を読んでいる。

『かなりの情報があつまりました』

それはサザビーから発せられた。

「今日中にチェックするのは辛いものがあるな…なるほど」

一度、空宙モニターを消す。

『どうしました？』

「他にも情報があるはずだ…フェイトに明日聞く」

シャアはそう言って、空宙モニターを消した。

その時、警報が鳴り響いた。

アルトとルキノが、グリフィスに報告する。

「東部海上にガジェットドローン2型が出現しました！」

「機体数、現在12機、今のところ旋回飛行を続けています」

「レリックの反応は？」

「今のところはありません」

「ですが、この機体速度は、今までのよりだいぶ、いえ、かなり速くなっています」

ルキノの焦った声が、通信機で皆に聞こえた。

ヘリポート

なのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、シャア、フォアード陣が

集っている。

「今回は、空戦だから、出撃はフェイト隊長、ヴィータ副隊長、私の3人」

「みんなはロビーで別働待機ね」

「そっちの指揮はシグナムだ、シャアも留守を頼むぞ」

ヴィータが二人にそう言った。

「あっ…それからティアナ」

ティアナはなのはの顔を見る。

「ティアナは戦闘待機からはずれとこうか」

「っ!」

「えっ!?!」

スバル、エリオ、キャロが同時に驚く。

「その方がいいな、そうしとけ」

「今夜は体長も魔力も、ベストじゃないだろうし」

「言う事を聞けない奴は…使えないって事ですか?」

「自分で言っていてわからない? 当たり前的事だよ、それ」

「現場での指示や命令は聞いてます、教導だって、ちゃんとサボらずやっています！」

ティアナが大声をあげる。

ヴィータがティアナの元へ行こうとするがなのはが止める。

「それ以外の場所での努力だって、教えられたとおりじゃないとダメなんですか？私は、なのはさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオみたいな才能もないし、キャロみたいなレアスキルもない、少しくらい努力しても死ぬ気でやらなきゃ強くならじゃないですか！」

ティアナは横から誰かに引つ張られる、引つ張った本人はシグナム、そのまま拳をティアナの頬にぶつける、ティアナは多少吹き飛ばす。シヤアは、この間見ているだけだった。

軍なのだから修正は当然、自分も軍人でここでは立場が高いとはいえない。

抗議などする必要もなかった。

「シグナム！」

「シグナムさん！」

スバルとなのはが少し声を荒げる。

「心配するな、加減はした、ダダをこねるだけの馬鹿は、なまじ付き合っつてやるから付け上がる、ヴァイス！もう出られるな！」

「乗り込んでいただければすぐにでも！」

「ティアナ！なんだか思いつめちゃってるみたいだけど！戻ってき
たらゆっくり話そう！」

「ほらっ、相手にするなっで！」

なのはヴィータに引っ張られへりの中に入る、へりはすぐに飛び
立った。

「目障りだ、いつまでも甘ったれてないで、さっさと部屋に戻れ」

「シグナム副隊長！」

「なんだ？」

「命令違反は絶対ダメだし、さっきのティアナの物言いとかが、それ
を止められなかった私は確かにダメだったと思います、自分なりに
強くなるうとするのとか！キツイ状況でも、何とかしようとするの
とかって、そんなにいけないことなんでしょうか！自分なりの努力
とか、そういうことも、やっちゃいけないんでしょうか！」

シグナムが動こうとするが、次はシャアが止めた。

シャアを睨むが、シャアは頭を横に振るだけ。

「自主練習はいいことだし、強くなるための努力も、凄くいいこと
だよ」

後ろから聞こえる声にフォアードメンバーは振り返る。

「シャリーさん」

「持ち場はどうした」

「メインオペレートは、リイン曹長が居てくれますから…なんかもう、みんな不器用で、見られなくて、みんな！ちよっとロビーに集まって、私が説明するから、なのはさんの事となのはさんの…教導の意味」

そう、シャリオは寂しそうに言った。

先ほどヘリポートに居た全員が隊舎のロビーにあるソファに座っている。

「昔ね、一人の女の子がいたの、その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてするような子じゃなかった」

大きなモニターに幼き頃のなのが映る。

「友達と一緒に学校に行つて、家族と一緒に幸せに暮らして、そういう一生を送るはずの子だった、だけど、事件が起こったの、魔法学校に通っていたわけでもなければ、特別なスキルがあったわけでもない、偶然の出会いで魔法を得て、たまたま魔力が大きかったっただけの、9歳の女の子が、魔法と出会ってからわずか数ヶ月で命がけの実戦を繰り返したの」

画面にはなのはとフェイトが戦っている画像。

「これって」

「フェイトさん」

「テストロツサは当時、家族環境が複雑でな、あるロストロギアをめぐって、敵同士だったそうだ、この事件の中心人物は、テストロツサの母、その名を取って、プレシア・テストロツサ事件あるいはジュエルシード事件と呼ばれるようになった」

画像ではなのはが『全力全開』の収束砲をうっている。

「収束砲！？こんな大きな！」

「9歳の…女の子が！」

「ただでさえ、大威力砲撃は体に負担がかかるのに！」

「その後もな、さほど時もおかず戦いは続いた」

なのはとヴェータが戦っている画像。

「私達が深くかかわった、闇の書事件」

「襲撃戦での、撃墜未遂と、敗北…それに打ち勝つために選んだのは、当時はまだ安全性が危うかった、カートリッジシステムの使用体への負担を無視して、自身の力を引き出す、フルドライブ、エクセリオンモード、誰かを救うため、自分の思いを通すための無茶を、

なのははしてきた、だが、そんな事を繰り返して、体に負担がしよ
うじないはずもなかった」

「事故が起きたのは、入局2年目の冬、任務の帰り、ヴィータちゃんや部隊のみんなと出かけた場所、不意に現れた未確認体、いつものなのはちゃんなら何の問題もなく味方を守って落とせるはずだった相手、けど、たまっていた疲労、続けてきた無茶が、なのはちゃんの動きをほんの少しだけ鈍らせちゃった」

画像では血だらけなのはにヴィータが叫びかけていた。

「その結果が、これ」

画像は痛々しいほど包帯で体中を捲かれていたなのはだった。
シヤアが、少し皆とは違う目で見る。

「なのはちゃん、むちゃして迷惑かけてごめんなさいって、私達の前では笑ってたけど、もう飛べなくなるかも、とか立って歩けなくなるかもって聞かされて、どんな思いだったか」

「無茶をしても、命を懸けても勝たねばならぬ闘いの場は確かにある、だが、お前がミスショットをしたあの場面は、仲間の安全や、命をかけても、どうしても撃たねばならない状況だったか？・・・
・・・訓練中のあの技は、一体誰のための、何のための技だ？」

ティアナははっとした後俯く。

「なのはさんさ、皆に、自分と同じ思いさせたくないんだよ、だから、絶対無茶なんかしないように、皆が絶対絶対むちゃなんかしないようにって」

フォアード陣は全員涙目である。

シャリオ「本当に丁寧に、一生懸命考えて、教えてくれてるんだよ」

シャアは、冷たい目で、なのはが重傷になっている画像を見ていた。

ヘリポート

シャリオが、なのはに頭を下げている。

「えー!？」

「ごめんなさい!」

「うーん、ダメだよシャーリー、人の過去勝手にばらしちゃ」

「だめだねえ、口の軽い女はよお」

「その、なんかこう、見てられなくて」

「まあ、いずれはばれる事だしな」

「シャーリー、ティアナ今どこにいるかな?」

「えっと、多分」

そして、なのはそこへと向かう。

ティアナとなのはが港で話をしている。

それを木に隠れて見守るスバルとエリオとキャロとフリードリッヒ、それにシャーリー少しするとティアナがなのはに泣きついてなのはがティアナを抱きしめた。

そして、別の木の裏に背をつけて、シャアはその会話を聞いていた。

「（あの当時は、なのはは12歳くらい…それを実践に出して、あそこまでの重傷を負わせ…拳銃に体の機能が停止するかもしれないかっただ）」

シャアは、サザビーを見る。

「こんなことが許されるのか」

静かに怒りを燃やして、シャアは時空管理局に不信を持ち、あることを決めた。

その後、10時。

シャアの部屋に、インターホンがなる。

「ん？」

部屋の扉を開けると、そこにはティアナ・ランスターが居た。

「どづした？」

「えと…その、訓練の件、助けていただいております」「
ティアナが頭を下げる。

「たしか、私のことを兄と勘違いしていたな？」

「は、はい、すみませ…ん」

見かけも、雰囲気も、なにかも全然違うのに、なぜだか言っ
てしまった。

この人には、兄といわせるなにかがあったのだろう。

「いや…」

ティアナには、妹であるアルテイシアとはまったく違うにも関わ
らず。

妹と思わせるなにかがあった。

「…あの…た、たまで良いんで…お兄ちゃんって、いや、呼び方は
どうでも良いんですけど…呼んで良いですか？」

シヤアは、薄っすらと笑う。

「構わんよ…私に君の兄が勤まるとは思わんがね」

その返事に、ティアナは笑顔でお礼を言った。

朝の訓練、隊舎前にはフェイト、スバル、キャロ、エリオ、そこにティアナが歩いてくる。

「おはようございます」

「うん、おはよう」

ティアナはどことなくぎこちなく挨拶をする。

「おはようございます」

「うん、良く眠れた？」

フェイトの言葉に、ティアナは答える。

「はい」

全員で訓練場に向かって歩いている最中。

「技術がすぐれてて、華麗で優秀に戦える魔導師をエースって呼ぶでしょ？その他にも、優秀な魔導師をあらわす呼び方があるって、知ってる？」

全員がわからない、という顔をする。

フェイトは少し微笑み。

「その人が居れば、困難な状況を打破できる、どんな厳しい状況でも突破できる、そういう信頼を持って呼ばれる名前、『Striker』……なのは、訓練を始めてすぐの頃から二人そろって言う」

てた、うちの4人は全員、一流のストライカーになれるはずだって、だから、うんと厳しく、だけど大切に、丁寧に育てるんだって」

フェイトの言葉に、フォアード陣の顔は嬉しさに満ちた。

シャアの部屋、いきなり、インターホンが鳴った。

「……タイミングが良いな」

そこには、同員の制服を着た。
金髪の女性。

「こんにちは、シャア・アズナブルさん」

シャアは周りを良く見た後、女性を部屋に入れた。

大切なこと（後書き）

ティアナの見せ場でした。

メインヒロインはティアナではありませんよ。
むしろハーレムめざしなので、メインとかありません。

この話しはかなりのキーになっていて、後々にかなり関わってくるので

お楽しみにしててください！

機動六課のある休日

朝、シャアはいつも通り布団から体を起こす。

「今日は、第二段階見極めテストか…」

昨夜、なのはとフェイトに聞いていたシャアは、それを見に行くつもりだったが、通信が入っていた。

「むっ…ドゥーエか」

宇宙モニターのパネルにタッチすると、モニターに金髪の美女が現れる。

『はい、シャア…誰にも傍受されてない?』

金髪の美女ドゥーエは軽いテンションで言った。

「ああ、信用されているからな」

苦笑いして、シャアは言った。

『ところで、あの話しは考えさせてもらうは…一様、私にも考えるべきことがあるのよ』

「ありがとう、助かる」

『そのかわり埋め合わせはしてもらっけどねえ』

ドゥーエは笑って言った。

『まあ、ばれない為にも、私の妹と会った時は全力で戦ってね』

「ああ、任せてくれ」

『じゃあ、また連絡するわ』

そう言つて、通信は切れた。

そういえば、ティアナは最近人当たりがよくなった。

自分を兄と呼ぶ頻度も多くなり、笑うようになった。

二人の時しか兄と呼ばないのは、彼女なりの計らいだろう。

「フツ： 良い妹をもったものだ」

シヤアは訓練場へ急ぐ為、着替えを始めた。

訓練場

訓練終了、フォワード陣となのは、ヴィータ、フェイトが集まる。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了、お疲れ様、でね、何気に今日の模擬戦が第二段階見極めのテストだったんだけど」

フォワード陣は驚愕の声を上げる。

「どつでした？」

隊長達の声を抑ぐ。

「合格」

「はやっ！」

フェイトの答えに、スバルとティアナがツツこむ。

「まっ、こんだけみっちりやって、問題あるようなら大変、てこった」

キヤロとエリオは苦笑いする。

「にははは…私もみんな良い線言ってると思うし、じゃあ、これにて二段階終了！」

フォアード陣は皆喜びの声を上げている。

「デバイスリミッターも一段解除するから、後でシャーリーの所に行って来てね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練するからな」

「はい！」

「…えっ、明日？」

キヤロの疑問も納得だ。

「ああ、訓練再開は明日からだ」

「今日は私達も隊舎で待機する予定だし」

「皆、入隊日からずっと訓練漬けだったしね」

フォワード陣は全員顔を合わせあう。

「今日は皆、一日お休みです」

フォワード陣の顔は明るくなる。

「町にでも出て、遊んでくるといいよ」

「はい！」

フォワード一同は、元気良く返事をした。

解散後、フォワード一同が寮に向かって歩いている。
ティアナが妙にテンションが高かった。
すると、道の先にシャアがいた。

「お兄ちゃん！」

ティアナはテンション故か、シャアに飛びつく。
シャアは見事にティアナをキャッチして、地面に下ろす。

「第二段階は終わったのか？」

「うん、合格した」

少し頬を赤らめて、ティアナが笑う。

「だが：こんな場所でそんなことをして良いのか？」

ティアナが、ハツとして振り返る。

スバルが楽しそうに笑っていて、エリオとキャラ口は苦笑いしている。

「ばっ、バカスバル、なに笑ってんのよ！」

ティアナが、スバルと鬼ごっこを始めている光景を見て、シャアは笑っていた。

その後、ティアナの見送りにはいかず、シャアは自室にて調査をしていた。

『マスター、これはどうです？』

「それもだ」

『了解』

シャアの前には、空宙モニターが増える。

「…待て、通信だ」

キャラ口から全体に通信らしい。

『こちら、ライトニング4、緊急事態につき、現場状況を報告します、サードアベインF23の路地裏でレリックと思しきケースを発見、ケースを持っていたらしき小さな女の子が一人』

『女の子は意識不明』

『指示をお願いします』

金髪の少女がエリオに抱かれ、気絶している。

シヤアは小走りで皆が格分隊の隊長たちと合流した。

「スバルとティアナ、ごめん、お休みは一旦中断」

『はい！』

『大丈夫です！』

「救急の手配はこっちです、二人はそのまま、その子とケースを保護、応急手当をしてあげて」

『はい！』

エリオとキャラコの返事。

「全員待機体勢、席をはずしてる子達は配置に戻ってなあ、安全確保に保護するよ、レリックもその女の子もや」

その言葉に、部隊が戦闘態勢に入る。

地裏にはへりからやってきたメンバー（なのは、フェイト、シヤア、シヤマル、ザフィーラ、ヴァイス）が女の子を見ている

「バイタルは安定してるわね、危険な反応もないし、心配ないわ」

「良かった」

「ごめんね皆、お休みの最中だったのに」

申し訳なさそうに言うフェイト。

「いえ」

「平気です」

「ケースと女の子は、このままへりで搬送するから、皆は、こっちで現場調査ね」

「はい！」

「シヤアさん、この子へりまで抱いてってもらえる？」

「わかった」

シヤアは、女の子をへりまで運んだ。

六課

シャリオがなにかを見つけた。

「ん？ガジェット、来ました！数機ずつのグループで、16、20
！」

「海上方面、12機単位が5グループ」

「多いなあ」

「どうします？」

補佐であるグリフィスははやてに聞くが。

「そつやなあ」

その時、通信が入る。

「スターズ2からロングアーチ、こちらスターズ2、海上で演習中
だったんだけど、ナカジマ三佐が許可をくれた、今現場に向かつて
る、それからもう一人」

「108部隊、ギンガ・ナカジマです、別件捜査の途中だったんで
すが、そちらとも関係がありそうなんです、参加しても宜しいでし
ょうか？」

「うん、お願いや…ほんならヴィータはリンと合流、協力して、海上の南西方向を制圧」

『南西方向了解です！』

「なのは隊長とフェイト隊長、それにシャアさんは北西部から」

『了解』

三人は声を合わせて返事する。

「へりのほうは、ヴァイス君とシャマル、それとザフィーラに任せてええか？」

『お任せあれ』

『しっかり守ります』

『盾の守護獣の名にかけて』

「ギンガは、地下でスバル達と合流、日々、別件のほうの話も聞かせてなあ」

『はい』

ギンガの返事に、はやては頷いた。

ビルの屋上ではフェイトとなのは、それにシヤアが立っている

「フォワードの皆、ちょっと頼れる感じになってきた？」

「もっと頼れるようになってもらわなきゃ」

「そうだな、また、明日には強くなってるさ」

「にやはは・・・さ、やろっか」

光が溢れる、光が収まるとそこにはバリアジャケットに着替えた三人の姿。

シヤアはサザビーの武装をフル装備だ。

「早く事件をかたづけて、また今度、お休みあげようね」

「そうだな」

三人は飛び立つ。

「みんなで遊びにいったら、きっと楽しいよ」

フェイトの言葉に、なのはとシヤアは頷く。

へりの後部メインハッチが開かれる

「気をつけてね？」

「はいです…」

そう言うとリインはへりから飛び立つ

「ヴァイス陸曹も、よろしくですよ!」

『つつす!』

そうしてへり市街地上空に移動する。

六課

「スターズ1ライトニング1並びにシャアさん、現場に進行後一分ほどでエンゲージです」

「スターズ2、リイン曹長と合流」

「フォワード陣、ガジェットの目標点に進行中、このペースなら進行できます」

嬉しそうに言った。

地下水路

ティアナが念話で話す。

「ギンガさん、お久しぶりです」

『うん、ティアナ、現場リーダーは貴方でしょ？従うから、指示をくれるかな？』

「はい！」

ギンガ側

ティアナからの念話。

『ひとまず南西のF - 94区画を目指してください、途中で合流しましょう』

「了解！」

ティアナ側

「ギンガさんって、スバルさんのお姉さんですよね？」

「そう、私のシューティングアーツの先生で、歳も階級も2つ上」

「ギンガさん」

ギンガ側

『準備いいでしょうか？』

「うん、ブリッツキヤリバー、お願いね？」

ギンガは光に包まれる、光が割れるとバリアジャケットを着たギン

ガが居た。

海上

「はぁ！」

「でやぁ！」

二人は魔力弾で敵機を迎撃する。

「落ちろ、蝦トンボ…ええい、きりが無い」

シヤアも、ファンネルとライフルで敵機を落とす。

六課

後ろでははやてがモニターのギンガと会話を交わしている。

「私が呼ばれた現場にあったのは、ガジェットの残骸と、壊れた生態ポットなんです、丁度5、6歳の子供が入るくらいの、近くに何か、重いものを引きずったような後があって、それを辿って行こうとした最中、連絡を受けたしだいです…それからこの生態ポット、少し前の事件で良く似たものを見た覚えがあるんです」

「わたしも、な」

「人造魔導師計画の素体培養機…これは、あくまで推測ですが、あの子は人造魔導師計画の素材として、作り出された子供ではないかと」

地下水路

「人造魔導師って」

「優秀な遺伝子をつかって、人工的に生み出した子供に、後天的に強力な魔力や能力を持たせる、それが、人造魔導師」

「倫理的な問題はもちろん、今の技術じゃどうしたっているんな部分に無理が生じる、コストも合わない、だから、よっぽどどうかしってる連中じゃない限り、手を出したりしない技術のはずなんだけど」
キャロのケリユケイオンが光りだす。

「来ます！小型がジェット、6機！」

全員背中合わせになって構える。

六課

「スターズ1ライトニング1シャアさん、2グループ目を撃破、順調です！」

「スターズ2とリイン曹長も1グループ目、撃破です」

海上

ヴィータたちは、なのはたちとは別の場所で敵機を殲滅していた。

「おし！良い感じだ」

「リインも絶好調です！」

「ガンガン行くぞ、さっさと片付けて他のフォーローにまわらねえと」

「はいです！ん？あれは」

ヴィータはリインの向いている方向を見る、そこには大量のガジェ
ット？型。

「増援？」

一方、なのはとフェイトとシャアたち。

「これは？」

「この反応」

誰も気づかない、雲の上にはメガネでおさげの女。

「ふふふ、クアットロのインヒューレントスキル、シルバーカーテ
ン、嘘と幻のイリユージョンで、回ってもらいましょう」

女の手からは緑の光があふれ出た。

「ん、邪気がきたか？」

シャアは、一瞬だけ雲の上から感じた感覚を不穏に感じた。

ナンバーズ

海上

フェイトのプラズマランサーが？型を破壊する。
中には消えていくのもある。

「幻影と実機の構成編隊？」

ミサイルが3人に飛ぶ。

煙に包まれるが晴れた中には桜色のシールドに包まれ背をあわせている3人。

「防衛ラインを割られない自信はあるけど、ちょっとキリがないね」

「ここまで派手なひきつけをするということは、地下かへりのほうに主力が回ってるな」

「なのは、シャア、私が残ってここを抑えるから、ヴィータと一緒に」

「フェイトちゃん！？」

「3人でも、普通に空戦してたんじゃ、時間が掛かりすぎる」

「？型ガミサイルを大量に発射してくる、シールドの中に振動が伝わる。」

「限定解除すれば、広域殲滅でまとめて落とせる」

「それはそうだけど」

「なんだか嫌な予感がするんだ」

「でも、フェイトちゃん」

「私がやるっ」

「えっ？」

シャアの言葉に、フェイトが驚く。

「私にも、一つだけ大火力砲撃がある」

「でも、シャアさん」

その時3人の間にモニターが現れる。

『割り込み失礼、ロングアーチからシャア・アズナブルさんへ、その案も、限定解除も、部隊長権限で却下します』

そのモニターには、騎士甲冑を纏ったはやて。

「はやて」

「なんだと？」

「なんで騎士甲冑なんて！」

『嫌な予感は大タシも同じでなあ、クロノ君から、あたしの限定解除許可をもらう事にした、空の掃除は私がやるよ』

「まったく…私たちは？」

シヤアが聞くと、はやてが笑う。

『シヤアさん、なのはちゃんフェイトちゃんは地上に向かってヘリの護衛、それにヴィータとリインはフォワード陣と合流、ケースの確保を手伝ってな』

『了解！』

シヤアたちはヘリへと向かう。

一方、こちら。

はやては雲の上に移動する。

「よし、久しぶりの遠距離広域魔法、行ってみようか！」

はやては騎士シュベルトクロイツの杖を振りかざした。

『ロングアーチ1シヤリオからロングアーチ0、八神部隊長へ』

「はいな！」

『ファイティングサポートシステム、準備完了です、シュベルトクロイツとのシンクロ誤差、調整完了』

「うん、ごめんな、精密コントロールとか、長距離サイティングは、

リンと一緒にやないとどうも苦手で」

『その辺は、こっちにお任せください！準備完了です！』

「おおきにな、」こよ、白銀の風、天よりそそぐ矢羽となれ』」

『スターズライトニング1、シャア・アズナブル、安全域に退避、着弾地点の安全、確認』

「よし、第一波いくよお！フレイスヴェルグ！」

はやての前方の魔法陣から5つの砲撃が出る。

『フレイスヴェルグ、第一波発射！発射機動、正常』

『グループEに着弾します』

ガジェットはフレイスヴェルグを避けた。

かに思われたが爆発、広範囲のガジェットをなぎ払った。

『グループE、消滅』

『続いてB、着弾消滅』

『同じくA』

『追撃、第二波発射』

シャアたちが飛ぶ後ろで、まばゆい光が点いたり消えたりを繰り返していた。

少しの時間飛行し続ける。
へりが視界に入った。

「見えた！」

「よかった、へりは無事」

「あっ！」

『市街地に高エネルギー反応』

『これは…そんな、まさか！』

『砲撃のチャージ確認、物理破壊型、推定Sランク！』

砲撃が、へりへと発射された。

六課の映像が回復するまでには、数分をようした。
回復した時、そこにはへりを守る白銀のシールドと盾の守護獣と言
う名をもつ一人の大男。

「ザフィーラからロングアーチへ！へりの防御に成功した」

ザフィーラはシールドを解いた。

「ありがとうございます！ザフィーラさん！」

なのはは少しバリアジャケットが変わった状態で言う。

『限定解除！なのはさんとレイジングハートさんのエクシードモード！』

興奮した声で、シャリオが叫ぶ。

「あら〜」

「こつちもフルパワーじゃないといえ・・・マジで？」

撃つたのはナンバーズの10番ティエチ。

そして隣りにいるのは4番クアットロ。

空からは大量の黄色い魔力弾。

それをジャンプして他のビルに移って避ける。

「見つけた」

振り向いたその先にはフェイト。

「こつちも!？」

クアットロは空を飛べないティエチを抱えて飛行魔法でフェイトから逃げる。

「待ちなさい！市街地での危険魔法使用および殺人未遂の現行犯で…逮捕します！」

「今日は遠慮しときます〜！IS発動シルバーカーテン！」

クアットロとディエチは消える。

「…シャア！」

百式フォルムのシャアが、フェイトの後ろから二人を追う。まるで見えているかのようにである。

『ばれてるじゃない！』

『嘘！？』

クアットロが言つとディエチが驚く。

「邪気を出しすぎだ、そこ！」

ビームライフルを撃つと、クアットロはギリギリのところまで避けた。シャアがドゥーエの姉妹ということ、気遣ったということのもあるのだが

自分以外の人物の攻撃に手加減は期待しない。

「はやてっ！」

『位置確認、詠唱完了、発動まで…後4秒』

作戦通り、シャアは後退する。

上空には、はやて。

「遠い地にて、闇に沈め…デアボリック・エミッション！」

黒い球体は小さくなる。

瞬間、津波のように辺りを覆いつくす巨大な球体となった。

デアボリック・エミッションの中から多少のダメージを追いながらも出てきた二人を待っていたのは

『投降の意思なし…逃走の危険ありと確認』

デイエチとクアットロを囲む3人、レイジングハートを構えたなのは、魔法陣を出して片手を構えているフェイト、百式フォルムのま、青く巨大なバズーカを装着したシャア。

「トライデント…スマッシュャー！」

フェイトの手から、三又で金色の砲撃魔法。

「エクセリオン…バスター！」

形が槍のようになったレイジングハートから桜色の砲撃。

「メガ・バズーカ・ランチャー、発射！」

青いバズーカの先端から、大火力魔砲が発射された。

3つの砲撃がぶつかり合い、爆発を起こした。

『やった！』

『ピンゴー！』

シヤリオとアルトの、嬉しそうな声が響く。

「じゃない！よけられた！」

『えっ！？』

「直前で救援が入った」

「アルト、追ってくれ！」

『はい！』

シヤアたちの言葉で、オペレーターたちがもう一度調べなおす。

『反応、ロスト』

『異常反応、消失』

「うっ、逃がしたか」

はやてが、唸った。

聖王医療院

なのはは廊下を歩いている。

『検査の方は一通り終了、大きな問題もなさそうだから、またそっ

ちに戻るね』

『うん、了解』

なのはの念話に、フェイトの返事がくる。

『フォワードの子達は？』

『元気だよ、エリオとキャロの怪我也軽かったし、今は部屋じゃないかな？』

『そっか、私も戻って報告書書かなきゃ、今回は枚数多そう』

『大丈夫、資料とデータはそろえてあるから』

『にははは、ありがとう』

病室に入って来たのはなのは。

エリオとキャロが見つけた金髪の女の子は、点滴が付けられ今はベッドで寝ている。

「ん、んっ…ママあ…」

女の子の横に売店で買って来たウサギのぬいぐるみを置く。

「……大丈夫だよ、ここに居るよ…怖くない」

「ままあ…」

なのはは、女の子の頭を撫でた。

シャアの部屋

空宙モニターには、ドゥーエが映っている。

『大丈夫だった？』

「疲れただけだ」

『マスターの魔力消費が激しかったようです』

『なるほどね…まあ、明日になれば回復するでしょ』

ドゥーエは楽しそうに言った。

「それにしても、今回の案…君が乗ってくれるとはな」

『楽しそうじゃない、それに…』

ドゥーエが、クツクツと笑った。

「まあ、良い…また連絡しよう」

『はい、じゃあまた』

そう言って、通信は切れた。

命の理由

一台の車が、聖王医療院に向かって走っている。

「すみませんシグナムさん、車出してもらっちゃって」

車に乗っているのは運転席にシグナム、助手席になのは、後ろにシヤアである。

この三人はこれから目を覚ました。といわれている女の子の元に向かうところだ。

「なあに、車はテストロットサのものだし、むこうにはシスターシヤツハがいらっしやる、私が仲介した方がいいだろう」

「はい」

「でも、検査が済んだとして、なにかしらの白黒がついて…あの子はどうなるのだろうな」

シヤアの言葉に、なのはが少し難しい顔をする。

「あゝ、当面は、六課か教会であずかるしかないでしょうね・・・受け入れ先を探すにしても、長期の安全が取れてからでない」と

通信が入る。

空宙モニターが現れ、シスターシヤツハが映る。

『騎士シグナム、聖王教会シヤツハ・ヌエラです』

「どうされました？」

『すみません、こちらの不手際がありまして、検査の合間あの子が姿を消してしまいました』

聖王医療院

車を止めてすぐなのは、シグナム、シャアは車を降りる。
玄関からシャツハが飛び出してくる

「申し訳ありません！」

「状況はどうなってますか？」

「はい、特別病棟とその周辺の封鎖と非難は済んでいます、今のところ、飛行や転移、侵入者の反応は見つかっていません」

「外には出られないはずですよね？」

「ええ」

「では、手分けして探しましょう、シグナム副隊長、シャアさん」

なのは、は二人の方を向く。

「はい」

「了解した」

少女を探すということがはじまった。

廊下にはシグナムとシャツハが歩いている。

「検査では、一樣危険反応は無かったのですよね？」

「ええ、魔力量はそれなりに高い数値でしたが、それも、普通の子供の範疇でした」

「しかし、それでも」

「悲しい事ですが、人造生命体なのは間違いないです…どんな潜在的な危険を持っているかわ」

シャツハは不安げに呟いた。

なのは外を歩いている。

ガサ、と草を掻き分ける音がして金髪の女の子が姿を現す。手にはなのはがあげた人形を持っている

「ああ、こんなところに居たの…心配したんだよ」

なのはの後ろに、シャアが現れた。

それを上の階の窓からシャツハが見ていた。

「あれは！くっ、逆巻け、ヴィンデルシャフト！」

瞬間、下の庭に居るなのは前にトンファー型デバイスを持ったシヤツハが現れる。

シヤツハは女の子を睨みつける。

女の子は人形を落として、怯えながら尻餅について泣き目になる。

なのはがシヤツハの前に出た。

「なっ！」

『シスターシヤツハ、ここはなのはに任せてみてはくれないか』

シヤアの念話で、シヤツハが大人しくなる。

なのはは女の子に近づき人形を拾う。

「ごめんね？びっくりしたよね、大丈夫？」

人形に女の子を渡す。

「立てる？」

女の子はスッ、と立ち上がり人形を受け取る。

『緊急の危険はなさそうです、ありがとうございます、シスターシヤツハ』

『ふう、はい』

安心したシヤツハが、武装を解く。

「始めまして、高町なのはって言います、お名前…言える？」

「ヴィヴィオ…」

女の子は、ヴィヴィオと名乗った。
シグナムが駆けつけてくる。

「ヴィヴィオ、いいね、可愛い名前だ…ヴィヴィオ、どこか行き
かった？」

「ママ、いないの？」

「ああ、それは大変、じゃあ一緒に探そうか」

「……うん」

なのはとヴィヴィオは手を繋いだ。

六課、部隊長室

フェイトとはやてが何かを話していた。

「聖王教会に？」

「うん、そこでまとめて話すから」

「うん、なのは、戻ってるかな？」

宇宙モニターを開くとそこには、大泣きした子供がなのはにしがみ
付いている。

フォワード陣となのは、シャアが部屋に集まっている。

「いっっちゃだ〜!」

「ほら、なかないで」

フォワード陣もあたふたとしている。

『あの・・・何の騒ぎ?』

「ああ、フェイト隊長、実は」

「やだ〜、いっっちゃだ〜!」

ヴィヴィオはさらに声を大きくあげる。

ドアが開きフェイトとはやてが入ってくる。

「八神部隊長・・・」

「フェイトさん・・・」

ティアナとエリオが驚く。

「管理局のエース・オブ・エースにも、勝てへん相手がおるもんや
ね〜」

『フェイトちゃんはやてちゃん、えっと・・・助けて〜』

フェイトはヴィヴィオのそばまでよりウサギの人形を拾う。

「こんにちは」

「ふえ？」

「この子は、貴方のお友達？」

ウサギの人形を巧みに動かしながら言う。

「ヴィヴィオ、この人はフェイトさん、なのはさんの大事なお友達」

「ヴィヴィオ、どうしたの？」

フェイトは人形でヴィヴィオの注意をそらす。

『とりあえず、病院から連れて帰ってきたんだけど、なんか、離れてくれないの』

『フフ・・・なつかれちゃったのかな？』

『それで、フォワード陣に相手してもらおうと思ったんだけど』

『すみません』

フォワード陣の謝罪。

フェイトは苦笑いをする。

『いいよ、まかせて』「ねえ、ヴィヴィオは、なのはさんと一緒に居たいの？」

「……うん」

「でも、なのはさん、忙しいのにヴィヴィオがわがママを言うから困っちゃってるよ？この子も、ほら」

人形を困ったようなポーズにさせて言う、ヴィヴィオは泣きそうな顔になる。

「ヴィヴィオは、なのはさんを困らせたいわけじゃないんだよね？」

遠くで見ているフォワード一同＋シヤアは

『なんかフェイトさん、達人的なオーラが』

『フェイトさん、まだ小さい、甥っ子さんと姪っ子さんがいますし』

『使い魔さんも育ててますし』

『あゝ、それにあんたらのちっちゃい時も知ってるわけだしね』

エリオとキャラは真っ赤な顔をする。

「（シンタとクムがアノ程度の歳だったか…私はとことん子守には向いていないらしいな）」

シヤアが、ヴィヴィオを見ながらそう思う。

そして、フェイトとヴィヴィオは

「だからいい子で待ってよう…ね？」

ヴィヴィオに人形を渡す。

「ありがとね、ヴィヴィオ、ちょっとお出かけしてくるだけだから」

「うっ……うっ……うん」

ヴィヴィオが、頷く。

ヘリ内部

なのは、フェイト、はやて、シャアを乗せたヘリが飛び立った。

「ごめんね、お騒がせして」

「いやあ、ええもん見せてもらったよ」

その言葉で4人は笑いあう。

「しかし、あの子はどうしようか？なんなら、教会に預けとくんで
もええけど」

「平気、帰ったら、私がつ少し話して何とかするよ」

はやて「そうか」

なのは「今は、回りに頼れる人が居なくって、不安なだけだと思う
から」

少し寂しそうな表情で、なのはは言った。

聖王教会

ノックの音が部屋に響く。

「どうぞ」

そう言ってカリムが招き入れたのは、なのは、フェイト、はやて、
シャア。

「失礼します」

なのは、フェイトが姿勢を正す。

「高町なのはは一等空尉であります」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウン執務間です」

「シャア・アズナブル…民間協力者です」

「ようこそ、始めまして、聖王教会、教会騎士団騎士、カリム・グ
ラシアと申します…どうぞ、こちらへ」

案内された机に座っていたのは、クロノ・ハラオウン、はやてが座
りなのはとフェイトとシャアが

「失礼します」

なのはが座る。

「クロノ提督、少し、お久しぶりです」

「ああ、フェイト執務間」

「お二人とも、そう硬くならないで」

カリムがクス、と笑いなのはとフェイトに言う。

「私達は個人的にも友人だから、いつも通りで平気ですよ」

「と、騎士カリムが仰っているのだから…普段と同じで」

「平気や」

場の緊張がほぐれる。

「じゃあ、クロノ君、お久しぶり」

「お兄ちゃん、元気だった？」

「んっ…それはもうよせ、お互いもういい年だぞ」

「兄弟関係に年齢は関係無いよ…クロノ」

全員が笑いあう。

そして、カリムとクロノがシャアを見る。

「君が、シャア・アズナブルか…シグナムから話しは聞いたよ」

「はい、私のような身分でこのような場に来るのは気が引けたのですが」

そこに、はやては

「何言ってるんですか、隊長レベルの強さと統率能力つきで」

「そつだよ」

はやてとフェイトの言葉に、シヤアは苦笑いを見せた。

「シヤアさんも、普通に喋ってくれて結構ですよ」

カリムの言葉で、シヤアは通常の言葉使いにする。

「では、そつさせてもらおう」

「民間協力者でも、聞く必要がある人間と…はやてが認識したなら聞いて言ってくれ」

「ああ」

そして、はやてが制する。

「さて…昨日の動きのまとめと、改めて、機動六課設立の裏表について、それから…今後の話や」

部屋のカーテンが閉まる。

「六課設立の表向き理由はロストロギア、レリックの対策と、独

立性の高い、少数部隊の実験例、知つての通り、六課の後見人は僕と騎士カリム、それから僕とフェイトの母親で上官、リンディ・ハラウンだ…それにくわえて、非公式ではあるが、かの三提督も設立を認め、強力の約束もしてくれている」

「その理由は、私の能力と関係がありません、私の能力、プロフィール・シュリフテン、これは、最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した、預言書の作成を行う事ができます…二つの月の魔力が上手く釣り合わないと言動できませんから、ページの作成は、年に一度しかできません」

二枚の紙がフェイトとなのはと鈴蘭の前に浮かぶ。

「予言の中身も、古代ベルカ語で、解釈によつて内容が変わる事もある難解な文章、世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば、的中率や実用性は割りとよく当たる占い、程度、つまりは、あんまり便利な能力ではないんですが」

「聖王教会はもちろん、次元航行部隊のトップも、この予言には目を通す、信用するかどうかは別にして、予想情報の一つとしてな」

「ちなみに、地上部隊はこの予言がお嫌いや、実質のトップが、この手のレアスキルとかお嫌いやからな」

「レジアス・ゲイス、中将だね」

中々有名な男だ。

シヤアもニュースで見た。

「そんな騎士カリムの予言能力に、数年前から少しずつ、ある事件

が書き出されている」

「『古い結晶と無限の欲望が集い交わる地、死せる王の元、聖知よりの翼が甦る、死者たちが踊り、赤い彗星は肅清を初め、なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに、数多の海を渡る法の船も砕け落ちる』」

「っ！それって」

「まさか！」

「ロストロギアをきっかけに始まる、管理局地上本部の壊滅と、そして、管理局システムの崩壊」

シヤアはそんなところはどつでも良かった。

「赤い彗星は肅清を初め？」

なのはが、そこに突っ込む。

「現在、解析中です」

カリムの答えに、全員が頷く。

「（赤い彗星、私が肅清を始める…予言にすら乗っているとは、私がこの世界に来るのは、必然だったのか？）」

シヤアはそんなことを考えていた。

シャアの部屋

すっかり日が落ちた夜、シャアは帰ってきた。

『ドゥーエに繋がりますか？』

「ああ、頼む」

少し時間が立つて、ドゥーエが出た。

「聖王教会騎士団のカリム・グラシアの予言を知っているか？」

『内容までは知らないけど、話は聞いた事あるわよ』

「私のことが乗っていた」

『なるほどね…まあ、計画通り進めるんでしょ？』

「ああ」

ドゥーエが笑う。

『じゃあ、またね…私にも仕事があるから』

通信が切れた。

「…管理局を裏切る事になるが、しかたあるまい」

シヤアは、髪を掻き揚げた。

M o t h e r s & c h i l d r e n

六課寮・なのは&フェイトの部屋

なのはが朝起きると下腹部に違和感がある。

布団を上げるとそこにはヴィヴィオ。

なのはは微笑んで、ヴィヴィオを起こさないよう気をつけながら、布団から出た。

なのはが着替えていると、ヴィヴィオがベットでうなされていた。

「ん？ああ」

なのははヴィヴィオを持ち上げてフェイトのすぐ隣りに寝かせる。

ヴィヴィオがフェイトを手探りで見つけると、安心したのか落ち着く。

そしてフェイトも自然とヴィヴィオを抱きしめていた。

親子のような二人の光景を見て、なのはが笑った。

朝の訓練が終わり。

なのはが階段を上がると向こうには、ヴィヴィオと手を繋いでいるフェイト。

「ヴィヴィオ〜！」

ヴィヴィオは一目散になのはに向かっていく。

「おはようヴィヴィオ、ちゃんと起きられた？」

「うん」

「おはよう、フェイトちゃん」

「うん、おはようなのは…ヴィヴィオ、なのはさんに、おはようつて」

「…おはよう」

そう言われたなのはは微笑んで

「おはよう」

と返した。

「朝ご飯、一緒に食べられるでしょう？」

「うん」

「朝ご飯？」

「そう、行く」

なのははヴィヴィオと手を繋いで歩き出し、フェイトもその横を歩いた。

「今日のメニューはなんだろうね」

3人はさながら親子のようだった。

六課・スターズ

スバルが事務仕事をしているとなのはが近くに寄ってくる。

「あれ？ティアナは？」

「部隊長と同行だそうです、本局行きだとか、なのはさんも今日はオフィスですか？」

「そうだよ、ライトニングは今日も現場調査だし、シャアさんは何の用か本局に行ってるし、副隊長たちはオフシフト、前線メンバーは私とスバルの2人だけだね」

なのはは笑顔で言うが。

「あはは、何も起きないことを祈ります」

苦笑いで応えるスバルだった。

時空管理局本局

シヤアは、途中まではやてとティアナとここに着た。だが、別れて彼女との待ち合わせの場所へとやってきた。

「…必然か、運命か」

シヤアは、聖王教会での出来事を思い出す。

聖王教会

「情報源が不確定という事もあります、管理局崩壊という事自体が現状ではありえない話ですから」

「そもそも、地上本部がテロやクーデターに合ったとして、それがきっかけで、本局まで崩壊…ても、考えづらいしな」

「まあ、本局でも警戒強化はしているんだがなあ」

はやてとクロノが、溜息をつく。

「問題は、地上本部なんです」

「ゲイズ中將は予言そのものを信用してられない、特別な対策はとらないそうだ」

「異なる組織同士が協力し合うのは、難しいことです」

「協力の申請も、内政干渉や強制介入という言葉に入れ替えられれば、即座にいさかいの種になる」

「ただでさえ、ミット地上本部の武力や発言力の強さは問題視され

てるしなあ」

「だから、表立っての主力投入はできない、というわけか」

シヤアが言つと、クロノが申し訳なさそうな顔をする。

「すまないなあ、政治的な話しは、現場には関係なしとしたいんだが」

「裏技気味でも、地上で自由に動ける部隊が必要やった、レリック事件だけでことが済めばよし、大きな自体に繋がっていくようなら、最前線で舞台の推移を見守って」

「地上本部が本腰を入れ始めるか、本局と教会の主力投入まで、前線で頑張ると」

「それが、六課の意義や」

なのは、フェイト、シヤアは頷く。

「もちろん、皆さんに任務外のご迷惑はおかけしません」

「あつ、それは大丈夫です」

「部隊員達の配慮は八神二佐から確約を頂いてますし」

「…改めて、聖王教会、教会騎士団騎士、カリム・グラシアがお願いいたします…華々しくもなく、危険も伴う任務ですが…協力を、していただけますか？」

「…非才の身ですが」

「全力にて」

「うけたまわります」

シヤア、なのは、フェイトの順で言葉を紡いだ。

本局

シヤアが思い出していると、廊下の向こうから一人の女性が歩いてくる。

「お待たせ、シヤア」

金髪を揺らして歩いてきた。

「いや、気にはしていない…ドゥーエ」

そう言うと、^{ドゥーエ}彼女は不敵に笑った。

六課・スターズ

「よし、ふっ、終わった」

モニターを消して背をのばすスバル。

「なのはさん…あの、なのはさん？」

なのはのデスクまで向かって声をかけるが一向に気づかない。

「えっ?ごめん、何?」

「いえ、あの、データのセット終わってますよって」

「あつ、本当だ」

空宙モニターを操作しだすなのは。

「あゝ、ダメだね、ボーツとしちゃって」

「いえ」

その時、昼を知らせる鐘が鳴る。

「あつ、丁度お昼だ」

立ち上がりスバルを見る。

「寮に戻ってヴィヴィオと食べるんだけど、スバルもどっ?」

「はいっ!一緒にします」

嬉しそうに、スバルは返事をした。

なのはとスバルは六課の隊舎に向けて歩いている。

「でも、ヴィヴィオってこの先どうなるんでしょうか？」

「ちゃんと受け入れてくれる家庭があれば、それが一番なんだけど」

「難しいですよね、やっぱり、普通と違うから」

スバルは俯いてしまう。

「そうだね」

静かに風が吹く。

「見つかるまで、時間が掛かると思うんだ、だから、当面は私が面倒見ていけばいいのかなって」

スバルが嬉しそうに顔を上げる。

「エリオやキャロにとってのフェイト隊長みたいな、保護責任者って形にしておこうと思って」

「いいですね！ヴィヴィオ喜びますよ！」

「うっん、喜ぶかなあ？」

「きつとー！」

自分のことのように喜ぶスバルであった。

隊舎に着いてヴィヴィオに事情を話す。

「ふえ?」

「ほら、やっぱりわかってない」

「えっと、なんて言えばわかるのかな、うんと、つまり、しばらくなのはさんがヴィヴィオのママだよって事」

「ママ?」

なのはを見上げてヴィヴィオが言う。

「えっと、いや、その」

「いいよ、ママでも」

なのはは膝を着いてヴィヴィオを見る。

「ヴィヴィオの本当のママが見つかるまで、なのはさんがヴィヴィオのママの代わり、それでもいい?」

「ママ」

「はい、ヴィヴィオ」

「ふえっ、うええええええん」

ヴィヴィオはなのはに抱きつき泣く。

「何で泣くの、大丈夫だよ、ヴィヴィオ」

なのはは、子供をあやす母親のようにヴィヴィオを抱き続けた。

シヤアは、ドゥーエと食事をしていた。

中々の高級レストランのようで、シヤアはスーツ、ドゥーエはドレスである。

「そろそろ帰りましょうか」

「これを」

シヤアが取り出し、渡したのは結婚指輪を入れるようなケース。

「…嬉しいじゃない」

それを受け取って、少しだけ開くドゥーエ。
中には一枚のチップ。

「本当に嬉しいわ」

ドゥーエがそう言って、それを持つ。

二人は、意味ありげに微笑んだ。

機動六課寮・なのは&フェイトの部屋

フェイト、なのは、ヴィヴィオの3人がくつろいでいる。

「そっか、なのはがママになってくれたんだ」

「うん」

「でもフェイトさんもちよっとだけ、ヴィヴィオのママになったんだよ」

ヴィヴィオは不思議そうな顔をする、フェイトは鈴蘭の横に座る。

「後見人っていうのになったからね、なのはとヴィヴィオを見守る役目があるの」

「……なのはママとフェイトママ？」

「うん」

「そう」

二人がヴィヴィオの両手を取る。

「ママ？」

「はい」

二人の、母親^{ママ}は、同時に返事をした。
ヴィヴィオは満面の笑みを浮かべて、二人に抱きついた。

高級レストラン外

シャアとドゥーエが立っていた。

「今日はありがとう」

「ついでに受け取りなさい」

ドゥーエがシャアにキスをする。
しかもディープリキスだ。

「ん…」

二人が口を離した。

「君は面白い事をするな」

シャアは、口の中に入ってきたカプセルを、すばやく手に移す。
ドゥーエが楽しそうに笑った。

「ふふっ…じゃあね」

「ああ」

シャアとドゥーエは、別々の方向へと歩いていった。

六課・食堂

スバル、エリオ、キャラの三人で食事中だ、ちなみにティアナははやてと本局帰りに食べてくるらしい。

「それにしても、なのはさんとフェイトさんがママって」

「ヴィヴィオ、物凄く無敵な感じ」

「ははは、でも、それなら二人だって、フェイトさんの被保護者で、なのはさんの教え子じゃない」

「えっと、それはそうなんですけど」

「えへへ」

「そういえば二人からしてフェイトさんってお母さん？お姉さん？どっち」

二人は少し迷った。

「私は…優しいお姉さん、ですね」

「えっと…僕はどっちだろう…難しいなあ」

「フェイトさんはエリオ君が子供なのと弟なの、どっちが嬉しいのかな？明日聞いてみようか？」

エリオは一瞬食べ物に詰まらせる。

「ごめんキャラ！それはやめて！」

「あはは、はははははははは！」

楽しそうに、3人が笑った。

偽りの平和

機動六課寮・なのは&フェイトの部屋

早朝、ヴィヴィオは顔を洗って洗面所から出る。

そこには寮母アイナ・トライトン。

「アイナさん、できた」

「はい、よくできました」

「うん！」

アイナがヴィヴィオを着替えさせる。

その間、ザフィーラは後ろを向いている。

その辺りザフィーラはタダの犬ではなく紳士であった。

「ちょっと待ってね、ママのお迎え、ちゃんとか愛くしていかないかね？」

「うん！」

ヴィヴィオが、嬉しそうに頷いた。

訓練所

フォアードチームと今日出向してきたギンガVS隊長と副隊長それにシャアが模擬戦を行った。

結果はもちろん隊長チームの勝利。

それを見ていたマリエル・アテンザとシャリオは

「うん、みんな、いい感じの子達ね」

「エリオたちですか？それともデバイスの方？」

「両方」

二人は微笑む。

「ん？」

「あっ」

歩いてきたのはヴィヴィオ。

「おはようございます」

「あ、ああ…おはようございます」

「おはよう、ヴィヴィオ」

「うん…失礼します」

そう言ってヴィヴィオはマリエルに一礼して歩いていく。

「ああ、どうも、」丁寧に

マリエルもそれに応え一礼する。

「ころんじゃダメだよ」

ザフィーラがそこに現れる。

「あつ…ザフィーラも久しぶり」

マリエルはザフィーラに抱きつく。

「シャーリー、あの子は？」

「ああ、ヴィヴィオは」

ヴィヴィオがなのはとフェイトに走っていく。

「ママ〜！」

なのは、フェイト、シャア、ヴィータ、シゲナム、フォアードメン
バーが振り返る

「ヴィヴィオ〜！」

「危ないよ、転ばないでね」

「うん…ふわっ！」

こけた。

シャアは苦笑してしまう。

しかし、フェイトとなのはは心底驚く。

「大変！」

「大丈夫！」

フェイトがヴィヴィオを助けに行こうとするが、なのはが止める。

「地面やわらかいし綺麗に転んだ、怪我はしてないよ」

「それは、そうだけど」

「…ヴィヴィオ、大丈夫？」

顔を上げたヴィヴィオは今にも泣きそうだ。

「怪我してないよね？頑張って、自分で立ってみようか」

「…ままあ」

「うん、なのはママ、ここにいるから・・・おいで？」

「あ…あう…あああ」

とつとつヴィヴィオの瞳から涙がこぼれ始めた。

「おいで？」

「なのは、ダメだよ、ヴィヴィオ、まだちっちゃいんだから」

そう言ってフェイトが走る。

「気をつけてね？」

「フェイトママ」

「ヴィヴィオが怪我なんかしたら、なのはママも、フェイトママだ
つてきつと泣いちゃうよ？」

「ごめんなさい」

「まあ、フェイトママちよつと甘いよ」

「なのはママが厳しすぎです」

「ヴィヴィオ、今度は頑張ろうね」

「うん」

ヴィヴィオは自信なさげに頷く。

そして、それを見ていたシャリオとマリエルは

「あんな感じです」

「ああ、二人の子供かあ……う、えええっ!？」

マリエルが驚きの声とメガネを上げた。

フェイトがヴィヴィオを降ろす。

するとなのはがヴィヴィオに手を差し出す

「ほら、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオは笑いながらなのはの手を握る。

食堂

なのはとフェイトとヴィヴィオ、それにフォード陣と八神一家が食堂に集っている。

「ヴィヴィオ、髪の毛可愛いねえ」

キヤロはおそらくヴィヴィオの横にリボンで結んだ髪の毛を言っているのだろう。

「なのはママのリボン」

「アイナさんがしてくれたんだよね？」

「うん！」

「いい感じだよ、ヴィヴィオ」

「えへへ」

少し照れ気味に、ヴィヴィオが笑う。

そして、食事を始めた。

「あ〜ん、んふふ」

ヴィヴィオは嬉しそうにオムライスを食べる。

「良く嚙んでね？」

「うん」

ティアナとスバルとギンガのテーブルで、ティアナが微笑ましい光景を見て微笑む。

「しっかしまあ、子供って泣いたり笑ったりの切り替えが早いよねえ」

「スバルのちっちゃい頃も、あんなだったわよねえ」

「うえっ、そ、そうかなあ？」

スバルが恥ずかしそうに頬を赤らめる。

そして八神家のテーブルでも。

「リインちゃんも」

「ふえっ、リインは初めから割と大人でしたあっ！」

「嘘をつけ」

「体はともかく、中身は赤ん坊だったじゃねえか」

「むうっ、はやてちゃん、違いますよねえっ！」

「さあ？どうやったかなあ」

みんなが会話している中で、なのはがヴィヴィオの皿の中に残っている緑色のものを見つけた。

「ヴィヴィオ、ダメだよお、ピーマン残しちゃ」

「うっ、苦いの嫌い！」

「おいしいよ？」

「しっかり食べないと大きくなれないんだから」

ヴィヴィオが唸りを上げる。

すぐ後ろのはやてが声をかける。

「ああ〜そやな、好き嫌い多いと、ママたちみたいに美人になれへんよ？」

その言葉にヴィヴィオは嫌々ピーマンを食す。

ちなみに、ヴィヴィオがいる場所は先ほどからずっとシャアの膝上である。

「ところで、なんでシャアさんはそんな？」

はやての言葉に、シャアはコーヒーを飲んで答える。

「ヴィヴィオの所望だ…私が故意にやったわけではない」

シャアがそう言うと、はやての後ろのシグナムやヴィータが苦笑い

する。

はやては面白そうに笑う。

「そんな事言つて、まだ未完成な口りを膝上に乗せたいだけとか？」

「私はそんなに小さい男か？」

冷静にそう返す。

「シヤアさんの情け無いところつてみて見たいもんやなあ」

はやてがつまらなさ双に呟く。

シヤアが久しぶりに思い出したのはアム口の『情け無い奴！』とのセリフ。

最近はめっきりラリアを忘れていた。

「…そう簡単に忘れられるものでもないか」

「ん、なんて？」

「いや、なんでも無い」

シヤアは笑つて、コーヒーを飲む。

「シヤアさんはお父さんなの？」

コーヒーを飲む手が止まつて、眉を顰める。
なのはとフェイトは顔が真っ赤である。

「なぜそうなつた？」

「なんか、そんな感じがする！」

「（子供なりの感覚なのか…それともニュータイプ、その可能性はないか）」

シヤアがいろんな考えを頭にめぐらせるが、一度落ち着く。

「パパじゃ、ダメ？」

なのはとフェイトの顔を見る。

二人は赤い顔で、笑う。

「父親というのも良いかもしれん…胸がときめく」

そう言って、シヤアが笑った。

そして、はやてはつまらなさそうな顔をする。

無限書庫

シヤアがここにやってきた理由は一つだった。

「ユーノ・スクライア」

「ああ、シヤアさん」

ホテル・アグスタの任務時、フェイトとなのはが話しをした後、一度離した事がある。

その時、覚えておいた。

「例の件は？」

「かなり、奥のほうにしまわれていたよ」

それは、一冊の本。

「それで、どうだった？」

「やっぱりシヤア、君が正解だと思う……」

ユーノがメガネを上げると、光がメガネに反射した。

「…ボクも協力させてくれ」

少し、驚く。

「良いのか…告発されることも予想に入れていたのだが…」

首を横に振って、ユーノは笑う。

「この件の情報はボクに任せてくれ…きっと君の役に立ってみせるよ」

「ああ、感謝する」

二人は笑って、話しを始めた。

六課・訓練所

ティアナ・エリオ・キャロVSヴィータの模擬戦をしている。
始まって数十分。

エリオ・キャロがやられてしまって、絶望的な状況であるが、諦め
はしない。

「……どこから、どこからくるの？」

ティアナがビルの内部で、壁を背につける。

後ろから、ブーストが吹かされたような音が聞こえた。

「ッ!？」

急いで、前方に転がると、先ほど背をつけていた壁が粉碎され、ヴ
ィータが現れた。

「中々やったけど…お前だけじゃダメだ」

グラーファイゼンを突きつけたまま、ティアナを睨む。

「なにか…なにか…」

必死で頭を働かせるが、思いつかない。

「はあああつ！」

「なんとお！」

前方から突進してくるヴィータを、ティアナは横に避ける。

「そこっ！」

魔力弾を放つと、ヴィータはシールドで防ぐ。

そこに次いでヴァリアブルシュートを撃つ。

シールドが砕けそうになったその時。

「甘いなティアナ！」

なにかを隠している。

ヴィータのその反応に気付いたティアナは後ろへと下がる。すると、そこに巨大な鉄球が落ちてくる。

「なっ！」

「へへっ、特大のコメートフリーゲンだったんだが…避けられたか」

ヴィータの表情に気付かなければ、やられていた。

「わりいな！」

ヴィータが突っ込んでくる。

グラーファイゼンの先端が、ティアナを横から襲つ寸前。

「クロスミラージュ！」

シールドでそれを防ぐ。

少しの間でも防げれば上々だ。

「そこっ！」

ティアナが魔力弾を撃とうとする時、ヴィータは急ぎで横に避ける。だが、ティアナはまだ魔力弾を撃っていないかった。照準はヴィータが避けた場所に向けてあった。しかし、今狙うのはヴィータの少し前方。

「シュート！」

その弾道は、ヴィータの進む先。当たれば勝ちその時。何かを感じ取った。

「（敵？後ろから！）」

ティアナは背後に魔力弾を撃つ。後ろでなにかが弾ける音がして、ヴィータに魔力弾が直撃した。

「…アタシが負けた？（てか、ティアナ…反応速度がギガ上がってやがる）」

ヴィータは心底驚いているようで、ティアナは後ろを振り向く。そこには、鉄球が落ちていた。

「私…今、なんで？」

ヴィータもティアナも、不可思議なものを見たような顔をした。

部隊長室

なのは、フェイト、はやての3人が座っている。

「今日、教会の方から最新の予言解釈が来た…やっぱり、公開意見陳述会が狙われる可能性が高いそうや、もちろん、警備はいつもよりうんと頑丈になる、機動六課も、各員でそれぞれ警備に当たってもらう、ほんまは、前線丸ごとで警備させてもらえたらええんやけど、建物の中に入れるのは、私達3人だけになりそうや」

「まあ、3人そろってれば大抵のことはなんとかなるよ」

「前線メンバーも大丈夫、しっかり鍛えてきてるし、副隊長たちも、今までに無いくらい万全だし」

「みんなのデバイスリミッターも、明日からはサードまで上げていくしね」

「うん…ここを抑えれば、この事件は一気に好転していくと思う」

「うん…きつと、大丈夫」

そう言って、3人は頷いた。

シャアの部屋

空宙モニターのドゥーエと、シャアが話している。

『へえ、あのスクライアが協力してくれるの』

「ああ」

『これで、計画が格段に良い方向に繋がるわね』

ドゥーエが笑う。

「ああ…また連絡する」

『あら、いつもより早いじゃない』

「娘の相手をしなくてはならないのでな」

そう言って、シャアは通信を切った。

クエスは父親を求めていた。

そんなことを思い出して、シャアは部屋を出た。

その日、機動六課

9月11日 機動六課隊舎 PM19:14

六課前線メンバーが集っている。

「というわけで、明日はいよいよ公開意見陳述会や、明日14時からの開会に備えて、現場の警備はもう始まっている、なのは隊長とヴィータ副隊長、ライン曹長とフォワード4名はこれから出発、ナイトシフトで警備開始」

「みんな、ちゃんと仮眠取った？」

「はい！」

フォワード陣は揃って返事をする。

「わたしとフェイト隊長、シグナム副隊長は明日の早朝に中央入ります」

「シャアさんは、5時間後に本局からお呼び出しが出てるので…それまでの間、よろしくな」

「はい！」

はやての言葉に、フォワード陣は元気に返事をした。

へりपोर्ट

なのはがへりに乗ろうとするのを、ヴィヴィオが見ていた。

「あれ？ヴィヴィオ、どうしたの？ここは危ないよ」

「ごめんなさいね、なのは隊長、どうしてもママのお見送りするんだって」

なのはが、ヴィヴィオの前にかがむ。

「も〜、ダメだよヴィヴィオ、アイナさんにわがママ言っちゃ」

「ごめんなさい」

「なのは、夜勤でお出かけは初めてだから、不安なんだよ、きっと」

「あっ、そっか」

なのははヴィヴィオを見ながら話す。

「なのはママ、今日はお外でお泊まりだけど、明日の夜にはちゃんと帰ってくるから」

「絶対？」

「絶対に絶対」

小指をヴィヴィオに向ける。

「いい子でまってるなら、ヴィヴィオの好きなキャラメルミルク作っ

てあげるから」

「……………うん」

小指をなのはの指に絡める。

「ママとの約束ね？」

「うん」

そうしてへりは無事飛び立った。
それを見送って、少しの沈黙。

「さっ、帰ろ、ヴィヴィオ」

「うん…パパは？」

ヴィヴィオが、シャアを見る。

「少しやることがあったてな…途中までは一緒だ」

そう言って、シャア、フェイト、ヴィヴィオ、アイナの4人は歩いていく。

シャアの部屋。

シャアの前には、空宙モニターが二つ。

一つにはドゥーエが映り、もう一つにはユーノが映っている。

『シヤア、今回の陳述会の襲撃の件』

「…することになるのか？」

『ええ、間違いなく』

『どうするんだい、シヤア』

ユーノの言葉。

「…それはいい」

『ドクター曰く、死人は出さないらしいわ』

「生臭いことにはなりそうだな」

『…なのはやフェイトが怪我するのは』

「ああ、ただけんが…全員の被害が最小限になるように願っしかあるまい」

『隊長陣と副隊長、それに守護騎士、そしてフォワード全員捕獲がメイン…でも』

3人が少し沈黙する。

『ランスターって子だね』

ドゥーエが頷く。

『ええ…』

「凡人ゆえか…」

『しょうがないわ…』

だが、シャアはなんとなく平気な気がした。

「勝てるさ、ティアナは」

『エースの…感かい？』

ユーノの言葉に

「兵士の感だ」

シャアは微笑した。

地上本部・外部

なのは、スバル、ギンガが歩いている。

「私もソロソロ中に入るよ」

「はい！」

「でね？内部警備に、デバイスは持ち込めないそうだから」

そう言ってレイジングハートを出すのは。

「スバル、レイジングハートの事、お願いして言い？」

「はい！」

なのはからスバルへレイジングハートが手渡される。

「前線のメンバーで、フェイト隊長達の方も預かっててもらえるかな？」

「はい！」

元気良く返事をした。

時空管理局本局

ユーノとシャアとドゥーエが直接話しをしている。
場所は本局の廊下。

「こんな場所を見られて平気か？」

「大丈夫よ…見られたからどうだったの」

ドゥーエが笑いながら言う。

「そつだね…今は局員も少ないし」

ユーノのほうは苦笑い。

「で、本当に協力してくれるのか？」

「間違いないよ…アノ人なら」

そして、一室をノックする。

『ぎゅぎゅ』

扉の向こうから声が聞こえて、3人は入る。

「いらっしやい…ユーノ君…そしてシャアさんとドゥーエさん」

そこにいたのは、リンディ・ハラウン提督だった。

地上本部が襲撃されてから数時間。

なのは、フェイトは走る。

目の前にはスバル、ティアナ、キャロ、エリオの4人。
4人は戦闘機人と戦って、逃げてきたところだ。

「お待たせしました」

「お届けです」

「うん」

「ありがとう、皆」

なのはとフェイトはデバイスを受け取る。

「ギンねえ…ギンねえ！」

「スバル？」

「ギンねえと通信が繋がらないんです！」

「戦闘機人2名と交戦しました、表には、もっと居るはずですから」

「ギンねえ、まさか、あいつらと?」

「…ロングアーチ、こちらライトニング1」

フェイトは六課に待機しているロングアーチスタッフに通信をかける。

『ライトニング1、こちらロングアーチ』

たしかにグリフィスの声が聞こえる。

だが、通信にはノイズがかなり入っていた。

「グリフィス!?どうしたの、通信が！」

『こちらは今、ガジェットとアンノウンの襲撃を受けて、持ちこたえています、もう!』

そこで通信は勝手に切れてしまった。

「分散しよう、スターズはギンガの安否確認と、襲撃部隊の排除」

「ライトニングは六課に戻る」

その時、ティアナが蹲る。

「ティア！？」

スバルがティアナの傍による。

「えっ……ぎ、ギンガさん？」

不吉な予感がティアナの頭に流れた。
全員が、驚いたような顔をする。

「な、なのはさん！早くいきましよう！」

なのはが、驚きながらも頷いた。

機動六課・外部

燃え盛る六課。

大量のガジェット。

それと同じくらいのカジエットの残骸。

ザフィーラとシャマルがだいぶ活躍したようだがもつ息も荒く魔力も残りはカスだ。

「はあっ…はあっ…はあっ！」

上を見上げるとそこには中性的な顔をした戦闘機人、オットー。

「たった2人で良く守った…ボクのISレイストームの前では、抵抗は、無意味だ」

五本の砲撃が六課を襲う。

「クラールヴィント！防いで！」

大きなシールドが五つ現れ砲撃を防ぐ。

狼型のザフィーラがオットーに跳びかかるようにする。

「デイド」

ザフィーラの前に二つの剣を持った少女が現れる。

「ISツインブレイズ」

ザフィーラは斬られ地面に落ちていき、シャマルにぶつかり二人は吹き飛ばす。

シールドは敗れ砲撃は六課に当たる。

ザフィーラとシャマルは苦しいながらも起き上がるが

「さよなら」

オットーの手から砲撃が放たれた。

地上本部・廊下

ティアナは、なのはに抱えられた状態で進んでいたが、スバルはもつと先へと進んでいく。

「スバル先行しすぎ！」

モニター越しに、ティアナが怒鳴る。

しかし、スバルはかなり焦っているようで減速するそぶりを見せない。

『ごめん、でも大丈夫だから！』

なのはが、言う。

「しかたないね、こうゆう場所だとスバルの方が早いから」

しかし、ティアナもかなり焦っていることがわかる。

「大丈夫、こっちが急げば良い！」

「はい！」

そう返事をした瞬間、ティアナは異変を感じた。
以上な不快感。

「ぐうっ！」

頭を押さえるティアナに、なのはが驚く。

「どうしたの!?!」

「またっ…しゃ、シャマル先生…ザフィーラさん…ぐっ! ああっ!
ライン曹長!」

「ねえ、ティアナ!」

「っ…感情が、いろんな人が私の中に入って来る! 怖い、気持ち悪い!」

なのはは、ティアナを抱えながら止まるか止まらないかの葛藤に陥った。

「ぐうっ!…いや、ギンガさん?」

そこで、不快感は消えた。

ティアナは、ゆっくりと頭を押さえていた手を下ろした。

「大丈夫?」

「はい、すみません…急ぎましょっ!」

「うん」

なのはのスピードが上がる。

六課内部

バックメンバーとアイナ、ヴィヴィオは瓦礫の中に隠れている。ガジェットが何回か通るがヴァイスが量産型のデバイスで撃破し続ける。

「OK撃てる、腕はまだ、鈍っちゃいねえ」

次はガジェットではなく一人の少女が歩いてくる。

ルーテシアである。ヴァイスはルーテシアを一人の少女とダブらせて見る。

昔事件に巻き込まれ自分が誤射をしてしまった自分の妹。

手が震えて攻撃ができないでいるヴァイスを、ルーテシアは見つける。

「邪魔」

ヴァイスは吹き飛び壁に叩きつけられる。

バックメンバーもアイナもシャーリーもルキノも、皆が血を流して倒れている。

機動六課・外部

ルーテシアがヴィヴィオをさらって行った直後、そこに三つの人影が降り立った。

それはシヤア、ユーノ。

シヤアは百式のフォルムで単体で飛行。

ユーノはいつものラフな格好のまま飛行。

「ユーノ、六課内部で救護を頼む」

「わかったよ」

シヤアがそう言うと、ユーノは六課内部へと入っていく。
そして、シヤアの前にはオットーとディード。

「レイストーム」

オットーの手から放たれた光線が、シヤアへと向かう。

「当たらなければどうということはない！」

シヤアは上昇して攻撃を避ける。

「ツインブレイズ」

真後ろからの斬撃。

シヤアはそれを、百式フォームのままビームトマホークとビームサ
ーベルで防ぐ。

「後ろがから空きだ」

オットーが後ろから迫るが。

「バインダーを外す！」

百式のバックパックのバインダーが、勢い良く後方へと飛んで、オ
ットーを地上へと落とす。

「サーベルのパワーが負けている、ええい！」

シヤアは、ディードのわき腹を蹴る。

「くっ！」

横に少し跳んだディードは、シヤアを驚いたように見る。

「素人だな…戦闘経験は？」

シヤアが聞くと、ディードは素直に答える。

「初陣です」

「ふっ…」

「訓練はしてきましたし、戦闘用のボディですので」

ディードがシヤアへと突っ込む。

真正面からの攻撃、シヤアが対応できないはずがない。

「おちろー！」

ビームトマホークを投げる。

ドゥーエは驚いたような顔をしながら、それを二つの剣で受けとめ、落とした。

しかし、目の前には既にシヤア。

「ソレ見たことか、付け焼刃に何できるというのか！」

その時、シヤアの周りには大量のクアットロ。
シヤアは驚きもせず、精神を落ち着かせる。

「あらら、本当に…じゃあ、付け焼刃じゃないなら？」

シヤアの装備がサザビーになった。

「…本物は一つのはずだ！」

ファンネルが展開される。

「そこか！」

「うあああつ！」

クアットロの叫びと共に、幻影が消える。

「し、シルバーカーテンが…」

片手を押さえている。

ということは、片手に直撃したのであろう。

「て、撤退！」

クアットロが尻尾を巻いて逃げていく。

これ以上の仕事はなのはやフェイトだろう。
自分は地上に降りた。

「なにいつ！？」

その時、背後に巨大な人型が現れた。
その前にいたのは、キヤロ。

「つまりはキヤロの竜…ええい、化け物か！」

「私達の居場所を…壊さないでえ！」

竜騎の炎が、上空のガジェットを焼き尽くした。
シヤアは、それを啞然とみているのだった。

地上本部

はやてたちのいる部屋の大型のディスプレイに、ジェイルが映し出された。

「ミッドチルダ地上の管理局員諸君、気にいつてくれたかい？ ささやかながら、これは私からのプレゼントだ、治安維持だのロストロギア規制だのと言った名目のもとに圧迫され、正しい技術の進化を促進したにもかかわらず、罪に問われた稀代の技術者達、今日のこれはその恨みの一撃だとも思ってたまえ…しかし私もまた、人間を、命を愛するものだ…無駄な血は流さないよう努力はしたよ、可能な限り無血に人道的に…忌むべき敵を一方的に制圧することのできる技術、それは十分に証明できたと思う、今日はここまでにしておきましょう…この素晴らしき技術と力が必要ならば、いつでも私宛に依頼をくれたまへ…格別の条件でお譲りする…クククッ、はは…アハハハハハッ！」

ジェイルの声が響く。

「予言は、くつがえらなかつた」

はやてが、決心したような顔を見せる。

「まだや…機動六課は、私達は、まだ終わってない」

六課前

シヤアとユーノは全員を避難させ終えた。

「行こうか」

「ああ」

二人は、其の場より消えた。

翼、ふたたび 復活のシヤア

聖王医療院

フォワードメンバーが集う一室。
重い雰囲気の中扉が開く。

「ティア」

「はあ、差し入れ、いろいろ買ってきたわよ、どうせ全員、ろくに
ご飯も食べてないんでしょ？」

ティアナはビニール袋からパンや飲み物を出しみんなに渡す。

「ありがとうございます」

「はい」

「ありがとう、ティア」

右手で缶を持ち左手で開ける。
だが、左手からは微かな機械音。

「手、もう動かせるんだ」

「神経ケーブルがいつちゃってたから、まだ、上手く動かせないん
だけど、何日かで元通りだって」

「そう、ちびっ子達にはどこまで？」

「私とギン姉の生まれとか、その辺は」

「悪かったわね、私が止めてたの、スバルの体のこと、しばらく秘密にしときなさいって」

キヤロは落ち込んでスバルの顔を見るとエリオの袖を引く。

「あつ…僕たち、飲み物かってきますね！」

「食堂にうつてましたから！」

二人は部屋から出て行く。

ティアナが、椅子に座る。

「ティア…ごめんね？」

「何に対してのごめんよ…アタシやなのはさんの言う事聞かずに先行しすぎたこと？大怪我して皆に迷惑かけたこと？」

「いろいろ…」

ティアナはスバルのベッドに体を預ける。

「後でマツハキャリバーにも謝るときなさいよ…酷い破損状況だったんだから」

「うん」

その時、ティアナがふと気がつく。

「ねえ、ギンガさんは亡くなってないのよね？」

「あれくらいの負傷なら蘇生できる…と思う、タイプゼロを回収とか言ってたし…殺したりとかは」

「しないはずよね、じゃあ、助けに行けるチャンスがある」

スバルが驚くような顔をした。

「えっ？」

「なのはさんが言ってた、アタシたちはこれから、レリック捜査からスカリエッティ一味の追跡に任務が変更になると思うって、ギンガさんのことは、アタシだって悔しい…でも、六課が動くならチームで救出に向かえる…エリオやキャロだって、隊長たちやロングアーチだって、きっと悔しいはずよ…大事なものを奪われちゃったこと、守れなかったこと、だから…今度は絶対失敗なんてしない！」

スバルの瞳に、涙が溜まる。

「必ず守るし、奪われたものは奪い返す、助け出す…全部よ」

「……………うん！」

その言葉に、スバルは頷いた。

6日後

会議室に、集る限りの六課の前線メンバーが集う

「ああ、今丁度方針が決まったところや」

会議室にいるのはなのはフェイト、はやて、グリフィス、アルト、ティアナ、キヤロ。

「地上本部による事件への対策は、残念ながら、相変わらず後手に回っています、地上本部だけでの事件捜査の継続を、強行に主張し、本局の介入を硬く拒んでいます、よって、本局からの戦力投入は、まだ行われません、同様に、本局所属である機動六課にも、捜査情報公開されません」

「そやけどな、私達が追うのはテロ事件でも、その主犯格としてのジェイル・スカリエツティでもない…ロストロギア・レリック、その捜査線上にスカリエツティ一味がおるだけ、そういう方向や、で、その過程において誘拐された、なのは隊長とフェイト隊長の保護児童、ヴィヴィオを捜索、救出するそういう線で動いていく、全隊長、意見があれば」

「理想の状況だけど、また無茶してない？」

「大丈夫？」

「後見人の皆さんの黙認と協力は、ちゃんと固めてあるよ、大丈夫、なによりこんな時のための機動六課や、ここで動けな、部隊を動かした意味もない」

「了解」

「なら、方針に異存はありません」

「よし、ほんなら捜査出動は本日中の予定や、万全の体制で出撃命令をまっけてな」

はやてがそう言うと、なのはとティアナ以外は会議室から出て行った。

「ティアナ…スバルはまだ」

「はい、本局の方に…でも、午後にはこっちに合流できるそうです」

「そっか」

なのはがそう言って笑う。

「…ティアナ、シャアさんから連絡は？」

「はい、ありません」

シャアが行方不明になってから丁度一週間。

「六課襲撃時に…ユーノ・スクライアさんと六課のメンバーを救出して、居なくなっただと」

「ユーノ君も居なくなっただ…」

二人の顔が深刻になる。

「…キャラロが目撃した時、その時は普通だったそうです」

「なるほど、じゃあ」

「はい…生きています」

安心したように、息を吐く。

そして、ティアナの頭に、手を置く。

「大丈夫？」

「はい…少し寂しいけど…きっと大丈夫です」

「それは…例の感？」

例とは、ティアナが最近感じるものかを言っているのだろう。

「はい…」

ティアナは、苦笑いのまま笑った。

数時間後

ミッドチルダ全土で使われている空宙モニターに、異変が起こった。ノイズが入って、全てに同じ映像が流れる。

赤い軍服を着た男。

シャア・アズナブルである。

「突然の無礼だが許して頂きたい！私は次元漂流者のシャア・アズナブルというものだ！次元漂流者が何を、と思われるのもわかる、だが聞いて欲しい。私は自らの世界で軍人をやっていた！」

世界中の人間は、自然とその映像を見てしまう。

それはシャアのカリスマゆえか

「時空管理局、この組織についての不満を申し上げたいのがこの演説の理由だ、一つはこの時空管理局の就職年齢、たしかに軍人をやっているとき、子供を使うことがあった、しかし！強ければなんでも良いのか！幼い頃から戦いを教え込み、敵味方を差別させる、これが認められるのか！軍でもそういうことがある、そして今までの状況でやってきた、だからと言って、幼い子供を前線に出して、いい年をした大人がその背中に隠れている、そんなものが認められるのか！この遺憾ともしがたい現状に、なぜ誰も立ち上がらないか！それは、時空管理局という組織が大きすぎるからである！」

その映像に、誰もが魅入っていた。

「圧迫をかけ、そんな文句も全て叩き潰す…そんなこと誰が許す！腐っているのは次元犯罪者だけなのか！否！本当に腐敗しているのは時空管理局の上の上、最高評議会である！」

その言葉は、衝撃波となって世界を駆け巡る。

「生に固執し、世界を意のままに操り、全てを手に入れようとする最高評議会がこのルールを創り、少数とはいえ、大人を腐らせる！かのレジアス・ゲイズ中将、彼もまた最高評議会に翻弄された一人

である！最高評議会は彼に質量兵器を作るよう命じた、そうすれば地上の平和を守れると、他力本願では無いと！そして、最高評議会自らが作ったジェイル・スカリエツティと手を結ばせ、今回の地上本部襲撃事件のような事件を招かせた！」

手を高々と振り上げる。

「最高評議会が時空管理局を、世界を手の上で転がそうとするのは、なによりも悪質だと気付く！そして、質量兵器を使うというのなら、私たちはどこへでも向かって破壊を開始する！質量兵器のせいでの星を砂漠に変えると言うのなら容赦はせず、粛清を開始する…！こちらにはそれに抵抗しうる力があるということをお忘れしないで欲しい！」

シヤアはそう言って、水を一口飲む。

「私の話しはここで終わるが、ミッドチルダは終わることなく歩み続けなければならないのだ！！」

その言葉で、すべての空宙モニターが元に戻った。

「お疲れさま」

シヤアの傍に、ユーノが寄る。

「ドゥーエは？」

「準備にとりかかっている」

「…よむやくね」

そこに、リンディ・ハラウンが居る。

「ああ…貴方が場所を提供してくれたおかげだ」

「気にしないで…フェイトやクロノ、それにその次の代の子達のためだもの」

リンディの笑顔、シャアも笑顔で返した。

アースラ

全員が、各所で驚きに止まっている。

「どっついうことや？」

はやてが言葉を発する。

「そんな…」

全員が不安そうな顔をする中、ティアナは違う事を感じていた。

「（お兄ちゃんは…私達を？）」

良くわからなかったので、考えるのをやめた。

時空管理局本局

シヤアとユーノとリンディが廊下を歩いている。
リンディが止まる。

「始まったわよ……」

空宙モニターには、戦闘機人の進行ルート。

アースラ・廊下

「戦闘機人が嫌な感じに散開してる……向かってる先は地上本部」

「……なに、あれ」

空宙モニターには戦闘機人、その姿。

「……ギンガ……さん？」

ティアナの眩き。

その瞬間、全通信でながれる映像。

そこはゆりかご。

『さあ、いよいよ復活の時だ……』

ジェイルの声。

『私のスポンサー諸氏、そして、こんな世界を創り出した管理局の諸君、偽善の平和を唄う聖王教会の諸君：見えるかい？…これこそが諸君が吉備しながらも求めていた絶対の力！』
地が割れ・・・轟音と共に現れるのは・・・

『旧暦の時代、一度は世界を専権し、そして破壊した、古代ベルカの悪夢の英知…』

そこには金色の長巨大艦。

『見えるかい？待ち望んだ主を求めて…古代の英知と技術の結晶は、今その力を発揮する…』

映像が変わり大きな椅子に座っているヴィヴィオ

『ママ・・・っ！』

大きな椅子に繋がっているコードが光だす。
その瞬間寝ていたヴィヴィオは目を覚ます。

『あっ、アア！痛い！怖いよぉ～！ママ！ママ！ママあぁ～！』

そして再び、ジェイル。

『さぁ！ここから夢の始まりだ！ははははっ！あはははははははっ！』

イカれたような笑い声。

時空管理局本局

廊下で、シャアは黙ってその映像を見ていた。

「なのはやフェイトを…怒らせたな」

シャアは、微笑した。

翼、ふたたび 復活のシヤア（後書き）

設定が少し変わったりしてますが気にしないでください（笑）

いよいよ最終決戦、お楽しみに！

無限の欲望

アースラ

前線メンバーたちが集う会議室。

「理由はどうあれ、レジアス中将や最高評議会は偉業の天才犯罪者、ジェイル・スカリエツティを利用しようとした、そやけど逆に利用されて、裏切られたどこからどこまでが誰の計画で、何が誰の思惑なのか、それはわかれへん、そやけど今巨大船が空を飛んで、町中にガジェットと戦闘機人が現れて、市民の安全を脅かしてる…これは事実、私たちは止めなあかん」

会議室にはリイン、なのは、フェイト、副隊長、フォアード陣

「ゆりかごには本局の艦隊が向かってるし、地上の戦闘機人達やガジェットも、各部隊が協力して対応にあたる」

「だけど、高レベルなAMF戦をできる魔導師は多くない、私たちは、4グループにわかれて、各部署に協力することになる」

そこで、ティアナが手を上げる。

「ん…どうしたんや？」

ティアナが口を開く。

「あの…おに、シャアさんは？」

その言葉に、はやてが空宙モニターを出した。
そこには、シャアの演説する姿。

「シャアさんは、ジエイル・スカリエツティー一味とは関係ないということが…ユーノ・スクライア司書長からの通信でわかった、まあ、彼もシャアさんの勢力やから本当か嘘かわわからへんけど…まあ、それ以前にいる場所がわからへんから対応がでけへん…だからとりあえずスカリエツティー一味をなんとかしないとイケへんのよ」

フォワード陣は、安堵の息を吐く。

「だけど…もしかしたら戦うことになるかもしれないよ」

「逆を言つと、戦わないかもしれない」

なのはとフェイトの言葉。

「…すべては奴しだいだ」

「じゃあ…全員、解散！」

はやての言葉で、全員が出て行った。

出撃準備の中、フォワード達となのは、ヴィータが話している。

「今回の出撃は、今までで一番ハードになると思う」

「それに、アタシもなのはも、お前達がピンチでも助けに行けねえ」

「だけど、ちょっと目をつぶって、今までの訓練のこと思い出して」
フォアード陣は大人しく目を瞑る。

「ずっと繰り返し返してきた基礎スキル、磨きに磨いたそれぞれの得意技…痛い思いをした防御練習、全身筋肉痛になってもくりかえしたフォーメーション…いつもボロボロになるまで私達と繰り返し返した模擬戦…」

フォアード達の顔が歪む。

「…目、開けて良いよ」

フォアード陣はホツとしたように目を開く。

「まあ、私が言うのもなんだけど…きつかったよね」

「それでも、ここまで4人ともよく着いてきた」

フォアード陣はキョトンとする。

「4人とも、誰よりも強くなった…とはまだちょっと言えないけど、だけど、どんな相手が来ても、どんな状況でも絶対に負けないように教えてきた…守るべきものを守る力、救うべきものを救うべきものを救う力、絶望的な状況に立ち向かっていける力、ここまで頑張ってきたみんなは、それがしっかり身についている…夢見て憧れて…必死に積み重ねてきた時間、どんなに辛くてもやめなかった努力の時間は、絶対に自分を裏切らない…それだけ、忘れないで」

「キツイ状況をビシッとこなして見せてのストライカーだからな」

「それでは、機動六課フォアード隊…出動！」

「はい！」

4人が敬礼を決める。

??????

三つの脳が、大きな試験管のようなものに入っている。
それらはスピーカーから言葉を発し話しをしている。

これが、最高評議会。

「シャア・アズナブル、なんなのだ、奴は！」

「落ち着け…あんな言葉誰が信じるものか、そして…誰が我等の管理局に抵抗できる」

「そつだ、古くから管理局を裏で導いてきたのは我等だ…今までそれでやってきたと言うのに、それを自ら壊すものは居ない…それに、この場所を特定などできるはずがない」

『失礼します』

女性の声。

「ジェイルは消去を決定しよう…」

「そんなものはとっくに決まっている…問題はシャア・アズナブルだ」

その時、最高評議会の面々の背後（？）に、女性が立つ。

「皆さま、ホットメンテナンスのお時間ですが」

女性の声に、議会の一人が気付く。

「ああ、お前か」

「会議中だ、手早くすませてくれ」

「…はい」

女性は端末を操作しだす。

「なんとかして買収できないか？」

「アノ目を見なかったのか、あれは道化政治家の皮をかぶった武人だ…それに奴はあの腹の裏になにかがあるかわかったものではない…買収など、夢のまた夢」

「お悩み事のようなですね」

そう言ったのは女性。

「なに、粗末な厄介ごとよ」

「お前が、気にかけることでもない」

「はい」

「レジアスや地上からは、何の連絡もないのか？」

「ええ、いまだに、どなたからも」

「そうか」

女性の手が止まる。

「しばらくは慌しくなりそうだが、お前にも苦労をかけるが」

「…いいえ、私は望んで、ここにいるのですから」

その女性は、ドゥーエだった。

アースラ

フォワードたちを乗せたヘリ、シグナムとラインが先に空へと跳んだ。

「ほんなら！隊長陣も出動や！」

「おう！」

なのは、フェイト、ヴィータが返事をする

『降下ハッチ、開きます』

アースラの下にある一部が開く。

そこから飛び出す桜、金、赤、白、の閃光である。

なのは、フェイト、ヴィータ、はやて、である、バリアジャケットをつけないまま落ちていく。

『機動六課隊長、副隊長一同、能力限定…完全解除、はやて、シグナム、ヴィータ、フェイトさん、なのはさん…どうか』

「しつかりやるよ」

「迅速に解決します」

「お任せください」

『はい…リミット・リリース！』

4つの閃光は光が増す、光が収まると出てくるのはバリアジャケットを着たメンバー。

「エクシード、ドライブ！」

レイジング・ハート「イグニッション！」

なのはのバリアジャケットは変形する、より強く、美しい姿に。少し飛ぶと、フェイトがなのはの横に着く。

「なのはとレイジングハートのリミットブレイク、ブラスタモー
ド、なのはは言っても聞かないだろうから使っちゃダメとは言わな
いけど、お願いだから…無理だけはしないで…」

「私はフェイトちゃんのほうが心配…フェイトちゃんとバルデッシ
ユのリミットブレイクだって、凄い性能の分、危険も負担も大きい
んだからね」

「私は平気、大丈夫」

「はあ、フェイトちゃんは相変わらず頑固だなあ」

「なっ！なのははだって、いつも危ない事ばかり！」

「だって航空魔導師だよ？危ないのは仕事だもん」

「だからって、なのはは無茶が多すぎるの！私が、私達がいつもど
れだけ心配してるか」

「知ってるよ…ずっと心配してくれてた事、良く知ってる…だから、
今日もちゃんと帰ってくる、ヴィヴィオを連れて、一緒に元気で帰
ってくる！」

「…うん！」

「あ、フェイトちゃんそろそろ」

「フェイト隊長も無茶すんなよ」

「地上と空は、私達がきつちり抑える」

「うん！大丈夫！」

「頑張ろうね！」

「うん！」

フェイトは離れていった。

??????

最高評議会の居る空間、そこに、また一人。
一番右の試験管がビームによって貫かれた。

「なっ！」

そのビームが飛んできた方向には、シャア・アズナブル。

「なぜ貴様があっ！」

シャアは、それらから背を向けた。

そこには、一つのモニター！

「度々なる無礼、許していただきたい！」

ミッドチルダ中に、再びシャアの顔が映る。

「これが時空管理局最高評議会の招待だ！君達が生きている世界はこんなものに守られていた、そして、それがこんな状況を生む！」

そこには、なのはの幼少時代の大怪我。

そして幾人もの重傷患者と子供。

さらに、一つの映像。

それは、死んだティード・ランスターへと罵倒を浴びせた管理局員。

「人は時代の流れに乗らなくては生きていけない、生命操作技術などという不死に踊り踊らされ、幾人の者を実験と言う拷問に追いやった！」

片手を挙げシヤアは叫ぶ。

「ミッドチルダの民よ、今こそ立ち上がるときである！」

そして、通信をきった。

ドゥーエが笑って、左の試験管を鉄爪で破壊する。

「なにい…な、なぜだあ！」

「彼がここに漂流した時点で、この運命は決まっていたのよ」

ドゥーエは、爪を舐める。

「終わりだ…新しい時代を作るのは」

そこで、銃を撃とうとする手を止める。

「なぜここに…」

背後から、一人の男がやってくる。

「レジアス・ゲイズ中将」

「…自らの始末は自らでつけるものだ」

レジアスの手には、手榴弾。

安全ピンを外せば、すぐ爆発するものだ。

「…しかし」

「行け…」

レジアスは最高評議会、最後の一人の傍によった。
ドゥーエの背中を押して、シャアの方へやる。

「ちよっ…」

シャアが、ドゥーエを受け止め、レジアスを見る。

「私が」

「新しい時代を作るのは老人ではない！」

レジアスの一括。

シャアは、背を向け、そこから去った。

決戦

リンデイが、本局の廊下に居る。

目の前の宇宙モニターにはユーノとクロノ。

「ええ、艦隊運用部も通信部も大騒ぎよ、ただ、レオーネ相談役が上層部取りまとめしてくれるし、運用部はレティたちが上手く立ち回ってくれてるから、出勤遅延は出ないと思う」

『助かります…ユーノ、そっちは』

『こつちも…聖王のゆりかごのデータ、さすがにかなり少ないけど、今送るよ』

ユーノはどこその部屋にアルフといるようだ、無限書庫ではない。

『こちらから、艦隊と前線全てに送信する』

「アノ船の危険度はかなり高いわね」

『…古代ベルカですら、ロストロギア扱いだつた機動兵器…失われた世界、アルハザードとの輸出物とも』

『アルハザード』

忌々しそつにそつ言った。

「我が家にとっては…あまり思い出したくない名前だけど」

『フエイト…』

アルフが、不安そうな顔をする。

『…その真偽はともかくとして、最大の危険は、軌道上に到達されること』

映像が変わり、ミッドチルダと二つの月が映る。

『軌道上、二つの月の魔力が受けられる場所で、極めて高い防御性能の発揮と、地表への精密射撃と魔力爆撃が可能になるっていうのは、教会の伝承にある通りだけど…こっちに調査によると、次元跳躍撃や次元空間での戦闘すら可能と、その性能が完全に発揮されれば、次元航行隊の艦隊とも正面から渡り合えるかもしれない』

「軌道上に上がる前に、止めないといけないわね」

『対抗策は？』

『鍵となる聖王が、それを命じるか、本体内部の駆動炉を止める事ができれば』

『鍵の聖王、ヴィヴィオはスカリエッティの戦闘機人に操作されている可能性が高い』

「スカリエッティの逮捕でも、止まる可能性があるのね」

その時、アルフがユーノの画面から顔を出す。

『お母さん、クロノ…』

「アルフ？」

『スカリエッツィの逮捕は、フェイトがやってくれるよ…フェイトが今まで頑張つて、追いかけてきたんだ、きつと逮捕してくれる』

「…そうね」

「終わったぞ」

そこに歩いてきたのは、スーツで髪を下ろし、サングラスをつけたシヤア。

空宙モニターに、シヤアも顔を出す。

『シヤア、終わったのか』

クロノの言葉。

彼もシヤアに協力する一人だ。

「ああ、私の仕事も少ない」

『だが、密度は濃いぞ』

「問題はない…その後はゆっくりと生活させてもらおう」

『ふっ…さて、リンディ提督』

「任せておいて…アレを使えば、すぐ行けるわ」

『置いておいたかいるというものです…』

「さて…アクションを起こす…」

空宙モニターを消して、シャアとリンディ、ドゥーエが歩き出す。

ティアナは苦戦していた。

スバル、エリオ、キャロと離れることとなった後、結界を張られたビルに袋のねずみ状態。

ティアナが認知している限り、敵はノーヴェとウエンディの二人。

「うおおおおっ！」

ノーヴェの腕から弾が放たれ、ティアナに直撃計三発。
しかし

それはガラスのように割れた。

「ふう…やっぱり幻影」

その時、二人に魔力弾の雨が飛んでくる。

その方向には、4人のティアナ。

「くっ！」

ウエンディが後退して、ノーヴェがティアナの方に走り出す。
目のカメラが、幻影と実体を区別する。

「見えてんだよ！」

跳んだ。

そしてジェットエッジでの蹴りをティアナに直撃させた。

「きゃあっ!」

ティアナは吹き飛び、アスファルトの壁に叩きつけられる。

そして、ソレと共にでた煙の中に、ウエンディがエリアルショットを放った。

それを返すように、煙の中から4つの魔力弾がノーヴェに向かう。

「っ!」

直撃する寸前に、ウエンディがライディングボードを使い盾にする。その隙をみたティアナはビルの中央の吹き抜けから、アンカーで上昇する。

それを見るウエンディ。

「前より弾丸が鋭いつすね」

「あんな豆鉄砲、一発二発くらいなんてことねえ」

「まあ、そつつすけど」

ティアナは、上昇しながら思考をフル回転させる。

「（こんな狭いところで二人相手じゃ、持ちこたえるのが精一杯…結界破壊スタッフが来るまで持ちこたえなきゃ…ヴィータ副隊長との模擬戦のときの…アレが使えれば）」

そう思い、上空を見やると、一つの光。
ナンバー12ディード。

「ッ!？」

そして、爆発。

時空管理局本局

シャア、リンディ、ドゥーエの3人が歩いてきた場所は、航行艦があるドッグ。

「…新造艦を取りに行くんでしょ？」

ドゥーエの質問に、リンディが頷く。

「ええ、クロノに使わないでって言ったの」

「そのアルカンシエルなんかでゆりかご吹き飛ばせば良いのに」

「ついてないのよ、アルカンシエル」

ドゥーエが驚く。

「今のご時勢にアルカンシエルがついてない戦艦なんて意味あるの?」

「次元航行のスピードがダンチなのよ」

リンデイが笑って、通路横を指差す。
その方向には窓、向こうに航行艦が見える。

「あれは…」

「新型航行艦、ホワイトアーク…次元漂流してきた一枚の設計図を元に作ったの」

そこには、シャアの忌まわしき記憶の一つ『木馬』に似た艦があった。

デイドの元に、ウエンデイとノーヴェが行く。
そこには、血のついた剣を持つデイド一人。

「デイド！アンタも!？」

ウエンデイが驚く。

「オットーの指示、あの幻術使いは確実にしとめておかないと、面倒だって」

近くの穴の開いた壁の後ろに、ティアナが隠れていた。

「っ（よりによって足）」

痛みをこらえ、3人の戦闘機人を見る。

「（それに、戦闘機人三機：ガジェットまで）」

血の滴る足を押さえる。

絶望的な状況。

凡人がこんな状況から逆転できるはずが無い。

「（これは……無理……かな）」

その時、スバルの顔が頭に浮び、声が聞こえた。

『大丈夫だよ！ティアならきっとできるって！』

周りを見渡すが、スバルがいるはずもない。

『ティア強いもん！絶対、絶対大丈夫！』

少し、目を瞑る。

『一緒に頑張ろうね、ティア！』

「（やだ……なんでアタシはこんな時にまでアイツのこと思い出してんのよ！）」

『一緒に行こう……夢を……叶えに』

「（ティードお兄ちゃん、シャアお兄ちゃん……スバル……私、やってみる！）」

目を開いたティアナの瞳には、決意が見えた。

「ゆりかご」軌道ポイント

到達まで

後2時間16分

Pain or Striker

ティアナはなるべく戦闘機人から離れた場所に居た。幻術と射撃を駆使し、3人の目をあざむいていたが

「見つかった…後は、ここで迎え撃つ」

『YES』

ティアナは立ち上がり、通路の真ん中に立つ。

「（右足も潰されて、カートリッジも魔力も、もうあとちょっと…頼みの綱の、一発勝負も、通用するかどうか…）」

目を細める。

少し、落ち着いてきた。

「ホントはさ、随分前から気付いてたんだ…万能無敵の超一流になって、なれない…くやくして、情けなくて、認めたくなくてね…それは今もあまりかわらないんだけどね…だけど…」

その時、背後の天井が壊れた。

「くっ」

後ろを振り向くと、ノーヴェとディードが突っ込んでくる。クロスミラーージュがダガーモードへと姿を変える。

「っ…」

デイドの双剣を、ふたつのダガーで止める。

そして、すぐデイドがどいた瞬間、ノーヴェの蹴りが飛んでくる。

「あっ！」

爆煙、そして再びビルの天井に向けてアンカーが飛び。

ティアナが上へ上がっていく。

しかし、ウエンデイが驚きながらエリアルショットでティアナを貫く。

「幻影ッ!？」

ソレは幻影。

ウエンデイが下の階を見る。

ノーヴェが壊れたジェットエッジを見て舌打ちをした。
煙が晴れる。

「ちっ！」

ノーヴェが舌打ちをした。

そこには、右手にダガー、左手に銃を持ったティアナ、その横には二つの魔力弾が浮いている。

ウエンデイ、デイドが背後、正面にノーヴェというポジションで立つ。

『逃げない?』

『畏か』

『本物なのは間違いないっすね』

『ああ、本物だ』

ノーヴェの苛立ったような念話。

『ええ、油断しないで…同時攻撃で一瞬でしとめる』

そんな陣形を見て、ティアナが気付く。

「（やっぱり、最初の時と同じポジションだ…こいつらの唯一の穴…完璧だけど、単純な連携…コンビネーションの初動…それを見抜けば）」

チラッと、ノーヴェの壊れたジェットエッジを見る。

「（でも…確かにあの時わかった…攻撃がどう来て、どう避ければ良いか…）」

ティアナは、もう一度全員の動きを見る。

ゆりかご外部

はやての指揮の下に、数々の魔導師が戦っていた。

「くっ！戦力がたらへん…っ無理や、AMF戦ができる魔導師が！」

『はやて、私が援護しよう』

「シャアさん！？」

『今、そちらにつく』

はやての隣り。

そこに、大きな時空の歪ができた。

「なっ！」

そこに現れたのは、小型の航行艦。

ホワイトアーク・ブリッジ

リンディが、艦長席に座っている。

「艦長、目的地に到達！」

「ゆりかごを目視、砲撃を開始します！」

そこに居た二人のオペレーターは、かつてのアースラでの戦友。

「アレックス、ランディ、ここに停止して負傷した魔導師を搬入して…デッキでユーノ君が治療してくれるわ！」

「全魔導師に送信します！」

そして、暗闇につつまれるデッキのハッチが開かれた。

「サザビー、出る！」

ハッチから、サザビーフル装備のシャアが出撃する。

「ドゥーエ、Gディフェンサー、出るわ！」

シャアが出したGディフェンサーに乗ったドゥーエも出撃した。

「全管理局員に告ぐ、我々は管理局提督、リンディ・ハラオウン、クロノ・ハラオウン、そして今は亡きレジラス・ゲイズ中將の下、管理局に今現在協力体制を取る…私を逮捕するのは良いが、まずあの憎むべき兵器、聖王のゆりかごを落とす！」

大多数の局員達は、シャアを敵だとは思って居ない。自分達は踊らされていて、シャアが真のことを教え、今助けをくれるというのだから。

「これより形勢逆転を開始する！」

シャアが、ファンネルを展開した。

ビルの屋上

ナンバー8オットーが、その映像を見ていた。

「…バカな」

苦い顔をした後、他の映像を見る。

それは、ヘリからガジェットを狙撃している局員。

「あのヘリは…ガジェットを落としている？」

その時、地面から出た銀色と緑色の刃が、ガジェットを貫き破壊する。

そして、糸のようなもので体を拘束された。

「くっ！」

そこには、ザフィーラとシヤマル。

「貴方が地上戦の司令官ね…うまく隠れてたけど、クラールヴィントのセンサーからは、逃げられない」

「大規模騒乱罪、および、先日の機動六課襲撃の容疑で…」

オットーは、バインドを引きちぎり、逃げようとした。

「てえおあああああっ！」

白銀の刃に周りを囲まれ、再びバインドをされた。

「逮捕します！」

シャマルが言い放った。

ビル内部のティアナはまだ、先ほどの状態のままだ。

「…オットー？」

双子ゆえに、通じ合っているのか、何かを感じるディード。ビルに張られていた結界が解ける。

『オットー、墜ちたっすね』

ティアナは、それに気付きながらも冷静だ。

「こっつのおおお！」

ノーヴェが走る。

ソレと共に、ディードが走り、ウェンディはチャージを開始。そして、ティアナは何かを感じ取る。

「こっつ、見えた！」

二発の魔力弾、ノーヴェとディードに一発づつ。

ノーヴェもディードも軽々と避けた、そのロスタイム。

「見えるっ私にも！」

ティアナは即席の魔力弾をウェンディのチャージしているエアリアルキャノンに当てる。

爆発によって、爆煙、それでウエンディの動きとノーヴェエの動きが止まった。

そして、背後に回りこんだディードの斬撃は

「あっ!？」

後頭部に二つのダガーをまわしてガードする。

先ほど避けられた魔力弾がUターンを開始した。そして動きが止まっているディードの後頭部と

「えっ?」

起き上がったウエンディの顎に一発つつ直撃した。

「ぐあっ!」

二人が倒れる。

その音を聞いてその二人を見たノーヴェエ。まだ爆煙だらけの中。

「貴女達を…保護します」

ノーヴェエに銃口を向ける。

「武装を…解除しなさい!」

ティアナは言い放つ。

地上本部

ゼストが、レジアスのいると思われる部屋に入った。
そこには、オーリスが一人佇む。

「…ゼストさん」

「オーリスか…」

「父さんは…居ません」

『そして今は亡きレジアス・ゲイズ中將の下』

シャアの演説が、そこだけ耳に入る。

オーリスの瞳には、沢山の涙が溜まる。

「…そうか」

「これ」

渡されたのは、一枚の手紙。

「お父さんから、です」

ゼストは、それを受け取り中身を確かめる。

「聞きたい事は沢山あった…俺とレジアスの夢、いつでもそつだ、
オレは…いつも遅すぎる」

後ろから、シグナムとアギトとリインがやってくる。

「旦那！」

「…アギト」

シグナムは無言で、ゼストを見る。

「用件は…」

「終わった、何もかも」

ゼストは、瞳を閉じて、目頭を押さえた。

一方、キャロ、エリオとルーテシアの戦いもクライマックスだった。クアットロに操られた彼女を解放するのが、エリオとキャロの目的。しかし、そうは行かない。

『エリオ、キャロ！』

「シャアさん！」

エリオとキャロが驚く。

『彼女は操られているんだっただな…コンシデレーション・コンソールが魔導師に戦闘を強要しているのか…』

「どうすれば良いんですか！」

『戦いの中でも彼女を救う方法があるはずだ、それを探せ！』

「無茶ですよ！」

『だが、それ以外に道は無い！なにっ！？』

シヤアの驚いたような顔が見えた。

それで通信は切れる。

「くっ…やってみるぞ」

エリオとキャロは構える。

ティアナは、まだ投降しないノーヴェに銃を構えていた。

「まだ動いてるのは、あんたとあの船の中の四番だけだそうよ！」

「くっ」

「あなたの事情は良く知らないけど、だけど罪を認めて保護を受ければ、ちゃんと生きなおすこともできると思う」

しかし答えは、否。

「そんなわけねえ！こっちは戦闘機人、戦う為の兵器だ、戦って生き残る以外の生き方…ねえんだよ！」

その瞬間、横で倒れていたデイドが起き上がり、ティアナに剣を振り下ろそうとする。

『ティアナ、後ろだ!』

「(お兄ちゃん!?)」

ティードの声が聞こえたその時。

一発の銃弾がデイドの頭を撃った。

デイドは倒れ、ノーヴェエが驚愕の表情をしている。

『いまだ、行け!』

次はシャアの声。

「っ!」

ノーヴェエに接近して、首にダガーの刃を突きつける。

「戦うための兵器だってさ、笑うことも、優しく生きる事もできるわよ…: 戦闘機人に生まれたけど、誰よりも人間らしく、誰よりも優しく、一生懸命な奴を、私は知ってる…」

そう言って、ティアナはノーヴェエに笑いかけた。

ゆりかご外部。

『スターズ04がナンバー9を確保!』

「やったか、ティアナ」

シャアは、多くのガジェット戦闘している。

一人で沢山のガジェットを撃破していた。

現在、シャアはサザビーの姿のまま、リックドムのビームキャノン
を装備している。

「行け！ファンネル！！」

周りのガジェットたちが撃ちぬかれる。

ドゥーエはGディフェンサーに乗りながらガジェットを切り裂いて
いる。

「まだか…なのは、ヴィータ」

シャアは、苦い顔をしていった。

P a i n o r S t r i k e r (後 書 き)

もう後1、2話で最終回です。

ファイナル・リミット

シヤアとはやてが、背中合わせで浮いている。

「ええい、きりがない！」

「グイータとなのはちゃんが頑張ってくれます！全員がんばって
！」

『おう！』

局員達はまだ諦めたわけではない。

『次元航行部隊到着まであと45分、巨大戦の軌道ポイント到達まで、後38分』

「7分差か」

はやてが、苦虫を嚙んだような顔をした。

『主砲の照準は、ミッド首都に向けられています…7分あれば』

「撃てるやろっね」

はやては、ゆりかごを覗む。

「防衛ライン現状維持、シヤアさんに指揮を託す！今から私も突入する！」

「なに!？」

「軌道上になんて上がらせへん、地上に攻撃もさせへん…」

『八神部隊長!』

『でも』

グリフィスとはやてが抗議しようとする。

『割り込み失礼、こちらロングアーチ03!』

「アルト？」

『八神部隊長、もうちょっと待ってください…大事なお届けモノを、そちらに…』

アルトの声が聞こえた。

はやてが行った数十分後。
キャラとエリオは、フリードの上に乗っている。

ルーテシアを気絶させ保護したのは良いが、虫たちの暴走が止まらない。

「くっ…」

ガリユーの協力で、なんとか地雷王を押えている。

『キャロ、エリオー!』

シヤアの宇宙モニターが出てきた。

「はい!」

『私がそちらに向かう』

「現場指揮はどうするんです!」

『リンディ提督に代わる!』

「貴方は現場指揮でしょ!」

『その前に、私は兵士だ...』

「ここはボクたちが片付けます!お構いなく...貴方に託して死んでいった人はどうなるんです!レジアス中將は!」

画面のシヤアが、苦笑いする。

「なに、笑ってるんです」

『...そちらへの援軍は諦めよう...』

エリオは、シヤアをジト目で睨む。

「前線の局員を呼んでください...」

『わかった』

そこで、通信は切れた。

「…地雷王…早く止まってくれ！」

エリオは、地雷王へ向けて走り出した。

ゆりかご外部

シヤアは、通信を切ると苦笑いをした。

「…カミーユに似たな、少し育て方を間違っているぞ」

誰に言うでもなく言った。

その時、シヤアの目の前に宇宙モニターが現れた。

「また通信か」

そのモニターには、クアットロが映っている。

『はあい、シヤア・アズナブル』

「やあ、ナンバー4クアットロ」

『ドゥーエ姉さまを騙して手籠めにしましたの？』

少し怒っているようだ。

「そつだとしたら？」

挑発をすると、クアットロの髪の毛が一瞬逆立った。

ニュータイプでなくてもわかるくらいの怒気を出している。

『後悔するわよ…貴方は絶対殺すわ』

「やれるものならな」

その時、クアットロが驚く。

『エリアサーチ！？』

その言葉を最後に、シャアは通信を切った。

「終わりだな」

『？型が50体！』

「行け、ファンネル！」

何十本かの閃光の後、爆風が起きた。

「まったく、さすがに疲れるものだ…邪気が消えた、やったか、なのは！」

シャアの肩が、上下している。

『各地でガジェット停止を確認!』

その時、ゆりかごから何かが複数射出される。
目標は地上。

『弾道ミサイル、質量兵器です!』

「なにっ!? 同員を退避させろ!」

『もう完了してます!』

シヤアが汗を流す。

「さすがだ…ファンネル!」

幾多の光の後、爆風が広がる。
そして、その中。

一際大きな光が発せられた。

「なにっ!」

『水素爆弾だと思われませう!』

「ええい、数はそんなにないはずだ…」

ファンネルがミサイルへと飛ぶ。

「…そこか!」

大きな爆発がいくつもおきる。

「クアットロっ、やるなっ！」

『ミサイルの射出、止まりました…』

「ええい！こんな場所で戦っていて…」

『巨大船、全速激減、これなら艦隊の到着のほうが多いです！』

「やったか!？」

不思議と、不安感は消えなかった。

廃棄都市の高速道路で、ティアナが歩いていると、スバルが向こう側から走ってくる。

背中にギンガをしっかりと背負っている。

「ティア！」

「スバル！各地でガジェットが止まってるって…何があったの？」

「わからないけど、きっとなのはさんたちが…」

しかし、不安感はおさまらない。

そこに、ヴァイスの乗っていたヘリが止まる。中から出てきたのは、ザフィーラとシャマル。

「スバル、ギンガは大丈夫？」

「はい！」

ギンガを、シャマルへと渡した。

ティアナがヘリの中を見ると、ヴァイスのバイクがそこにあった。

「ん？」

「船の上昇は止められたみてえだが、アノ中じゃまだ、戦いが続いてんだ」

ヴァイスが現れた、

スナイパーライフル形態のストームレイダーを肩に担いでいる。

「突入したなのはちゃんたちと、連絡がつかなくなってるの！」

「えっ!?!」

スバルとティアナは同時に驚く。

「インドアでの脱出支援と救助任務、陸戦屋の仕事場だぜ！」

「はい！」

二人同時に返事をして、ヘリに乗り込む。

ティアナが行って、スバルが行く瞬間、ギンガが起きる。

「スバル」

「ギンねえ」

「…これを」

その手には、ブリッツキャリバー。

ゆりかご外部

シヤアにまた通信が繋がる。
ヴァイスが現れた。

「どうした？」

『今からそちらに行きます、援護お願いしますよ！』

「了解した…合流する！」

通信を切った。

「いくぞドゥーエ！」

「了解い！」

シヤアとドゥーエは、へりに向かって飛ぶ。

人の心の光

シヤアとドゥーエが、ヴァイスのへりへと收容される。

「すまん」

ヴァイスがそこに立っていた。

「いえいえ、こちらこそ」

スバルとティアナが、シヤアを見つめる。

ドゥーエが気まずそうにしているが、苦笑い。

「…スバル、ティアナ」

その一言で、二人には通じただろう。

頷いて、バイクにまたがる。

「ドゥーエ、お前も行け」

「ええッ!？」

「妹の不始末は上がつけるものだ…もちろん兄や姉の不始末も下がつけることになるがな」

そう言って笑ったシヤアが、ファンネルを射出した。

空のガジェットたちが蹂躪されていく。

ヴァイスがハッチのギリギリの場所に立って、ストームレイダーを構える。

「良いか、船ん中は奥に進むほど強度のAMF空間だそうだ、ウィングロードが届く距離までくつつける…そいつで突っ込んで、隊長達を拾って来い！」

「はい！」

二人の返事。

「行くぜ、ストームレイダー！」

3秒もなく、2機のガジェットを葬った。

「えっ!？」

同じガンマンとして驚くティアナ。

「前に言ったな、俺はエースでも達人でもねえ…」

そして、何発もの魔力弾を撃つが、全て命中し一撃でしとめる。
一撃必中、何よりも必殺。

「身内が巻き込まれた事故にビビッて、取り返しのつかねえミスシヨットもした…死にてえくれえ情けねえ思いもした…それでもよ！」
カートリッジを交換する。

「無鉄砲で馬鹿つタレな…」

銃の先端に、魔力が集中する。

『Variable Barrett』

「後輩の道を作ってやるぐらいでさらあな！」

その射撃は、ガジェット？型を一撃で撃破した。

ティアナは驚いている。

「よし、行け！」

「あつ、はい！」

バイクの下に、魔法陣が現れた。

「ウイングロード！」

「GO！」

スバルとティアナと、ドゥーエがゆりかごへと向かって行った。

「行っちまいましたね」

「ああ…しかし私の仕事は、新しい時代を作るモノに…道を作ってやることだ」

シヤアは、空へと飛び立つ。

アースラ

ルキノに通信が届く。

『小型航空機、地上に降下しています!』

『空戦魔導師、誰か居ないか!?!』

「該当地点で、今動ける魔導師は…あつ、います!機動六課ライト
二ング02シグナム二尉!」

上空で浮遊しているのは、シグナム。

「この声、ルキノか?」

『はい!あれ、シグナム副隊長…そのお姿は』

「心強い増援がついてくれた…」

シグナムの姿が変わっていた上着が脱げ、ほかの場所が伸びたり縮んだり、そして焰の羽。

背後にはゼスト・グランガイツがいる。

「現在位置で迎撃する!」

『はい!』

通信が切れた。

後ろのゼストが、口を開く。

「…私も手伝おう」

「いえ…我々にお任せを…」

『機影48まだ増える』

「やれるか、アギト…」

『やれるさ…猛れ炎熱！烈火刃！』

レヴァンティンに炎が纏わる。

「レヴァンティン！」

『Schlangeform』

「はあああああつ！」

『はあああああつ！』

多数のガジェットの攻撃も、連結刃によってかき消される。そしてガジェットも巻き込まれ数機落ちた。

「剣閃烈火！」

シグナムが空いた左腕を右に振り。

『火龍！』

「一閃！」

『一閃!』

左腕を左に振ると、数十ものガジェットが爆発へと変わる。

『き、機影50、一瞬で全機撃破!』

連結刃が元に戻った。

「アギト、なぜだろうな…お前との融合は、不思議と心が温かい」

「…見事なものだ」

ゼストが、隣りへやってくる。

「ルーテシアも、アギトも救われた…次は俺が解放される番だな」

『旦那、縁起でもないこと言つなよ!』

「…俺は、アギトが羽を伸ばし、力を解放できるロードが見つかった…その姿を見れた…お前達二人と過ごした時間は…悪くなかった」

『旦那!』

「ああ…もう一働き、させてもらおうか」

ゼストとシグナムは、向かってくるガジェット相手に

『第二編隊、来ます!』

「ああ、行くぞアギト!」

『おう、シグナム!』

構えた。

ゆりかご内部

血だらけのヴィータは、なのは、はやての救出のため、ガジェットを叩き潰しながら歩く。
後ろの局員が止めに入った。

「無茶です、ヴィータ三尉!」

「うるせえ!」

その時、背後から二つの影。

「ヴィータ隊長、ご無事で!」

「なのはさんと八神部隊長の救出…行ってきます!」

バイクが通り過ぎ、もう一機謎の飛行物体が通り過ぎた。

「あ、アノ子たちは」

「あいつら…」

通り過ぎたスバルとティアナ、そしてドゥーエ。

「本当に、全然魔力が結合しない！」

「そりゃそうよ、戦闘機人さえ戦えれば問題ない空間だからね」

「でも、あたしなら撃てるし走れる！」

「きつと助けて戻れるわ…あたしとアンタの二人でなら！」

「…うん！」

自信をもって頷くスバル。

そして、かなりアウエイのドゥーエ。

「…酷いわね」

「あつ、すみません！」

スバルが謝る。

「ふふっ…良いわよ、結構結構…良いじゃない青春！」

バイクの隣りに、Gディフェンサーをつける。

ドゥーエは膝立ちで、それに乗っている。

「私は破壊系じゃないの…だからアンタが助けなさい…あんたが姉を助けたように…私は妹をたすけたい」

「…はい！」

目の前に現れるのは、防衛システムである正方形型の砲台。

「アンタは温存しときなさいな！」

ドゥーエが前に出て、すれ違いざまに、そのピアッシングネイルで砲台を切り裂く。

「まだまだ来なさいな！」

ドゥーエは伸縮自在の爪で敵を切り裂き続ける。しばらくすると、ティアナが何かを感じ取る。

「この感覚…なのはさんが真っ直ぐ行った…壁の一枚向こうよ！」

「おう！」

目の前に壁が現れた。

ドゥーエがスピードを落とし、スバルが前に出る。

「うおおおおおおお！！！」

二つのリボルバーナックル。

「IS発動！振動破碎！」

青い閃光が、壁を貫いた。

そして、その壁の向こうを見る。

「お待たせしました！」

「助けにきました！」

二人が、その向こうに居る。

なのは、ヴィヴィオ、はやて、リインに言った。

「…うん」

なのはが、頷く。

ゆりかご外部

シヤアが次々とガジェットを落としていく。

「くうつ、数では私には勝てんよ！」

腰部メガ粒子砲が幾数ものガジェットを破壊する。

『スカリエツティ本拠地、振動停止！突入隊および、ライトニング
01、ライトニング03、脱出確認！』

「エリオがやったのか！」

後は、ゆりかごだけだ。

次の通信は、クラウディアから

「クロノか…」

オペレーターの声が響く。

『巨大船内部に突入した魔導師、第一隊から第四隊まで退避、最
部の機動六課メンバー…全員、脱出確認！』

『だそうだ…見に行つてやれ』

「言われなくてもそうするさ」

シヤアが飛んで行く。

クラウディア

クロノが安堵の息を吐く。

「さて、ここからは、こつちの仕事だ」

「はい！ゆりかご、成層圏を脱出、射程圏内に入ります、300…
200…100…50…80!？」

「なに！ゆりかごが遠ざかるだとツ!？」

クロノが席を立ち上がった。

へり内部

シヤア、ドゥーエはやて、シャマル、ザフィーラ、なのは、ヴィー

夕、ヴィヴィオ、スバル、ティアナ、ヴァイスが居るへりの内部が、緊迫した空気につつまれる。

『総員、撤退！ゆりかごを止める術は無い！今すぐ離れる！押しつぶされるぞ！』

「クロノ提督、どういうことですか!？」

『ゆりかごが重力に引かれ落下を始めている…止める術などない…ゆっくりと落ちているが、下敷きにされるぞ!』

「ヴァイス、ハッチを開け!」

「了解!」

へりのハッチが開かれ、サザビーをフル装備に、シヤアは出撃する。目標地点はゆりかご。

『やめろっ、シヤア!!!』

「ふざけるなっ!たかが船一つ、サザビーで押し返す!」

『バカなことはやめろ!』

「やってみなければわからん!」

シヤアは、成層圏を抜けてゆっくり落下するゆりかごを押し返そうとする。

「サザビーは伊達じゃない!」

バーニアがいつもより高出力だ。

ホワイトアーク

リンディが叫ぶ。

「艦をゆりかごの下につけて！」

「えっ!?!」

「ホワイトアークでゆりかごを押し返すのよ！」

「無茶言わないで！」

アレックスが必死でリンディをなだめる。

「り、リンディ艦長、収容していた負傷兵が！」

「えっ!?!」

リンディが驚きの声をあげる。

ゆりかご

サザビー一機で押し返せるわけもなく、少しづつゆりかごは落下し

てくる。

「シャアさん！」

なのはとはやてが、横でゆりかごを押す。

「なにッ!？」

「我等もだ」

ザフィーラ、シグナム、シャマル、アギトにゼスト、ユーノ。

「機動六課だけに良い思いはさせませんよ!」

他の一般局員たちまで集る。

「やめろ!こんなことに付き合う必要はない!」

そして、ウイングロードがはしってくる。

「はああああっ!」

「でやあああ!」

ティアナとスバルも踏ん張っておさえるが、後ろへと押されていく。

「私達もいます!」

さらに、フェイト、エリオ、キャロ、フリードリヒ、ヴォルテール。エリオとキャロはヴォルテールに乗りながら押している。

「へへえ、楽しそうな事、してるじゃないっすか！」

ウエンディ、そしてブレイクライナーを使って空を飛べないナンバーズたちもゆりがごを押す。

もちろんウーノ、クアットロ、スカリエッティは居ない。

「ナンバーズまで…無理だ、みんな下がれ！」

「ミッドがだめになるかどうかなんでしょう？やってみる価値はあるわよ！」

ドゥーエがGディフェンサーに乗りながら叫ぶ。

ナンバーズの面々はその姿に驚く。

「ドゥーエ、お前！」

トーレが叫ぶが、ドゥーエはそれどころではない。

「お話は後後！」

その時、人があまり集っていない端の方にガジェットたちがあつま

る。ガジェットたちまで押し返している。

「どづいうことだ！」

『失礼するよ』

宇宙モニターには、スカリエッティ。

「なんのつもりだ！」

フェイトが叫ぶ。

『局員の方々には少し寝てもらった、大丈夫、脱走など考えてはいないよ……』

スカリエッティは意味ありげに笑う。

『君達の行動の理由が知りたくなつた……ああ、楽しいね、やっぱり心が無い人間なんて無意味だ……心があつてこそその人間だ……それでこそ研究のしがいがあるよ！』

スカリエッティは、クラナガンの真ん中、確実に死ぬ場所にいる。

「離れる！うっ！サザビーの力は！」

シャアから、虹色の光があふれ出した。

赤い彗星

シヤアから、虹色の光が発せられる。

「なにっ…これは、サイコフレームの…」

いつぞや見た、あの光である。

「いける…」

その虹色の光は、どんどん広がっていく。
それに包まれた者は不思議な感覚におちいる。

「これは…優しい、温かい…」

ティアナが呟く。

地上

ジェイルとウーノが、空宙モニターでガジェットを操作しながらも、
真上の光を見る。

「素晴らしい！ああ、なんとということだ！」

スカリエツティがその中心に目を細める。

「…素晴らしい…あんな生命技術等という研究よりも…はるかに！」

「ドクター!？」

ウーノの驚愕した言葉、それは当然である。

最高評議会に生まれる前から遺伝子的に組み込まれていた『夢』である生命操作技術を『無限の欲望』アンリミテッド・デザイアを解き放った。

「あれは一体どういう技術なんだい! なあウーノ、君にはわかるかい!？」

「いいえ、わかりかねます」

「そう、わからない! 良いよ… 私は自分のわからないことが大好きだ! それを解いた時の優越感、達成感… 快樂だ!」

ジェイルはその光を見つめ続ける。
ウーノも同じく、光を見つめる。

「ああ… 綺麗だ… 決してこの光を解明するまで私は」

「ドクター」

背後には、クアットロが居た。

ガジェットを引きつれ、チンクが歩いている。

「久しぶりだねえ、君が髪を解いているなんて…」

「ドゥーエお姉様もいるのよね?」

「ああ… 全力で止めなくては、私の楽しい研究のためにも!」

ジェイルは、ピアノを弾くように空宙モニターを操る。

「アノ光…」

クアットロが魅入る。

「美しいな…そう思うだろ、ウーノ」

チンクの言葉に頷いたウーノは、不思議と、心が暖まる感じがした。戦闘機人にもある、心が。

シヤア以外の人間が、虹色の光を浴びて、地上にゆっくりと降ろされた。

今だシヤアは、ゆりかごへと取り付いている。

『お兄ちゃん!』

そこに、ティアナやなのは、フェイトやはやてが映る空宙モニター。シヤアは、必死になってゆりかごを押す。

(大佐…)

「ぬうつ…ララアか!？」

(お手伝いします、お手伝いします、大佐)

ララアが、後ろから後押ししてくれるかのような声が聞こえた。

『女の人の…声?』

ティアナがぼやく。

「そうか…ティアナ、ティアナもニュータイプへの覚醒を…しかし、地球生まれのニュータイプだと？」

（大佐…今は）

「ああ…ララア、もう良い」

（大佐？）

「今回限りで私へ、とり憑くのはやめてくれ…」

（それは、大佐しだいです）

シヤアは、さらにブースターをふかす。

「サザビー！」

『お任せください、大佐！』

虹色の光はさらにあふれ出す。

「ララア、最後だ、私を導いてくれ！」

一杯の光の後、ゆりかごはゆっくりと軌道上へと上がっていく。
虹色の光が纏わりついたゆりかごを、クロノは睨む。

「アルカンシエル…発射！」

幾数もの航行艦から、アルカンシエルが発射された。
波動と共に、聖王のゆりかごはあとかたも無く吹き飛んだ。

地上

大歓声の後、局員達は本局も地上も関係なく抱き合ったり握手をしたりと、喜びをわかちあった。

「ドゥーエ姉さま！」

ドゥーエにクアットロが抱きつく。

「久しぶりね、クアットロ！」

嬉しそうに、抱き返すドゥーエ。
スバルがノーヴェに抱きつく。

「やったあっ！」

「ばっ、抱きつくな！」

ノーヴェは赤い顔で怒鳴った。
ティアナは、ウエンディとディードに絡まれていた。

「やったっすよ！」

「やりました」

ティアナの首に手を回して抱きつく二人。

「暑苦しい!」

その怒声が響いた。

そして、ジェイルが、両手を大きく広げていた。

「何のつもりだ」

フェイトが、あまりの光景にザンバーを構える。

「ほら、みんな抱擁をしているだろう? 私も君にしてあげよう」と

「断る!」

ザンバーを振りかぶる。

カキーンという音が、響いた。

でも、すぐに誰も気付かない。

シャアが居ないことに、間もなく気付く。

これは、一人の次元漂流者の記録。

あれから2ヶ月

この事件はこの後にレリック事件、またはジェイル・スカリエッティ事件と呼ばれるようになった。

事件終結のその後、戦闘機人達とルーテシア、アギトはミッド海上の隔離施設。

ちゃんとしてれば世間に出る事ができる。

始めはウーノ、クアットロ、セツテも拘置所に行くつもりだったらしいがジェイルが説得し、海上施設に向かった。

ドゥーエはあの後消えた。

別にドゥーエの罪などたいしたことではない。

ほとんどバれてないのにも関わらず。

ミッド地上は平和を取り戻し、六課施設も修理完了、隊員達も全員職場復帰、ヴィヴィオも、一時検査と一時保護から帰ってきて、なのはやフェイトと一緒に平和な暮らしができるらしい。

そして、シャア・アズナブルは行方不明。

一切の情報がない。

ユーノ・スクライア曰く。

「管理局のシャアが最高評議会を殺してしまっただけは、ただの身内もめ…しかも管理局直々に死人を出すということ、でも第三軍のシャアがやることによって…しかも管理局でないシャアの思想は正義と化す…最高評議会を葬っても管理局に被害は無いし…なによりもシャアが管理局側で最高評議会を殺した場合…六課の名が傷つく…いろんな意味で、シャアは気を使いすぎる」

ユーノの言葉は、六課メンバーの胸に深く突き刺さった。

そして、シャアは、皆の心の中だけの存在へとなった。

六課外

一人の男が、機動六課の前に立っている。

「久しぶりだな」

『そうですね、マスター』

「…では、顔を見に行くでしょう」

男は機動六課内部へと足を進める。

そして、彗星のごとく現れた男はいつしか、管理局の赤い彗星と呼ばれるのであった。

～END～

赤い彗星（後書き）

最終話観覧ありがとうございます！

と言っても、まだまだおまけ版を書くつもりですが（笑）

本編はとりあえず終了しました。

あとは少しづつ備考なども説明しながら短編として後日談やおまけ話などを書いていきたいと思います。

ありがとうございました！

そして、これからもよろしくお願いします！

短編『娘とは、良いものだ!』（前書き）

本編終了後の話しです。

だいぶ不可解な点を残して書いてますけど仕様ですよ。

短編『娘とは、良いものだ!』

シヤア、機動六課に帰ってから一ヶ月の時が過ぎた。

ミッドチルダ、管理局内からは犯罪者ではなく英雄視されているシヤアは今日も機動六課で生活をしている。

現在は午前11時。

今日は隊長陣+シヤア対フォアード陣。
治療が終わったギンガも参加している。

「これで終わりだ!」

最後に残ったスバルが、シヤアの後ろから迫る。

「でりやあああっ!」

シヤアを殴ったはずだったスバル、しかしそれは

「ダミー!?!」

その弾力から、スバルが感じ取る。

そして、ダミーは爆発した。

「はっい! 模擬戦終了!」

なのはの声が響いた。

スバルは地面に顔から落ちる。

「へぶっ！」

妙な声を上げた。

「大丈夫、スバル？」

ギンガがスバルに近寄る。

「ううん、なんとかあ」

起き上がって、苦笑いする。

その他のフォードメンバーも地面に座り込んでいる。

「ずいぶん良くなったぞ」

シャアが降り立ってバリアジャケットを外す。

「ありがとうございます！」

スバルの返事に、何かを言おうとしたが、後ろから気配を感じた。フォード陣は苦笑いしている。

「ヴィヴィオ」

シャアが振り向かずに言うと、背後での動きが止まる。

「何をしようとした」

「えっと…びっくりにせよじつと思っ」

振り返った時に居たヴィヴィオは、苦笑いをしている。
あの一件以来随分大人になった気がする。
やってることは小学生だが

「私はそれでは驚かんよ」

「うう〜」

「…どうした？」

「最近遊んでくれない！」

ヴィヴィオの拗ねたような言葉に、シャアは困ったように笑った。

「それはすまなかった…」

頭を撫でて、ヴィヴィオを持ち上げ、肩車した。

「わ〜！」

ヴィヴィオが驚いてシャアの頭につかまる。

「髪の毛を掴むなよ」

「う、うん！」

ヴィヴィオが高度におどろきながら返事をする。

「よかったね、ヴィヴィオ」

なのはとフェイトがヴィヴィオを見上げる。
フォアード陣と副隊長も近くにより、歩き始める。

「ねえ、パパ！」

「どうした、ヴィヴィオ」

「なのはママとフェイトママはヴィヴィオのママだよ」

フェイトとなのはが頷く。

「パパもヴィヴィオのパパだよ」

「ああ」

その時、ヴィヴィオが禁忌の言葉を解放した。

「チューはしないの？」

沈黙、誰もが気まずそうな表情で歩く。

ヴィータは冷や汗をかいて、シグナムは途中で道を違えた。
なのはとフェイトは顔が真っ赤だ。

「…ねえ、パパ？」

「ヴィヴィオ、私達は別に夫婦じゃないんだよ」

フェイトが言う。

「えっ…ヴィヴィオのパパとママじゃないの？」

ヴィヴィオが涙目になる。

「いや、そうなんだけど…えっと」

フェイトには何も言う術が無かった。

「ヴィヴィオ、私となのはとフェイトはこういう関係だからヴィヴィオの親で居られるんだ…」

「ん？」

「今はまだわからなくて良いが…」

シャアがフツと笑う。

「15にでもなればわかるさ」

そう言っつて、シャアが歩いていった。

シャアの部屋

ヴィヴィオが居る。

「なぜ私の部屋に？」

「パパ、遊んで！」

局員の制服を着たシャアに、ヴィヴィオが抱きつく。

「ぬおっ！」

後ろからの不意な攻撃に驚きながらも、首に捕まったヴィヴィオに振り返る。

そこにはヴィヴィオの満面の笑み。

「大変な娘をもったものだ…なのはとフェイトも大変だな」

シャアは少し楽しそうに言った。

その時、ヴィヴィオの顔にかげりができる。

「ねえ、パパ…ごめんね」

「どうした？」

「ヴィヴィオだって…わかってるよ」

シャアの背中から降りて、泣きべそをかいて言う。

「でも…パパとママたちが、本当のパパとママだったらなって…」

その言葉に、シャアは苦笑い。

「それは無理だな…」

「そつだよね…でも、パパで良い？」

「ああ、昔、父親代わりをする機会を逃したからな」

シヤアとヴィヴィオは部屋を出た。

食堂

珍しく八神家、隊長陣、フォアード陣、シヤア+ヴィヴィオが揃ったの食事だった。

「あれ、ヴィヴィオはピーマン食べれるようになったんやな?」

はやてが隣りのテーブルから声をかける。
ヴィヴィオが顔をしかめる。

「やっぱり嫌いなんやな」

笑うはやてに、ヴィヴィオが頷く。

「ピーマンを嫌っているようでは立派な軍人になれんぞ」

「シヤアさん、ヴィヴィオは軍人じゃありませんよ…ちなみに管理局は軍じゃありません」

なのはの言葉に、ヴィータが笑う。

「アタシらの時の訓練思い出してみろよ、挨拶からなにまで、ギガ敵しかつただろ?」

「そつだな…敬礼の角度までうるさく言われた覚えがあるぞ」

シグナムが頷いた。
やれやれ、とはやてが首を振った。

「そういえば、ヴィヴィオは管理局に入るんですか？」

そのティアナの言葉に、沈黙がおとずれた。

「えっ、えっ!?!」

少し焦るティアナ。

そこで、ヴィヴィオが言葉を発す。

「入るよ!」

全員驚くが、フェイトとなのはの二人はそれ以上に驚く。

「ヴィ、ヴィヴィオ…ほ、ほら、もっと道はあるよ?」

フェイトは声が裏返っている。

「…お、お嫁さんとか!」

なのはも同等である。

しかし、ヴィヴィオは頭を横に振る。

「ヴィヴィオ、なのはママみたいに強くなるの!」

「せ、聖王ハンパねえです」

ラインが苦笑いをした。

「でも、魔法なら教えてもらってたわよね？」

ティアナがヴィヴィオにそう言う。

ヴィヴィオがマズイ、という顔をした。

「ヴィヴィオ、どういうことかな？」

なのはの顔にかげりができる。

「…えつと…ママに言われたって嘘ついて…ザフィーラに教えてもらったの」

ザフィーラは犬型のまま机の下に隠れる。

「ザフィーラだけ？」

「て、ティアナさんにも」

ティアナが顔を背けた。

「頭…冷や」

「まあ、待てなのは…ティアナもザフィーラもハメられたのだから」

「シャアさん、下ネタはちょっと」

「はやてちゃん少し頭冷やして良い？」

「後でだな」

二人が納得した。
はやてが何か喚いている。

「ヴィヴィオ！」

なのはが呼ぶと、ヴィヴィオがシュンとなっている。

「今度からは、フェイトママかなのはママ、それかシャアさんの許可を取ってね」

「ううゝはい」

頷いたヴィヴィオを、なのはが撫でる。

「なのは…母親らしくなったよな」

ヴィータの言葉に、シグナムが頷く。

「あながち、テストロッサが父親だな」

そこにははやてが面白半分で入る。

「じゃあ、シャアさんは愛人やな…で、フェイトちゃんなのはちゃんもシャアさんも好きなんやけど、シャアさんは私を好きなんや、できてきたでえ！」

そのはやてを、ラインが小さなハリセンで叩いた。

「最近冷たいやん」

はやてが寂しそうに言った。
そして、そんな会話の最中。

「でも、なんでヴィヴィオは管理局に入りたいの？」

スバルが聞くと、ヴィヴィオは恥ずかしそうに話す。

「強くなってママたちとパパを守るの！」

その言葉に、なのはが嬉しそうにヴィヴィオを抱きしめて、シャアが微笑。

フェイトに関しては滝のように涙を流している。

「フェイトさんが干からびます！」

エリオが必死で叫んでいる。

そんな賑やかな雰囲気で、食事が終了して各個散会していった。

六課隊舎前

なのは、フェイトが車に乗っている。

「じゃあ、シャアさん、ヴィヴィオをお願いしますね！」

「ああ、フォアードの訓練もしっかり見ておこつ」

なのはとフェイトは軽くお辞儀をした。

「ママたちどこに行くの？」

「えっと…なのはママは一回海鳴の実家に帰って」

「私は本局でお仕事」

ヴィヴィオが頷いて、笑顔になる。

「行ってらっしゃい！」

「行ってきます」

二人の母がそう言っつて、車が走り出した。

「さあ、ヴィヴィオ…訓練所に行くか」

「ヴィヴィオも訓練した〜い！」

「…はやてが暇だろう」

本当に暇だったのはやて。

この後、ヴィヴィオの底知れぬ魔力と、砲撃や基本魔法の訓練をさせられた。

聖王と夜天の主、同じ程度の魔力量だったらしい。だがいつも外を駆け回るヴィヴィオと事務のはやて

翌日、筋肉痛と魔力のガス欠に悩まされるのだった。

おまけ

フェイトは本局にて、ジェイルと画面越しに話しをしていた。ジェイルは机に座って一心不乱になにかをしていた。

「ナンバーズの件ですが…」

その言葉に軽く頷く。

毎度のことなので、ためいきをついて諦めるフェイト。

「あの12人だけですね？」

『そつだよ』

素直に答えるも、フェイトを視界に入れない。

「…それ、そんなに楽しいですか？」

『ああ、楽しいねえ…迷って考えて出す結果はすばらしい！』

そして、ジェイルは顔をフェイトに向けて、机の上においてあったものを画面に映す。

『どうぞだい！これで正解かい！？』

それは、クロスワードパズル。

「あつ、はい…正解ですね」

『やった!どうだ、クアットロ、聞こえるかい…もおオレンジなんて言わせないよ!』

ジェイルは生命操作技術を研究している時よりも生き生きとしていた。

フェイトは思う。

(…この人、本当はアホなんじゃ…)

誰も知らない、ジェイルの一面である。

短編『娘とは、良いものだ!』（後書き）

どうでしょうか、賛否両論あると思います。

しかし、とりあえず更新するまでの期間が長すぎたのでお詫びもつしあげます。

本編には少なかったギャグ要素を入れてみたのですが、自分ギャグセンスがないので心配です（汗）

これからも続くのでよろしく願いします。

短編『体を使う技は、ニュータイプといえども訓練をしなければ……』

八神はやての個人的勤務日誌。

私は部隊長や、もちろんあの英雄シャア・アズナブルの上司でもある。

だからまだわからん彼のことをもっと知らんとあかんと思った。

明日こそは聞こう。

なぜ、あんなことをしているのか……

早朝、フォアードたちが居ない特別訓練場で、シャア・アズナブルは黒いタンクトップとズボンだけで汗を流していた。その光景を黙ってみているシグナム。

「なにをどうした？」

疑問に思い聞いてみる。

「ランニングだ、見ての通りだろう」

「いや、わかった理由は聞かないが……いくらぐらい走った？」

「ざっと、10キロか……慣らしもしないで走るからこうなる」

そう言いながらも、まだまだ走れるようだがそこで空中モニターを展開した。

向かいにいるシグナムは、溜息ひとつはいて去っていった。空中モニターを見て、シャアは頷く。

次は腕立て伏せを始めた。

朝の食堂。

皆が集う食堂の中、はやてがシャアをガン見している。その視線に疑問を持ち、シャアが食事を止める。

「そう見られると、食事をしにくいのだが…」

「シャアさん、なんで朝っぱらからあんなことしてんのか、教えてくれたりせえへん？」

それを聞かれた途端、シャアが眉間を押さえる。となりに居るなのは、苦笑い。

フェイトは良くわからないような顔をしている。

「はやて、私にも悲しい事があるのだよ、聞かないでくれるか？」

そう言つて、食事を終えて席を立っていった。

一番事情を知つて良さうなのはに視線をむけると、苦笑いかと思いきや、いきなり吹き出した。

大爆笑しているのは。

「なあ、なんでシャアさんあんなことやってんの？」

そう聞くと、なのはは爆笑しながら手で静止をかける。

一方、特別訓練場ではシャアが朝と同じ姿になりデータを開く。首にかけているデバイスであるサザビーが輝いた。

『なぜこんなことを？』

「私にもプライドがある…わかってくれサザビー」

そう言って、拳を振るった。

そんなシャアは柄じゃないと思う内心、楽しんでいるサザビー。

『徒手格闘技ストライクアーツ…ですか』

気のせいか呆れたような声で言った。

食堂。

「ストライクアーツ!？」

はやてとフェイトが同時に言う。

なのはが、人差し指を口の前に立てて声を静かにさせる。

「な、なんだってまたそんなこと」

困ったような顔で聞くフェイトに、なのはが吹き出しそうになりながらも説明する。

二人もそのなのは見ていると吹き出しそうになる。

「いやね、この間模擬戦もどきをやった時にね、デバイス無しの戦闘をしたの…そしたらね、シャアさんスバルと決着がつかなくて…それで終わりのはずだったんだけど」

「シャアさんはプライド高いですからね！」

その声はシャーリー。

いきなり三人が顔を近づけている中に現れた。

『うわあっ！』

シンクロして下がる三人。

シャーリーが少し傷ついている。

「まあまあ、少しお顔を」

4人で顔を近づけて話している。

その光景を見た局員たちは不気味に思っただけで食堂を立ち去っていく。

「シャアさん、ちゃんと資料をみてやってるらしいですよ…一部からの情報によるとですね」

空中モニターを開く。

数々のメールが開かれる。

「このPNミスターブシドーさんによると…」

『朝の煌めく少女たちの輝く汗を括目していたら、急に男の筋肉が双眼鏡に映った。』

一瞬、危険なものを見たような気がして眼をこすってもう一度見た。あ、ありのまま起こったことを話すぜ、双眼鏡をもう一度のぞいたとき、そこには恐ろしい光景が映った。

女湯とか、魔王とかそんなちやちなもんじゃねえ、もっと恐ろしい機動六課の片鱗を見たぜ！』

そして、次のミスターブシドーからのメール。

『最近、ずっとシヤア・アズナブルはアレをやってやがる。』

いきなり双眼鏡に映ってもすぐ目を閉じて、視界を筋肉一杯にさせない回避方、ヴァイススペシャルを開発したおかげでなんとか生きながらえているが…そろそろ潮時かもしれないぜ』

そんなメールを読んで、なのは、フェイトの二人は同時に通信を開く。

相手は自分の部隊の副隊長。

「シグナム副隊長、某ヘリパイロットにお灸を据えてあげて」

「ヴィータ副隊長、某ヘリパイロットにお灸を据えてあげて」

通信を切って、シャーリーの話しの続きを聞く。

なぜか大音量で遠くから断末魔（CV・中村）が聞こえた気がしたが気のせいだろう。

「最近、どうやら無限書庫から資料を見つけてベルカ古武術まで

見につけようとしてるとか」

「そこまで…徹底してるなあ」

苦笑いではやてが頷く。

これで一つ謎が解けた。

シヤアからスバルへと、再戦がいつになるかはわからないが、年上だが一応部下だ。

今後の行く末が楽しみ。

それが本音で、やりすぎないでほしいというのも本音だ。

「スバルも大変だね」

フェイトが笑う。

「私がかしましたか？」

突如スバルが現れた。

驚きながらも、噂をすれば影と笑い会う。

スバルはなにがなにかわかっていないようだから、はやてがスバルに一言。

「頑張らなあかんよ、格闘技だけじゃナンバー1なんやから…バチコーン言わせたりなっ！」

スバルにウィンクをすると、スバルは元気に返事をした。

そんなことをやっている間に、シャアは拳を振るっている。
空中モニターの資料を見ながら。

「難しいものだな」

「パパ〜！」

遠くから、義娘^{ヴィヴィオ}が蒼い狼に乗ってやってきた。

狼こと、ザフィーラから降りて、ヴィヴィオはシャアを見る。

「なにしてるの？」

「ああ、ストライクアーツという格闘技だ…中々楽しくてな」

そう言ってシャアは、汗を拭う。

ザフィーラはヴィヴィオの後ろで座っている。

「ヴィヴィオもやってみたい！」

少し驚いたが、頷いた。

しゃがんで頭を撫でる。

「まずは基礎体力をつけなければな、まずランニングだ」

「え〜」

不服そうに言うヴィヴィオ。

パンチやキックがしたいのだろうが、シャアはいきなりさせない。

「ザフィーラばかりにいつまでもたよってられんぞ」

「ん〜、うん！」

ヴィヴィオが走りだす。

疲れたらそのうちやめて、ザフィーラにおぶられて帰ってくるだろう。

言わずとも、ザフィーラはヴィヴィオの後を着いていった。

「ふう、さてヴィヴィオが飽きるまではつきあうにしろ…今の私は打倒スバルにしか興味がないからな」

そう言っつて拳を振るう。

数十分する。

草むらから誰かが出てきた。

「…ヴァイスか」

いたるところに傷を作ったヴァイスが出てきた。

だがどの傷もギリギリ回避したと思えるようなものばかりだ。

「シグナム姐さんとヴィータ副隊長の総攻撃っす」

「良く生きてこられたものだ」

「真ヴァイス・スペシャル…これがなかったら死んでました…今日の俺は阿修羅すら凌駕する領域ですから…では追っ手がくるまえにこれで！」

走り去ってしまった。

あれならば現場復帰もできる気がするが、口には出さないでおこう。
すると、また一人。

否、一人と一匹。

「はあっ！はあっ！」

フラフラで帰ってきたヴィヴィオ。

すぐ尻餅について其の場に寝転がった。

ザフィーラもその隣りにお座りする。

「何キロほど走った？」

息継ぎで精一杯のヴィヴィオの変わりに、ザフィーラが口を開く。

「ざつと5キロは走っただろう……」

「そんなにか」

少し侮っていたので、ヴィヴィオの頭を撫でる。

立ち上がるヴィヴィオ。

「次は何するの？」

これは、真面目に教えるべきかもしれないと心に思ったシヤア。

これから数年後、このストライクアーツのおかげでヴィヴィオは彼女と出会う。

八神はやての個人的勤務日誌。

シャアさんはストライクアーツを始めたそうだった。

30代後半にもかかわらず良く運動をする人だなと感心した。

最近気のせいかわエストが太くなった気がする。

私もストライクアーツを始めてみようか、丁度近くにザフィーラがいる。

ザフィーラなら格闘技は得意だろうから教えてもらえそうだ。

そういえば、ヴィヴィオまで格闘技に目覚めたらしいので、なのはちゃんとフェイトちゃんは少しいろいろ考えてるみたいやった。

シャアさんもシャアさんで、父親役は大変やろうな、と思い少しばかり先が楽しみ。

今日も機動六課は平和でした。

短編『体を使う技は、ニュータイプといえども訓練をしなければ……』

（後書き

久しぶりの投稿でした！

どうだったでしょうか、今回はギャグも結構とりこんでみました。

シヤアがあまりでなかったのが、自分で少し気に入らないのですが、次回はシヤアをもっと輝かせられるように頑張ろうと思います！

P S

ヴァイスとグラハムは中の人つながりってことで（笑）

短編『ジェネレーションシステムの断片<1st>』（前書き）

お久しぶりです！

いやあ、いろいろあってですねえ（言い訳省略

つてことです。

それにしてもジージェネ楽しいですね。

では、久しぶりの更新お読みください！！

感想などお待ちしてます〜！

シェアと他キャラの絡みとか希望がありましたら感想のほうに！

書くかも（笑

短編『ジェネレーションシステムの断片<1st>』

シャア・アズナブルは機動六課のブリーフィングルームで八神はやての話しを聞いていた。

それは、ある遺跡での護衛任務。

内容はほぼ、謎に近い。

信用されている彼に任務が来た。

「その任務は」

「わかつとる、言いたいことはな…ただ、こればかりはユーノ司書長直々の依頼やからなあ」

「ユーノめ、恨むぞ」

そうやって頭を抱えるシャアを見て、はやては笑った。

そしてもう一つと、指を出して言う。

「今回の護衛には一つ秘密があつてな」

それが、一週間前のことだ。

六課解散までもう少ししかないのに、ミッションをやることになってしまった。

しかもティアナとエリオ。そしてシグナムまでセットだ。

「車か…しかもこんな装甲車を」

シャアが吐き捨てるように言った。

装甲車のような車の後部にシヤアは座っている。
椅子は横になっている。

シヤアとティアナ、シグナムとエリオが座っているが、一人だけ異質な存在がいた。

「難しいねえ、どうすれば良いと思う？」

「……」

異質な存在はそう聞く。

聞かれたシグナムが複雑そうな顔をしている。
シヤアも困っているようだった。

「無視しないでくれよ、私も泣くぞ」

「……それにしてもお前は自分の立場がわかっているのか？」

そう聞いたのはシヤア。

聞かれたのはジェイル・スカリエツィその人だ。

「わかっているさ、だから大人しくこれをしている」

彼は3×3のルービックキューブをしている。

確かに大人しくしているので良い。

「それにしても、私が出向くまでの遺跡なのかね？」

その言葉には、威圧感があった。

異常な威圧感が車の中に充満する。

シグナムはレヴァンティンをいつでも抜けるように準備している。

「……私たちも見た事が無い」

「なるほど」

頷くと、車が止まった。

ミッドチルダの森林地帯の一部にその遺跡はあった。洞窟がある。

車から降りたシャアとシグナムとジェイルの三人。

ティアナとエリオと運転手は車で留守番だ。

洞窟に入っていく三人。

初めは鍾乳洞のようになっていたが、途中から変わっていた。そこはジェイルの研究所を彷彿させるような内装をしている。

生命維持装置が良くわからない筒になっている。

「……ここは」

『ジエネレーションシステムの断片』

シャアのデバイス。サザビーが話したした。

驚くと同時に、知っていたのかと冷静になる。

「どづいつことだ？」

『幾多もの世界を偽装した最低のシステム…世界すら構想するほど』

のブラックボックスの塊』

「なるほど…：そう言えば聞いた事がある」

ジェイルがそう言うと、シグナムが驚く。

「知っているのか、スカリエッティ？」

その言葉に、ジェイルは頷く。

この状況になれば嫌でも協力しなければと意識が芽生える。

「ああ、奴ら最高評議会が話していたのを聞いた…：世界全てをどうにかできるほどの力を持つシステム…：奴らが欲しがるわけだ」

『はい、しかし…：それは全てシステムに管理されたシステムのための世界…：いざとなれば平行世界や時間すら融合させてしまうほどの』

「パラレルワールドにタイムパラドックス、世界と世界…：時間と時間の均衡が崩れて崩壊するぞ」

ジェイルとサザビーだけが会話を繰り返す。

なんとなくシャアは理解するが、シグナムはさっぱりと言う顔をしている。

だが、こんなものは関係無かった。

『ただし、ここはもはや廃墟…：どこかの平行世界で破壊されたジェネレーションシステムの一部が入って来たのでしょうか』

「…：処理しようか、ここは危険すぎる」

ジェイルの言葉に頷くシヤア。
それに便乗してシグナムも頷く。

その瞬間、遺跡内部が赤く光った。
アラームが鳴り響く。

『ミノフスキー粒子、ならびにGN粒子が散布されました』

サザビーの声が聞こえる。

聞いた事のある言葉と聞いた事のナイ言葉だ。

そして、機械的な音が前方と後方から聞こえた。

一本道の通路で、挟み撃ちされる。

ジェイルを真ん中に、シヤアとシグナムが前後を押さえる。

シグナムは驚きながらも、レヴァンティンの刀と鞘を構える。

「なんだ、あれは」

騎士甲冑を装備したシグナムが呟く。

目の前には黒い機体。

シグナムは知らないだろう。

その黒い機体はモビルスーツ^{MS}と呼ばれる。

そのMSは<GNX-U02X マスラオ>

紅い粒子を散らしながら、二つの刀を持つ。

刀の一方をシグナムに向けた。

『私が求めるのは、戦う者のみが到達する極み!!』

機械の音声が聞こえたと同時に、二本の刃が上段からシグナムを襲う。

それを受け止めて、シグナムが黒いそいつを睨んだ。

「良からう…私が引導を渡す!!」

シグナムが、その二本の刀を弾いた。

二人の刃がぶつかりあった。

シャアの目の前には紅い機体。

そのMSはGNバスターライフルと呼ばれるそれをシャアに向ける。サザビーが発光した。

「サザビー、セットアップ…あれをするぞ」

光と共に、シャアの姿が変わった。

今回は体に装備するのではなく、体がサザビーへと変わっていた。完全フル装備の姿だ。

敵のMSから機械で音声が発せられた。

『そう、この機体こそ…人類を導くガンダムだ!!』

機体は<CB-0000G/C リボーンズガンダム>

「アムロの声か」

サザビーからこもった声が聞こえる。

リボーンズガンダムのトリガーが引かれた。

それと同時に、サザビーが飛び立つ。

赤いガンダムが、ビームサーベルを抜いてサザビーに襲い掛かる。

同じくサザビーはビームトマホークを抜いてそれを受け止める。

性能は同じかもしれない。

「また敵となるか…ガンダム!!」

横から蹴りを放つ。

それはリボーンズガンダムの脇腹に直撃した。

よろめいたリボーンズガンダム、さらに蹴りで距離を離す。

「行け、ファンネル!!」

ファンネルコンテナから放たれたファンネルは、シャアの意味によつて飛び立つ。

それはリボーンズガンダムを捉えるはずだったのだ。

しかし、リボーンズガンダムの背中からなにかが放たれた。

「なんだ？」

それはファンネルに直撃して相打ちとなって破壊される。

残りファンネルは二基。

『ファンングです』

「なに？」

『インコムと似たような物とを考えてくださって結構です』

頷いて、残りのファンネルを戻す。

そしてシールドの装備された左腕のビームショットライフルを撃つ。リボーンズガンダムは当然のように避けた。

『あの背中のような物は大型GNフィンファンングと呼ばれる強力な兵器です』

「フィンファンング…おもしろい！」

サザビーが光る。

光と共に、シャアの姿は百式へと変わった。

右手にビームライフル。左手にクレイバズーカを持っている。

再びファンングが放たれた。

それを体を捻って避ける。

「ええい、ままよ！」

放たれるビームライフル。

当然のように避けるリボーンズガンダム。

しかし、避けた後の隙を見逃すわけが無かった。

「当たれ！」

クレイバズーカを放つ。

それはリボーンズガンダムで前方で拡散していくつも弾丸が、機体の装甲を掠めた。
しかし、それに躊躇することなくリボーンズガンダムは背中を向ける。

『可変形態、リボーンズキャノン…高火力攻撃が来ます』

可変するリボーンズガンダム。

リボーンズキャノン形態となったその姿を見て、驚愕する。
背中が展開された。

それと同時に四つの訪問がシャアに向けられる。

「っ!？」

超火力砲撃が放たれると同時に、横に避ける。

しかし、避けたのだが振動で吹き飛ばされ地面に転がる。

「くっ、やるなっ!」

『当たらなければどうということは無いのでは?』

「フッ…言うようになった」

シャアが立ち上がった。

『新フォーム 開放』

その言葉に頷く。

期待を持つ、そしてサザビーから音声が出される。

『シナンジュ発動』

シヤアの体が再び輝いた。

外の装甲車の中で、ティアナが何かを感じ取った。
そして、頭を抱える。

「くっ、頭の中で蛇がのた打ち回ってるようだわ」

「大丈夫ですか、ティアさん!？」

エリオが駆け寄ろうとするが、手で制す。
そして立ち上がると、運転席に顔を出す。

運転手は堂々と寝ていた。

足をハンドルにかけて頭に雑誌を乗っけている。

「ちよつと!」

肩を掴んで振ると、雑誌が落ちた。

金色の長い髪を見て、女性だとわかる。
そして、驚く。

「ん…なによ、人がゆっくり寝てんのに」

女性はかったるそうな目をしてティアナを見る。

綺麗に整ったその顔。

忘れるわけもない。ゆりかご事件で協力してくれた。

「ドウ、ドゥーエさん!？」

「あら貴女…ティアナ・ランスターだったわね」

こんなところで会うとも思わなかったし、顔も変えていない。
なぜ捕まえない管理局。
腑抜けたのだろうか？

「どうしたの？」

「あつ、そう言えば…」

ティアナは助手席に座る。

運転席のドゥーエは、今だハンドルに足を乗っけている。

スカートから伸びる美脚に眼を奪われそうになりながらも、伝える。

「遺跡の中に突っ込んでください」

その言葉に、眼を見開くドゥーエ。

しかし、直後に声を上げて大爆笑する。

「……オ〜ケ〜!そういうイカれたことは大好きよ…飛ばすわ、し
っかり捕まっときなさい!」

「聞いたわねエリオ!!」

後ろの席に声をかけると、頭だけが前の席に飛び出してくる。

「どろろろろどろ」

「出発!」

装甲車が走り出す。

エリオが後部座席に吹き飛んだ。

猛スピードで装甲車は、遺跡へと走り出した。

『サイクロプス…発動まで20分です』

短編『ジェネレーションシステムの断片<1st>』（後書き）

あとがき

本当にお久しぶりです皆さん。

この話は後二、三話続きます。

まあ前書きに書いたとおり、シャアと誰かの絡みがみたいなら感想にどうぞ！

これが終わったら書きますので。

それでは、次回をお楽しみに！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8493k/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS赤い彗星～復活のシャア・アズナブル～

2011年4月5日02時24分発行